

どっかの誰かのゲームの世界で

クリネックス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平成で死んだと思ったら昭和に生を受けることになったオリ主。

転生先は剣も魔法も超能力も存在しない平和な世界だと安心したのもつかの間、前世の知識があるが故に目に入るありとあらゆるものがパチモンくさい名前に変わっているという違和感を感じてしまう。

そんな主人公は、今日もパンダココアを啜りながらイナゴマスクを視聴し、ガソガルのプラモデルを組み立てるのであった。

※舞台設定は主人公が高校入学時点で1998年を想定しております。

目次

どっかの誰かのゲームの世界で【共通ルート】

day 0	一年生	10月	1
day 1	一年生	10月	16
day 2	一年生	10月	27
day 3	一年生	11月	36
day 4	一年生	11月	47
day 5	一年生	12月	57
day 6	一年生	2月	68
day 7	二年生	6月	78
day 8	二年生	6月	87
day 9	二年生	9月	98
the last day	二年生	10月	111
1話			122
2話			131
3話			146
4話			157
5話			172
6話			182

絢辻さんと

どっかの誰かのゲームの世界で 【共通ルート】

day 0 一年生 10月

放課後の教室。他の生徒は皆下校し終わり、そこにいるのは自分ただ1人。机に顔をつ伏してはいるが眠ってはいない……ではなく、ついさつき目が覚めたのだ。

それでも顔を上げる気が起きないのは何故なのだろうか。寝起きの無気力感からか、それとも金縛りにでもあっているのだろうか。

理由がどうであれ、起きる気がしないのであれば無理に起きる必要はない。どうせ教師が教室の戸締りを確認するために見回りにやってくるのだ。怒られるわけでもないし声をかけられた時に起きればいいだろう。

頭を乗せる腕がしびれる不快な感覚と微睡んだまま意識を覚醒させない心地よい感覚の両方を味わう。自分は特に眠るのが好きというわけではないのだが教室で眠るのは別だ。ベッドで柔らかい布団に包まれながら眠るのはまた違った魅力がある。

可能なのであればいつまでもこの感覚を味わっていたいのだが、それは許されないようだ。段々と意識がはつきりとし始め、不快さが心地よさを上回り始めた。

そろそろ顔を上げようか、いやもう少し心地よさを感じられていられるだろうか。くだらない葛藤に悩まされていた時、不意に誰かに優しく身体を揺すられた。

「おはよう橘くん。目は覚めた?」

顔を上げた先にいたのは同級生の女の子。艶やかな黒髪を背中まで伸ばし、前髪はぱつつんと切り揃える、俗にいう姫カットに整えている。学校で規定された通りにきっちり制服を着こなしており、その外見を表現するなら優等生としか表現できないような……いや、実際に彼女は優等生であったはずだ。テストの成績は上位。授業も真面目に受け、学級委員にもなっていたはずだ。老若男女、生徒と教師関係なく慕われるような非の打ち所がない性格、それに恵まれた容姿

も相重なつてまるで創作物の登場人物のような女の子。

名前は確か……

「……絢辻？ どうしたの？」

「どうしたのじゃないでしょ。もう下校時刻よ」

彼女は呆れたような笑みを浮かべながらそう答えた。

「そっか、起こしてくれてありがとね」

「ふふっ、どういたしまして。と言っても高橋先生に頼まれたんだけどね」

頼みごと……そう言えば、彼女が頼みごとをされている姿はよく見かける。それは同級生からであったり教師からであったり。さらに言えば生徒はわざわざ他クラスからやってくる人もいるし、教師も担任だけでなく非常勤や今では他学年の教師からもお願いされているようだ。

人が良いと言えいいのか、損な性格と言えいいのか。

ただ少し疑問もある。話してみればわかるのだが、彼女は決して意志が弱いというわけではない。むしろ、自己主張がはつきりとしている人物と言っても良いだろう。それなのに何故面倒な仕事まで良く引き受けているのか。

まあ世の中に人に頼られることに喜びを見出す人もいるのだろうし、変だともでは言えないが。

少し自分の世界に入りすぎていたようだ。空いてしまった間に気まずさを感じたのか、彼女は少しギクシャクしながら自分に話しかけてきた。

「そう言えば橘くんって友達作らないの？」

「友達？」

「そう。一年生ももう10月でしょ？ 先生も心配してたわよ」

公立輝日東高校に進学してはや半年、自分はクラスに親しい友人を作らずにいた。

部活にも入らず、昼食も1人で食べている。ただ、それは別にクラスで蔑ろにされているというわけではない。話を振られれば返すし、団体行動をせざるをえない授業などでは決して和を乱すようなこと

はしていない。黙っているのではなく、そういう状況でジョークを交えながらコミュニケーションを取るくらいはできるぐらいの人間関係は構築している。

それでも自分は特定の仲の良い人物を作らず、割合で言えば1人でいる時間の方が圧倒的に多かった。

「友達、ね」

「橘くんってなにか一線引いてるところがあるっていうか……友達、作ろうと思えば作れるんでしょ？」

「作れたら作ってるって。コミュ障なんだよ俺は」

「コミュ障？」

「コミュニケーション障害の略語」

絢辻は言葉を詰まらせたように苦笑いを浮かべている。

別に自分のコミュニケーション能力に問題があるとは思っていないのだが、友達ができていないのは確かなのだ。こういうのは変に言い訳すると見苦しい……と自分では思っているので、聞かれた際は自虐をすることになっている。

「あはは……でもお喋りするクラスメイトはいるでしょう？ 梅原くんとか、よく話してるじゃない」

「俺の会話の相手の割合的に言えばよく話してるかもしれないけどさ、一般的に言えばたまに喋る程度の関係なんじゃないかな」

「それでも話してお互いに楽しいと思ってるんでしょ？ だってさすがに友達になれると思うわ。友達っているに越したことはないわよ。少なくとも今以上には楽しく生活できるんじゃないかしら」

はたして本当にそうなのだろうか。自分がクラスメイトと楽しく会話できているのはうわべだけの関係だからであり、距離を近づければ心のどこかで違和感が生まれるはずだ。自分はそうなると確信しているし、その原因にも自覚がある。

でもまあ、彼女に反論するつもりはないのだが。絢辻が友人関係の話題を振ったのは教師から小言を言われたというのもあるのだろうが、少なくとも善意から提案してくれたのだろう。その行為を無下にするほど自分は愚か者ではない。

「そうだね、作ってみようか。友達」

「ええ、頑張つて。私でよかつたらいつでも相談にのるからね」

「ほんと？　じゃあ早速いい？」

「もちろん！　なんでも聞いて？」

人のいい笑みを浮かべる絢辻。

笑顔が眩しい。これからふざけるのが申し訳なく思えてくる。

「友達つてさ、どうやって作るんだっけ？」

「ふふつ、そんなもの変に意識する必要はないんじゃない？　もつと

話す機会を多くしてみるとか、相手のことをもつと知ろうとすると
か。それぐらいでいいのよ」

「あー……そうじゃくてさ」

彼女は、ん？と小首を傾げている。

「なんだろう材料っていうか……」

「えっ、材料？」

「そう、水35L、炭素20kg、アンモニア4L。そこまでは覚えてる
んだけど……」

「橘くん……？」

「あとなんだっけ、塩分とか硝石とか、それから硫黄も必要だったよね
？　つてか材料を揃えてからもわかんないかな。なんだろう、こねく
り回したらできるのかな、友達つて」

「橘くん!?　なんの話をしてるの!？」

人体錬成の材料を並べる自分に驚愕する絢辻。おそらくネタは伝
わっていないだろうが、不穏な雰囲気は感じたのか、かなり引き気味
だ。

慌てて冗談だよと告げると彼女は安心したのか、ほっと息をついて
表情を緩めた。

もちろん冗談だ。本当は全部覚えてる。水35L、炭素20kg、
アンモニア4L、石灰1.5kg、リン800g、塩分250g、硝石
100g、硫黄80g、フツ素7.5g、鉄5g、ケイ素3g、その
他少量の15の元素。

15年も経つて、こんなくだらないことを覚えているのはおかしな

ことだと思っただが。しかも、大切なことは忘れてしまったというのに。

「あはは……橘くんってやっぱりおもしろい人なのね」

「そうでもないって。こんなくだらないことにユーモアを見出してくれる絢辻さんの感受性が豊かなだけだと思うよ」

「本心で言ってるんだけどな。でもそうやってすぐに自虐に走るのはマイナスかも」

そう言うと、彼女はカバンを肩にかけ教室の入り口へと歩いて行った。

「私そろそろ帰るわね。橘くんはまだのこる？ 鍵を閉めなきゃならないんだけど」

「いや、俺ももう帰るよ。妹からおつかいも頼まれてるし」

「橘くんって妹さんいたのね」

「うん。中3で輝日東目指して勉強中。……つと、はい。閉めてくれて大丈夫」

まとめた荷物を抱えて廊下へと出ると、絢辻は教室の鍵を閉めた。

廊下を見渡すが静まり返っており、他のクラスにも人がいる気配はない。どうやら自分たちが最後の生徒だったようだ。

「それじゃあね、橘くん。私は鍵を返しに職員室に寄ってから帰るか」

「じゃあね絢辻。また明日……、また明日の前に1ついいかな」

「ん？ どうしたの？」

「いや、大した事じゃないんだけどさ。俺は結構……」

——俺は結構、今の人生を楽しんでるんだ。

◆◆？◆

絢辻と別れた後、自分は妹から頼まれた買い物を済ませるために駅前の繁華街を歩いていた。肩を撫でる乾いた風が夏の終わりを実感させる。今の時刻は5時15分。まだ日没までは30分もあり、それ

なりに人も見受けられる。

頼まれた買い物は新しくできたケーキ屋のシュークリーム。うちのクラスでも最近よく話題に出るものだ。特別有名な店だとか、行列ができるだとかいうわけではないらしいのだが、女の子の間で情報が共有されるということは確かな味なのだろう。

自分の妹、橘美也は中学三年生で今は受験勉強に勤しんでいる。志望校は自分の通う公立輝日東高校だ。偏差値自体は高すぎるわけではないのだが、それでも初めての受験となればプレッシャーも大きなものだろう。最近は勉強を見てあげているのだが、一生懸命努力しており、何かご褒美をと尋ねたところ頼まれたのがシュークリームであった。

おそらく女の子がメインターゲットであろう店に男子高校生が1人で買い物に行くのには多少抵抗があるが、これも可愛い妹のためだ。喜んで承諾した。

メモ帳に簡単に描かれた地図を元に店の場所を探していると、うちの学校の制服を着た女の子が他校の男子にナンパされている姿が目に入った。

彼女の姿には見覚えがある。というか、うちの学校の男子で彼女の名前を知らない者はいないだろう。

森島はるか。1つ上の代の生徒でとてつもない美人として有名だった。ルックス、スタイルともに抜群で、噂では彼女目当てで輝日東高校に進学した男子生徒もいるといった話だ。毎日ラブレターをもらうのは当たり前、多い日は2通以上もらうこともあるという冗談のような話も彼女なら納得できる。すでに自分のクラスでも玉砕者が何人か出ているのを知っている。

まあ自分には関係のない話なのだが。美人に興味がないわけではないのだが、彼女の場合余りにも距離が遠すぎるというか、まるで雑誌のグラビアアイドルを見ているような感覚なのだ。身近な存在だという実感があまり得られない。

学園のアイドルにもイマイチ興味が湧かないので首を突っ込む気は起きない。無視してきつさと買い物に行こう。

そう思ったところで、なぜだか彼女の方から視線を感じてしまった。気のせいだとは思うのだが思わずそちらに顔を向けるとバツチリと目があった。

困ったような、助けを求めるようなそんな目。

思わずため息が出る。こういう事をするのは柄ではないのだが、ここで行動しなければ男として……というか、人として終わってしまうだろう。

大きく深呼吸をして覚悟を決める。

「おーい、先輩！　こんなところで油売ってたんですか？」

知り合いを装って駆け寄ると、困惑する先輩に黙っているようにとアイコンタクトを飛ばす。それから彼女を口説いていた男子生徒が言葉を発するよりも先に口を開かなければならない。

悪い絢辻、ちよつと名前借りる。

「もう5時過ぎですよ先輩！　絢辻先輩が時間に厳しいの知ってるでしょう？　文句を言われるのは後輩男子なんですからね、まったく「えっ？　えーつと、ごめんなさい。ちよつとこの人に捕まっちゃつて……」

「ん？　先輩のお知り合いですか？」

「んーん、今ここでナンパされたの」

こちらの行動の意図を察したのか、先輩は話を合わせてくれた。

直接的ではないが、自分が邪魔者であると伝えられた男子高校生はバツの悪そうな表情を浮かべている。

「はあ。ナンパでもなんでもいいですけど、集合時間過ぎてるんですからね！　ぼくは先に行きますよ！」

「ま、待って待って。一緒に行きましょうよ！　……ということでごめんなさいね？　お茶には他の子を誘ってあげて」

「えっ……あー、うん。ごめんね、時間取らせちゃって……」

「ん、大丈夫よ。それじゃーねー！　ほら、行きましょう？」

そう言った森島先輩は、自分の手を取ると強引に引っ張って移動を始めた。目的のお菓子屋とは逆の方向に。

「ちよ、先輩！　そっちは違うんですけど！」

「ごめんなさい！ 話は後で聞くからとりあえず付き合ってください！」
すまない妹。今日はシュークリーム買ってあげられないかもしれない。
ない。

自分は先輩に手を引かれながら、逃げるように繁華街を後にしたのであった。

◇ ◆ ?
◇

先輩との2人の逃避行の末、たどり着いたのは寂れた公園であった。

適当に選んだベンチのそばまでつくると先輩は掴んでいた手を解放してくれた。

いくら季節が秋だとはいえ、それなりの距離を全力疾走したので体温が高まっている。ひたいを流れる汗をブレザーの袖で拭おうとしたところ、隣からハンカチを差し出された。

「はあ……はあ……、よかつたら、それ、使って？」
「……どうも」

手渡されたハンカチを受け取り汗を拭く。デフォルメされたダックスフンドが描かれた可愛らしいハンカチだ。確か妹も似たものを持っていたはずだ。

顔の周りに当てると、なんだかいい匂いが漂ってくる。不思議だ。自分のものと一体何が違うのだろうか。

一息つき、呼吸も整ったタイミングを見計らって先輩が話しかけてきた。

「ふう……さつきはありがとう。すつつつごい、しつこいナンパだったから困ってたんだ」

「そうなんですか。ま、余計なお世話でなかったのなら良かったです」
「とつても助かったわ。えーつと、あなたは後輩よね？ 名前は？」

「橘です。橘純一。輝日東の一年生ですよ」

「そう、橘くんね！ わたしは森島はるか。2年生よ」

知ってる……のだが、わざわざ口に出す必要はないか。

そんなことよりも早めに会話を終わらせて店まで急がなければ。シュークリームは生ものだし、夜になると売り切れてしまうだろう。

「えっと、森島先輩？ 俺ちよつと用事があつて、もう行つていいですか？」

「ん？ 用事つて？」

「新しくできたケーキ屋あるじゃないですか。あそこのシュークリームを買つてきてつて妹に頼まれてるんですよ」

そう告げたところで先輩の方に顔を向けると、彼女はなんだか申し訳なさそうな表情を浮かべていた。

「どうかしました？」

「あのね、そのシュークリームなんだけど、わたしが買ったので確か最後だったと思う」

「マジすか……ちなみに譲つて貰うつてことは？」

「ちよつと難しいかな。お腹の中だし」

冗談めいた表情でお腹を撫でる仕草をする先輩。

残念だが諦めるしかないだろう。美也には何か代わりのものを買つて帰り、シュークリームは明日まで我慢してもらうことにする。

それにしても迂闊だった。ある程度人気の店なら売り切れまで考慮すべきだったろうに。明日は居眠りなどせずすぐに店に向かわなければ。

「あー、しょうがないですね。妹には何か他のもので満足してもらふことにします」

「ほんと？ 良かったらお礼に奢ろつか？」

「いや、そこまでする必要はないですつて。てかさろそろ移動しません？ あんまり遅くなるとあれですし」

時計の針は5時半を指していた。夕飯の時間的にそろそろ帰っておきたい。先輩も女の子だし、これ以上遅くなると親御さんも心配するだろう。

「そうね。もうすぐ日没だ。橘くんは家はどつちななの？」

「こつから徒歩で20分くらいですかね。先輩は？」

「わたしは電車、じゃあここで別れだね」

「送りましようか？ あの人と途中で鉢合わせたら気まずいでしょう？」

「……ほんと？ 迷惑じゃない？」

「まあ、ついでですし」

「ありがとう、と飛び跳ねながら全身で喜びを表現する先輩に思わず笑みがこぼれる。

「なんだろう、不思議な人だ。近くにいるだけでこちらの気分まで明るくなるような、そんな魅力が彼女にはある。」

「あっ」

「ん？ どうかしました？」

「んーん、やっと笑ったなって」

「……俺がですか？」

「そう！ 今の顔、すごい良かったわよ！ グッド！」

グッド？グッド、good、ぐつど。

何かを褒められたようだ。笑った顔を？そんな馬鹿な。

別に普段から表情が死んでいるというわけではないはずだ。彼女と出会ってからも愛想笑い程度は適所で浮かべていた。それなのに初めて笑ったとはおかしな話だ。

「……ただの変わり者だと思っていたのだが、案外人の感情に鋭いらしい。」

言葉に詰まり黙ってしまった自分に見兼ねたのか、先輩はこちらの手を取って引っ張ってきた。

「ほら、橘くん！ 妹さんに何か買って帰るんでしょう？ 早く行きましよ！」

「あー、はい。わかったんであの、手離してくれませんか？」

「なんで？ わたしと手繋ぐのいや？」

「いやじゃないですけど、この姿を先輩のファンに見られたらきつと俺殺されちゃうんで。流石に自分の命の方が大事なんです」

「大丈夫！ その時はちゃんとわたしが庇ってあげるから！」

「むしろ事態が悪化する気がするんですが……」

なんとたつて高校の男子生徒の大半を敵に回すのだ。味方の存在しない自分の立場では血祭りにされる未来が容易に想像できる。

こちらの心配をよそに先輩は手を離す気はないようだ。この人大丈夫なのだろうか。これが普通の男子高校生だったら絶対恋に落ちていたはずだ。

彼女がそれに気づいていないのがタチが悪い。こういう女性を魔性というのだろうか。

まあこの時間帯に他の学生とすれ違うということも少ないだろうし、気にしないことにする。役得役得、こっちは寂れた日常を送る男子高校生なのだ。こういう時ぐらい青春してもバチは当たらないだろう。

そんなくだらないことを考えながら先輩に手を引っ張られ、帰路につくのであった。

◇ ◆ ? ◇

先輩を駅へと送り、コンビニで妹のために肉まんを購入しやつとことで家へと到着した。腕時計の針は既に6時を通り過ぎている。

玄関の鍵はしまっており、チャイムを鳴らすと家の中から元気な声の返事とドタバタ音が聞こえてきた。

ガチャリ、と鍵を開ける音が聞こえたと思うと勢いよく扉が開けられた。

「おかえりにいにい！ シュークリーム買ってきてくれた!？」

「あー、悪い。色々あつて出遅れちゃつてさ、売り切れてたんだ。代わりにまんま肉まん買ってきたから申し訳ないけど明日まで我慢してくれ」

そう告げると妹の顔が険しくなる。

「はあ、なにさ色々つて。どうせ教室で居眠りでもしてたんでしょ」

「ちげーよ。先輩がナンパされててさ、それを助けるのに芝居打つたら時間過ぎちゃって。ほんとごめんな、楽しみにしてたのに。明日こそちゃんと買ってくるから」

嘘をつく時のコツはいくらか真実を混ぜることだと聞いたことがある。兄のことに関しては異常なまでに鋭い美也だが、どうやら納得してくれたようで道を開けて家に上げてもらえた。

「母さんは？ いないの？」

「うん。お仕事が遅くなるから2人で食べてって」

「どうする？ なんか食べに行くか？」

「んー、まんま肉まん買ってきてくれたんでしょ？ 後は家にあるものでいいや」

「そつか。じゃ俺もインスタントラーメンにでもするわ」

「ん、じゃあみやーが作るよ。にいには手洗ってきて」

「はいよ、頼むわ」

「あ、ちよつと待ってにいに」

靴を脱ぎ、二階の洗面所まで移動しようとしたところで美也に呼び止められた。

「おかえり、にいに」

「……ただいま、美也」

◇◆？◇

食事も終わり、自分の部屋へと戻り一息つく。今日は珍しく人と沢山触れ合った1日だった。

書くことを忘れないうちに日記帳を開く。日記は自分が物心ついた頃から続けている、数少ない習慣だ。

自分、橘純一には前世の記憶というものがある。それもかなり特殊なものだ。

具体的にいうと、自分の前世の記憶というのは平行世界のものなの

だ。

平成生まれで高校生の頃に事故で死んだ自分だが、気がついてみると昭和の時代に新たに生を受けていた。

いや、それだけならまだ平行世界だとは断言できないだろう。

確証を持ったのは小学生に上がる頃だっただろうか。児童向けの特撮番組を見た時の既視感。それが始まりだった。

テレビから流れていたのはイナゴマスクという番組。内容は単純、主人公が不思議なベルトでイナゴマスクへと変身し、悪の組織の怪人をやっつけるというものだ。

前世の記憶を持っていたとはいえ、幼いが故にそれをうまく受け止められずにいた自分であったが、その番組には確かな違和感を覚えた。

自分の知っている特撮と違うのだ。いや、内容自体は大した変わりはないのだが、名前が何かパチモンくさい。

その感覚はこれからの人生で数多く襲ってくることになった。

この世界のものには前世の記憶に存在する情報からどこかずれている。有名だった曲はどこか歌詞が違っていたり、芸能人の名前も何かがおかしい。コンビニや、ジュースの名前まで前世のものとは一致しない。もちろん、全部という訳ではないが。

この世界は何かの創作物を基準とした平行世界だということ。それが中学へと上がり、自我の形成が完了した頃にそれらの経験を踏まえて自分が導き出した答えであった。

そしてそれは高校へと入学し確証へと変わった。

公立輝日東高校はハッキリ言って異常なのだ。公立学校のくせに土曜日も授業がある。校舎が異様に広い。冬休みが極端に少なく、その代わりに他の休みが長い、など。

常識というものと照らし合わせると余りにも不自然な、創作物の世界だと何も疑問を抱かないようなそんな舞台設定。

そう、自分は前世の記憶が存在するが故に気づいてしまったのだ。この世界がどっかの誰かのゲームの世界だということ。

まあ、だからどうしたという話なのだが、自分の家庭環境は恵まれ

ているし、何か危険なことに巻き込まれるということもない。物理法則や世界の真理も変わってはいないだろう。世界が多少変わっていても、前世の自分の常識から逸脱しない程度の違和感なのだ。

それでも物の名前程度のものに一々違和感を感じるというのは結構なストレスではあった。しかも、それを他者と共有できないともなればなおさらフラストレーションは溜まる。

もちろん、今はもう割り切れているのだが。細かいことを一々気にしていてもしょうがないし、おとなしく新しい生活を楽しんでいる。

そう、ありとあらゆるものに違和感を感じるということは、裏を返せば何もかもが新鮮だということなのだ。それに気づいてからは毎日が一気に楽しくなった。

話が逸れてしまったが、日記を書いているのは日常に抱いた違和感を記録していた名残だ。今では普通の日記を書いているが。

そういえば、今日ふと思ったのだがこの世界はもしかしてギャルゲーを基準にした平行世界なのではないだろうか。それなら不自然な授業日程や、異様な広さの学校にも納得ができる。

ヒロインはもちろん森島先輩が候補に上がるだろう。後は……絢辻と、教師枠に高橋先生。うん、違和感がない。

他にもうちの高校は全体的に女の子のレベルが高いし、十分ありえるはずだ。

まあ結局は自分には関係ない話なのだろうが。現実世界にフラグなどのふざけた要素は存在しないだろうし、まだまだクソガキな自分はそこまで悟った人生観は抱けない。

結局のところ前世の世界とは何も変わらないのだ。その上で自分の立ち位置を考えると、女の子を口説くだとかは考えられない。

コミュ障ぼっちに必要なのは女の子ではなく友達なのだ。現状それも余り期待できないのだが。

……このままでは話がまとまらなそうなので強引に締めるとしよう。

拜啓、神様へ。
自分、橘純一は第2の人生をエンジョイしています。
敬具。

day 1 一年生 10月

美也にシュークリームを買いそびれた翌日。今日も今日とて自分は学校への通学路を歩いていた。

自宅から輝日東高校までは徒歩で20分程度。それだけだと遠いような近いようなという中途半端な距離で終わるのだが、問題は高校の位置する場所だ。

輝日東高校は丘の上に校舎が建てられており、5分程度はそれなりな傾斜の上り坂を歩かなければならない。

これが結構キツイのだ。いや、別にバテるほどでもないのだが。それでも毎日歩かなければならないと思うと精神的な負担が重なり、朝の気力というものの大半を奪われてしまう。

「あつ、じゅんいちー！ おはよー」

そんなこんなで憂鬱な気分のまま歩いていると、後ろから突然声をかけられた。知り合いの少ない自分を名前呼びする生徒など限られている……というか、二人しかいない。聞き馴染んだ声からも大体相手は想像つくが一応確認のために後ろを振り向いてみる。

「……おはよ。朝から元気いっぱいだなあ兄弟？」

「きよ、兄弟？ わたしは純一の幼馴染だよ！ 忘れちゃったの？」

「えっ、いや、あー。悪い、寝起きで頭の回りが悪くてさ。おはよう梨穂子」

顔を向けた先にいたのは予想通りの人物。

桜井梨穂子。幼稚園の頃からの幼馴染だ。

栗色の髪を肩より少し下まで伸ばし、そこから色々弄ったような感じの髪型。それから、おっとりとした顔立ちに出るところが出るスタイル。最近は出なくてもいいところまで出始めて悩んでいるようだが、十分男好きするようなスタイルだ。

明るく無邪気な性格ゆえに、話をしていると度々軽口が通じずペースを乱されてしまうのだが、それでも一緒にいて気苦労しない友人だ。

幼馴染ということもあり彼女と自分の家は割と近いのだが、今日の

ように登校中に会おうということはあまりない。というのも、彼女は自分とは違い持ち前の人当たりの良さから友人が多く、大抵は他の同級生と一緒に登校しているからだ。

「あれ？ いつも一緒に歩いてる子は？」

「香苗ちゃんはちよつと用事があるみたいで先に学校に行ってるんだ。だから今日は一人なの」

「そっか、じゃあ久しぶりに一緒に行く？」

「そうたずねると彼女は大きく頷いてから横についた。

幼馴染で家族ぐるみの付き合いはあるのだが、やはり異性ということもあり高校に入学してからは彼女と行動を共にする機会は減ってしまっていた。彼女のことを妹のように思っている身としては、なんだか寂しいような気もしなくはない。

まあ仕方ないことなのだろうが。彼女は幼馴染目線で見ても美人と言える女の子だ。今はまだ恋人はいないようだが、彼女を放っておく男は少ないだろう。いずれは完全に自分の元を離れる時が来るのはわかってる。

センチメンタルな気分になりながらダラダラと通学路を歩いていたら、ふと梨穂子が口を開いた。

「そういえばさ、純一って部活はやらないの？」

「部活？ まあ予定はないかな」

「ふーん、興味もなし？」

「いや、なんかやりたいって気持ちはあるんだけど……いかんせん出遅れてしまったというか……」

「そっか！ ならなら茶道部、入ってみない？」

「茶道部ねえ……」

茶道部は梨穂子が所属している部活だ。OGが月に何回か指導をしに訪れたり、校舎から離れたところに一戸建ての部室が作られているような恵まれた部活なのだが、部員数が圧倒的に少ないという事情を抱えていた。3年の先輩は受験のため引退しており、現状は2年の先輩2人と梨穂子の3人で活動している。

実は自分は、唯一の一年生の部員である梨穂子の友人という立場で

あるが故に、先輩方からの熱烈なラブコールを食らっていた。それはもう、顔を合わせるとなぜか記入済みの入部届けを叩きつけられるほどに。

あの綺麗な部室を自由に使えるという条件は非常に魅力的ではあるのだが、入部したら最後、最年少部員と唯一の男子部員という立場が重なりパシリとして使いたおされる未来が目に見えているため、現状は入部を渋っていたのだ。

「あの先輩達が引退したら考えるわ」

「あはは……るっこ先輩も愛歌先輩もいい人なんだよ？　ちよつと強引なところはあるけど……」

「俺は男子だから入部したら最後、その強引な部分を存分にぶつけられる未来が簡単に想像できるんだよ」

流石に1人で2人のパシリは荷が重すぎる。そう告げると梨穂子は顔に苦笑いを浮かべた。

「そっかあ、残念。入部したくなったらいつでも声かけてね？　わたし、これでも結構お茶淹れるのうまいんだ」

「お茶淹れるって……点てるの間違いだろ？」

「んーん、淹れるであってるよ。最近抹茶はほとんど点ててないかな。緑茶の淹れ方ばかり上手くなっちゃった」

あはは、と朗らかに笑う梨穂子。

それでいいのか茶道部。

「でもさ、純一って相変わらず友達少ないんでしょ？　部活は入って見た方がいいと思うんだけど……」

「……まあ機会があったらでいいよ」

「そっか。寂しくなったらいつでもB組に遊びにきていいからね？」

「いや、流石に高校生にもなって他クラスの女の子のどこまで行くのは恥ずかしいって……」

そんなこと気にしなくていいのに、と彼女は柔らかく微笑んだ。

この子はいつもそうなのだ。鈍臭いようでもどこまでも他人を気にかける優しい子。自分は彼女のそういう暖かい雰囲気が好きで、幼い頃からよくそばにいたのだと思う。

不意に会話が途切れてしまった。別にその程度のことではいちいち気まずさを感じる程度の子ではないのだが、気を使ったのか梨穂子は話題を変えて話しかけてきた。

「んーと、それより純一？ 昨日はテレビみた？」

「ん？ ちよつとは見てたけど。なんの番組？」

「えつとね、昨日のおいしいん坊將軍なんだけど、すつごい面白かったんだ！」

おいしいん坊將軍……語感的には「美味しんぼ」＋「暴れん坊將軍」といったところだろうか。

前にも言ったがこの世界の創作物の名前はどこかパチモン臭いだ。例えば仮面ライダーがイナゴマスクであったり、機動戦士ガンダムが機動戦士ガソガルであったり。他にもファミ通の代わりにエビ通という雑誌が刊行されていたりする。内容自体はオリジナリティに溢れており普通に楽しむことができるのだが、なぜかネーミングセンスだけが壊滅しているのだ。

イナゴマスクってお前。そのタイトルでゴーサインを出した奴をしばき倒したくなる名前だ。ガソガルもひどい。あと十数年経てばガソガルバルバトスルプスレクスが現れるのだろうか。言いつらいとかいうレベルではない。

「あー、ちよつと見てないかな。てか聞いたこともないんだけど、新番組？」

「そうー。えつとね、名前じゃ想像しにくいと思うんだけど結構コメディ要素が強くて面白かったんだ！昨日はお母さんと笑いつぱなしかったよ」

「なんか段々気になり始めてきたんだけど。でも1話見逃しちゃったし、どうしょ」

「録画してあるから今度ビデオ貸してあげる！」

「マジ？ ありがとう」

そうして梨穂子が説明する謎のテレビ番組についての話を聞いて盛り上がりながら、学校へと向かうのであった。

「おい大将、ちよつといいか?」

4限の授業が終わり、昼休みに入ったところでクラスメイトの梅原正吉に呼び止められた。

彼との出会いは小学生の頃。そこから中高と同じクラスになることが多く、あまり人付き合いが良くない自分にとって数少ない友人だ。

ただまあ、自分が特別彼と仲が良いというわけではない。彼は持ち前の明るさと面倒見のいい性格から交友関係が広く、他に仲がよい友人も多くいる。それが故に自分と特別会話する機会が多いというわけではないのだ。

だからこそ、珍しく彼に呼び止められて驚いた。

「どうした、まっちゃん。なんかあったか」

「ああ、大有りだ。実は今日、大物のお宝本の取引をマサとする予定があるんだが、そこで我らが大将に立会人になってもらいたいんだ」

クソほどどうでもいいことだった。

彼の指すお宝本とは、いわゆるエロ本。それも直球のものではなくグラビア本のことだ。

だが、たかがグラビア本と侮ってはいけない。彼らの持つそれは多種多様に渡り、様々な性癖に対応したいわばバイブルなのだ。

今までに何度か見せてもらったことがある。この間見せてもらった本は確か「ローアングル探偵団」と言ったか。内容は様々なコスチュームの女の子をローアングルから撮影したグラビア本であった。ちよつとニツチすぎる性癖な気もしなくはないが。

自分が彼らの本の取引の立会人として呼ばれることはたまにある。その理由は2つ。

1つ目は、自分が彼らの性癖に理解がありつつ、それらの本を手にしようという欲求を持っていないのが知られているため。

2つ目は、性に目覚め始めた中学生の頃の彼らに、自分がそれらの本を融通してやった過去があるためだ。

梅原が自分を呼ぶ大将という呼び名もそこからきている。エロの大将、略して大将。非常に不名誉な名前だが、一部では定着してしまったがために不本意ながら受け入れている。

どうせ昼休みは暇なのだし付き合っただけでやることにするか。大物の取引と言っているし、多少の興味はある。

あと立会人を担うときは飲み物を一本奢ってもらうのが条件だ。それなりの見世物を見学できながら飲み物までもらえるということであれば十分だろう。

「ま、構わねえけど」

「おう！ 助かるぜ！ それじゃあ15分後に2号館の4階の階段に来てくれ。ココアでいいか？」

「んー、いや、今日はりんごジュースって気分だわ」

「オツケー！ 遅刻しないでくれよ！」

「まかせろ」

そう言うのと梅原は自分のカバンを大事そうに抱えて教室を後にした。

なんと言うか、グラビア本程度であそこまで情熱的になれる彼らが羨ましい。自分には前世の記憶があるが故に、そう言う青臭いエロにはなびかなくなってしまったのだ。

大人になるってことは代わりに子供を捨てることだと言う言葉を何かの本で読んだことがあるが、きつとこういうことなんだろう。

違うか。

そんなアホなことを考えているうちに、遠くで梅原とのやりとりを眺めていたのか、絢辻がこちらにやって来た。

「橘くん、やるじゃない！ その調子でいけば友達くらい簡単にできるはずよ！」

「そ、そうかな……？」

思っクソ勘違いされているようだ。先ほどの会話はエロ本の取引の密約だと言うのに。

「頑張つてね橘くん！ 私応援してるから！」

そう言い残すと彼女は友人の輪へと戻っていった。

苦しい。純粹な善意が苦しい。

彼女は自分が友人と昼休みを過ごすのを応援してくれているようなのだが、これから行われるのは性癖を拗らせた男子高校生によるエロ本交換会なのだ。彼女の考えているようなキラキラとしたものではなく、どす黒く淀んだ汚い欲望のぶつけ合いなのだ。

ごめん絢辻。でも俺達は君が考えているより何倍もアホなんだ。

◇ ◆ ?
◇

「えー、それではこれより梅原、マサ両氏によるブツの取引を始めさせていただきます。立会人は私、橘純一が努めさせていただきますで、えー、どうかご両者共公正な手段での交渉をお願いします」

「おう！」

「頼むぜ！」

昼休み開始からきつかり15分後、自分達は二号館の奥にある人通りのほとんどない階段に集合していた。

二号館は主に移動教室で使われるため昼休みの間は人が訪れることは少ない。しかも階段は死角になっており、なおかつ足音だけが響くため誰か来た時すぐに察知できる場所なのだ。

「えー、それでは先に梅原氏、ブツの提示をお願いします」

「よしきた！ 俺が今回手に入れたとっておきはこいつだ！」

梅原は袋から取り出した本を自信満々に見せつける。

なになに、タイトルは『部活少女足裏大全集』

なんだこのフェチズムの塊みたいな本は。男子高校生が読むものじゃねえだろ。

「なっ!? これは余りにもニーズが狭すぎたが故に第1版以降生産されていない伝説のお宝本!？」

「詳しいなあ、おい。お前ら不健全すぎだろ」

「ふっ…褒め言葉として受け取っておこう」

褒めてねえぞマサ。正気に戻れ。

「えー、ぐほん。気を取り直して、マサ氏もブツの提示をお願いします」

「梅原。今回の取引、お前の言葉を信じて最高のブツを用意しておいて良かったぜ……」

「ああ！ 見せてくれよお前のお宝を！」

「ほらよ！ とくと目に焼き付けやがれ！」

そう言つてマサはカバンから一冊の本を取り出し自分達の前に叩きつけた。

タイトルは……『絶対領域』

あつ、思つたよりも健全だった。表紙とタイトルからもわかるように、どうやらチラリズムに焦点を置いたグラビア本のようだ。

「おいおい、俺は小学生じゃねえんだぞ？」

「まあ待て、黙つて7ページを開いてみる」

半信半疑ながらもページをめくる梅原。マサに言われたページを開くと、そこには整った顔立ちの少女が制服姿でスカートをたくし上げてる写真が掲載されていた。まあ、ちよつとえっちな。

「お…おまえ、もしかしてこれって……」

「そう。今をときめく美人女優、七瀬愛の数少ない素人グラビア写真だ。プレミアものだぜ？」

自分は余り芸能人に詳しくないのだが、彼女の名前には聞き覚えがある。

どうやらそれなりに価値のある品物だったようだ。

絶句している梅原にマサが話しかける。

「どうだ？ これなら1対1でもレートは釣り合ってるんじゃないか？」

「……いいのかこんなもの貰っちゃって」

「なあに。こっちの嗜好を理解して最高の一品を用意してくれたダチへのお返しにはこれくらいは必要だろ？」

「マサっ……おまえってやつは……！」

「へっ……その代わり新しいのが手に入ったら融通きかせてくれよ？」

「ああ、もちろんだぜ相棒 やっぱり持つべきものは友達だよな！」

「なあに水臭い事言ってるんだ相棒！ 当たり前前のことを言うんじゃないよ！」

がっしりと手を取り合う2人。血と汗ではなくイカと栗の花の蜜に塗れた友情は最高に汚らしい。

絢辻が笑顔で送り出してくれた先にあつたものがこれだと考える
と複雑な気持ちだ。ズリネタを共有して感極まる男子高校生など俺
は見たくなかった。

異様な雰囲気広がっている狂った空間が出来上がってる中、突如
として下の階からこちらに向かってくる足音が聞こえた。

バカ2人は気が高まっており気づいていないようだ。急いで知ら
せて片付けさせなければ。

「おいバカども！ 人が来るぞ！ 急いでその汚ねえ本を仕舞え！」

「えっ!? ちょ、マジか！」

「やべえ！ ここでもし没収されたら洒落にならねえぞ！」

慌てて本をカバンに押し込む2人。

証拠を隠し終えたところで、こちらに向かって来る足音に耳をすま
せながら、緊張した面持ちでやって来るであろう方向を見つめる。

段々と足音が近づいて来て、とうとうこちらが視界に入るであろう
位置に到達したようだ。

そこにいたのは……

「……森島先輩？」

「あつ、よかった！ 橘くん、今ちよつといい？」

突然現れた学園のアイドルが、なぜかそばにいるクラスメイトの名
前を呼んだことで、2人の視線がこちらに向けられる。

あれ？ これってもしかして結構まずい状況なんじゃないか？

「あー、先輩？ どうしたんですか？」

「んーつと、ほら、昨日のお礼がしたくて。もし良かったら放課後一緒

にシュークリームを買いにいかないかなーってお誘いをしようと思つて来たんだけど……お邪魔だった？」

「いや、そんなことはないですけど……でもほんと、昨日のことは気にしないでくださいって」

「んー、それじゃお礼とか関係なしでならどう？ 今日放課後、私と一緒にケーキ屋に行つてくれない？」

待て。その返しはまずい。

恐る恐る隣に目を向けると、マサと梅原は血の涙でも流しそうな表情でこちらを睨んでいる。

「それじゃあ橘くん！ 授業が終わったら中庭の噴水で待ち合わせしましょう。もしすっぱかしたりしたら泣いちゃうからね？」

「えっ、あ、ちよ、先輩!? 待っ……」

言うだけ言い残してその場を去ろうとした先輩を追いかけようと立ち上がるうとしたのだが、両隣から肩を掴まれその場に抑え込まれてしまった。

「森島先輩とお……？」

「二人でケーキ屋ねえ……？」

ハイライトの消えた瞳でこちらを見つめる二人。肩を掴む握力が段々と増している。気のせいであるとは思うのだがミシミシという音まで聞こえてきた。

「おっ……落ち着けよてめえら……まずは話し合おう？ きつと俺たちはわかり合えるんだって……」

そう言つて二人と視線を合わせる。

一瞬間が空いたと思うと、彼らは同時に微笑んできた。

良かった。やっぱり人間は通じ合える生き物なんだ。やったよ絢辻。俺にも分かり合える友達ができたよ。

次の瞬間、二人から同時に繰り出された拳によって自分の意識は一瞬で刈り取られるのであった。

「……ただいま、美也。シュークリーム買ってきたぞ……」

「おかえりにいに！ って、どうしたの？ なんだか顔色が悪いけど……」

「……大丈夫。でもちよつと体調悪いからもう部屋で休むわ。シュークリームは一気に全部食べちゃダメだからな……？」

「はい」

輝日東高校はそれなりに広い敷地面積を誇っている。さらに設備等も整っており、校舎自体も改築してまだ数年ということでもかなり綺麗な部類だ。

一体どこからそんな金が出ているのか。全く想像がつかない。私立であるならまだわかるのだが、この高校は公立だ。しかも隣町にある同じ公立高校の輝日南高校は、比較的平凡な校舎であるのが拍車をかけて謎を深めている。

自分が今いる図書室も他の学校のそれと比べるとかなりの広さなのだろう。大きな吹き抜けが存在し2階建てに設計されたこの部屋は、文庫本から洋書まで数多くを揃えている。

ここにある本のうち、どれだけが人の手に渡っているのだろうか。思わずそんな疑問が浮かぶほど数多くの本が存在しているのだ。

さて、話は変わるのだが自分がなぜ図書室に来ているかというところ、もちろん本を借りに来たからだ。お目当の本は東野圭吾の「秘密」である。先月に発表されたこの本が新書として図書室に寄贈されたという話を教師から聞き、ここを訪れたのだ。

東野圭吾という小説家は前世にも存在していた人物だ。創作物の多くが改変されているこの世界だが、どうやら彼の作品はその影響を受けていないようなのだ。

前世の自分は極々平凡な高校生であり特に読書家というわけでもなかったのだが、彼の本は家族が愛読していたということもあって何冊か読んだ経験があった。

今から借りようとしている「秘密」もその中の一冊だ。15年以上も前の記憶なのでどんな本であったかは曖昧だが、確か夫婦間の割とインモラルなストーリーであった気がする。

部屋の奥にある貸し出し受付の横の棚にその本はあった。バカに広いこの図書室だが、新書となると割と簡単に見つけられる。

よかった。まだ借りられていないようだ。

安心してその本を手に取り、受付に運ぼうと思いついたところで、

誰かの視線が自分の手に注がれているのに気がついた。

その人物の方向を向くと、そこにいたのは見知った顔。

「あー……もしかして絢辻もこれ目当？」

「あはは……そのつもりだったんだけど、一足出遅れちゃったみたいね……」

顔を向けた方にいた絢辻は、気づかれてしまったことに対してバツの悪そうな表情を浮かべていた。

そういえば彼女は結構な読書家であったはずだ。放課後に図書室を訪れた時はよく顔を見かけるし、教室で本を読んでいる姿も度々見られる。

さて、どうしたものか。彼女が出遅れたと言っていたのは油を売っていたからではなく、確かホームルーム後に担任から何か頼みごとを任されていたのが原因のはずだ。

なんとなく図書室で借りようと思っていたが、別に文庫本程度本屋で買っても大した負担にはならない。ここは自分よりも楽しみにしていたであろう彼女に譲ったほうがいいだろうか。

そのような考えに至ったところで、彼女に声をかけることにした。

「よかったらこれ先に借りる？ 俺は次でもいいから」

「ううん。橘くんが先に手に取ったんだから。また今度でいいわ」

「ほんと？ 別に遠慮しないでもいいよ？」

「あー……じゃあ、返しに行く時に声かけてくれるかな？ そしたら確実に次に借りられるだろうし」

「わかった。それじゃあお言葉に甘えてお先に読ませてもらうね」

「ええ。あつ、読み終わってもネタバレはしないようお願いね？」

冗談めかした表情で彼女はそう言った。

もちろんそんな真似をするつもりはない。楽しみにした本の内容を読む前にバラされることほど腹がたつことはないだろう。

こちらの表情から心外だという気持ちを感じ取ったのか、クスクスと笑いながら彼女は話しかけてきた。

「ふふっ……それにしてもなんか意外だな。寄贈された初日に借りにくるだなんて、東野圭吾好きなの？」

「別に好きじゃないよ」

「えっ？ あ、あはは……そうなんだ……」

じゃあなんで借りたんだよ、と彼女は目線で語っている。

言い忘れていたのだが、自分は別に東野圭吾が特別好きだというわけではない。嫌いというわけでもないが。ガリレオシリーズはドラマをきっかけに好きになったのだがそれもこちらの世界では未来の話だ。現状出版されている本で前世の自分が読んだことのあるものに「分身」があつたのだが、読んで見た感想としては普通の一言だつた。

なんだろう、オチが気に入らないというか……等身大のミステリーを期待していたのにいきなり謎の研究みたいなスケールの大きな話を出されてガツカリしたというか……。

とにかく、彼の本を読んでいるのは前世のつながりを感じてノスタルジーを感じるためであり、特に作風に惚れたというわけではない。

まあ、それをそのまま伝えるわけにもいかないので適当に誤魔化すしかないのだが。

「えーっと、そもそも東野圭吾で読んだことがあるのが分身だけなんだ。今日借りようと思ったのは、なんかニュースで話題になってたからっていうミーハーな理由」

「なんだ、そうだったのね。彼の作品だったら放課後とかオススメよ。気になったら読んで見て」

「へー、それじゃあ次に借りてみるね」

「ぜひ。ふふっ、読書の話話を振れる友達って少ないから、よかつたらまたお話ししましょう？」

「俺でよかつたら喜んで。今度こっちのオススメも貸してあげるよ」

絢辻と本の貸し借りをする約束をした自分は、受付を済ませ図書室を去るのであつた。

◇ ◆ ?
◇

図書室で本を借り学校を出た自分は、近くのファミレスを目指して歩いていた。べつに家に帰ってもいいのだが、なんとなく人が近くにいるところで読んだ方が明るい気持ちで楽しめる気がしたからだ。

向かっている店はJo^{ジョー}es^スta^{ター}rという名前のチェーン店だ。よくわからないのだが、きっと黄金の精神を持つ波紋使いの血統が経営しているのだろう。

店の前までついたので外から軽く中を見渡す。人の数も多すぎず少なすぎずで、長居しても何も言われなさそうだ。

安心した自分は自動ドアをくぐり店の中へと足を運んだ。玄関から見て奥のボックス席が空いているのが見えたので、そこまで移動し荷物を下ろす。

注文はコーヒーと決めているのでメニュー表は開かない。すぐにカバンから本を取り出しそちらに意識を移した。

「お客様あ？ 〴〵注文はお決まりでしょーかー？」

1分としないうちにウェイトレスがやってきた。どこか茶化したように聞こえる話し方だとは感じたが、顔は上げずに注文を告げる。

「コーヒーを一杯、ホットでお願いします」

「かーしこまりましたー！ コーヒー一杯で居座るつもりのお客様にすぐにお持ちしますねー」

なんだこいつ。流石に失礼すぎるだろ。

何か文句を言ってやろうと文庫本から目を離しウェイトレスの方を向く。

そこにいたのは、パーマをあてた髪を肩下まで垂らした少女。

「……カルレスプジョルさんじゃないですか。バルセロナクビになったんすか？」

「ぶつ殺すわよ」

FCバルセロナ所属の未来の有名人……ではなく、柵町薫。隣のクラス所属の同級生だ。

彼女と知り合ったのは中学3年生の時。同じクラスになり、席替えで近くになったのをきっかけにそれなりに仲良くなった。

持ち前の明るくサバサバとした性格故に親しみやすく、彼女とは軽口を叩き合える……いや、こちらが軽口を叩いて彼女が物理的に叩き返す、悪友と呼べるような関係だ。

高校に入ってからにはクラスが分かれてしまい、やはり異性故にしばらく顔を合わせていなかったので久しぶりの対面だった。

「なに、お前ここでバイトしてんの？」

「始めたのは最近だけどね」

「ふーん。なんで？」

「そんなんお金のために決まってるでしょ。あとは制服が可愛かったからかしら？」

そう言うとな彼女は2、3歩後ずさり、スカートの端を軽く持ち上げた。

見て感想を言えとの意思表示だろう。仕方なく上から下まで目線を移動させる。

「絶望的に似合ってねえな」

一呼吸置いてからそう答えると、彼女はニツコリと微笑み口を開いた。

「ホットコーヒー一杯ですねー！ 顔面におこぼしてもよろしいでしょうかあ？」

「まあ待て、早まるな。話せばわかる」

からかう意思は確かにあったが、似合っていないと感じたのは本当だ。

このファミレスの女性店員の制服はピンクのシャツにスカートとカチューシャというスタイルのだが、どこか彼女の雰囲気とは噛み合っていない。

まず髪型があれだ。パーマとカチューシャの組み合わせはあまりマッチングしていない。

いや、それよりも一番の違和感の原因はやはりピンク色のシャツだろう。彼女は純日本人ではあるのだが、どこかエキゾチックな顔立ちをしている。それが故になんとなく大人びた雰囲気を出しており、ピンクのような子供っぽい色がメインの服装はあまり似合わない

のだろう。

笑顔のまま額に青筋を浮かべる薫にそう伝えようと、彼女は不機嫌そうな表情のまま口を開いた。

「わかっているわよ……でも、こんなピンクのフリフリ着れる機会なんてなかなかないんだもん」

「ん、まあ絶望的には流石に言いすぎたわ。でもやっぱお前には落ちて着いた色の服の方が似合うって」

「そうね……はあ、男用の制服に変えてもらおうかな……」

「そこまで落ち込むことねえだろ。なんだかんだで元がいいんだから悪くはねーって。ただ違和感を感じてるだけ」

そう告げると、態とらしくシクシクと漏らしながら俯いていた彼女は顔を上げた。

「……ほんと？」

「ほんとほんと。てかおい、お前呼ばれてんぞ」

「えっ!? あっ、ヤバ……はい！ 今いきまーす！」

仕事ほったらかしで話していたからだろう。店長らしき人がこちらを睨みながら薫のことを呼び出している。あの様子ではそれなりに絞られるだろう。まあ自業自得だろうが。

彼女がテーブルを離れるのと同時に、自分も再び文庫本へと意識を移すのであった。

◇◆?◇

「ふう……」

店に来店してから2時間は経っただろうか。本を読み終わった自分はその閉じて大きく深呼吸をした。

やはり内容にはどこか既視感があり、割とスムーズに読むことができた。

色々と思うところはあるのだが、あまり感傷に浸る時間はない。喫茶店ならまだしも、ファミレスでコーヒ一杯で粘るのはなんとなく

気が引けている。

早い所去つてしまおうと、伝票を手に取り会計へと向かった。対応したのは薫。

無言で伝票を渡し、金額を聞いてから小銭を取り出そうとサイフに意識を向けたところで、ふと声をかけられた。

「ねえ純一？ あんたもうちよい待てる？」

「ん？ そりや構わねえけど。どんくらい？」

「この会計済ませて終わりだから、ダツシユで着替えて10分くらいかな」

「りよーかい。んじゃあ向かいのコンビニで待つてるわ」

「てんきゆね。できるだけ急ぐから」

「はいよ」

一緒に帰ろうとのお誘いであつた。彼女とは中学が同じということもあり家の方向もそこまで離れてはいない。自分も久しぶり彼女と話をしたいという気がしていたので、大人しく仕事の終わりを待つことにした。

その後、彼女が現れたのは予告していた通りきつかり10分後。軽く呼吸を乱しており、その様子から慌てて支度したのが簡単に見て取れる。

「んな急がなくてもいいのに」

「待たせたら悪いじゃない。あんたに対して少しでもそんな気持ちになりたくないの」

「さいでつか。んじゃ行くか」

そう言う告げると二人並んで繁華街を歩き始めた。

授業がどうだとか、友達がどうだとかくだらないことを話しながら道を進む。と言つても、話題に乏しい自分は基本的に聞き手であり、大体は彼女が話し手に回っている。

そんな会話が10分程度続き、場所が繁華街を通り過ぎて人気のない住宅街へ移ったところで彼女が話しかけてきた。

「そういえばあんた、最近噂になつてるわよ」

「ん？ 俺が？」

はて、何か噂されるようなことがあっただろうか。自分はその手の話の中心からは離れているはずだが。

思わず首をかしげる。

「なんでも森島先輩と仲良いんだって?」

「その話かよ……」

薫は腹立たしいにやけ顔でそう答えた。

森島先輩との噂と言うと、先日先輩に連れられケーキ屋へと出向いた時の話だろう。あの日はやはり授業後すぐに出かけたと言うこともあり、それなりの人数の生徒に二人で歩いている姿を目撃されてしまっていた。

一緒にいた時間は学校からケーキ屋までであり、奢ってもらった後も礼を言つてすぐに別れたから大丈夫だと思つていたのだが、少々彼女の影響力を甘く見過ぎていたようだ。

思わずため息が出そうになるが、それをなんとか堪えて彼女に言葉を返す。

「ナンパから逃げる手助けしたお礼に奢ってもらっただけだよ。それ以上でもそれ以下でもない」

「ふーん。ほんとに?」

「なに、妬いてんの? 悪りい悪りい、最近放っておきすぎたなハニ?」

「ほんとよダーリン! 死んで詫びなさい」

そう言うと言を蹴られてしまった。相変わらず容赦がない。

痛みから片足を抱えてしまい、ケンケンでの移動になる。

「……ひでえことしやがる」

「それだけで済んだことに感謝しなさい。このわたしをモノにしたかったら年収10億は稼ぐことね」

「一生独り身でいやがれ」

そう返すとそこで会話が途切れてしまった。特に話すこともなくなり、黙々と帰り道を歩く。

やがて、互いの帰路が分かれる地点にたどり着いたところで彼女が口を開いた。

「ま、あんたも彼女くらい作ってみたら？　いつも一人でいんの見てるとこっちまで辛気臭くなるのよ」

「……なんだよ急に」

「しばらく顔を合わせてなかった友達のことを心配してやってんの。それじゃ、わたしこっちだから」

そう言うとなんかは自分の返事を聞かずに帰路へと着いていった。

なんだかんだで心配させてしまっていたようだ。それが嬉しくもあり、気恥ずかしくもある。

きつと彼女もそうだったのだろう。こちらに顔を向けずに去ってしまったことから大体想像がつく。

友人の気遣いに思わず笑みがこぼれそうになるのをなんとか堪え、自分も家へと向かうのであった。

自分の通う公立輝日東高校には屋上が存在している。それだけなら当たり前のことで済まされるのだろう。しかし、大抵の学生にとって屋上とは学生生活と縁のない場所はずだ。

前世の自分もそうだった。漫画やドラマなどでは屋上が舞台となるシーンはよく見かけるだろう。小学生だった自分は、中学に入学すると屋上で好き勝手できると思い込んでおり、屋上で昼寝をして授業をサボる姿や屋上の貯水タンクの上から街を見渡す姿などを想像して悶えていた。しかしまあ、入学したのはごく普通の公立中であり、イジメや自殺などに世間が過敏になり始めていたご時世で屋上の自由解放などはもつてのほかなのであった。

話を戻すが、とにかく屋上とはほとんどの学生にとってフィクションの中の存在であり、長い学生生活の中でそこに辿り着ける回数は限られたものなのだろう。

しかし、輝日東高校に通う学生にとってはその限りではない。なんと、この高校は屋上が自由解放されているのだ。解放されている時間も限定されておらず、用務員のおじさんが仕事にきてから帰宅するまで、つまりは朝から夜まで鍵は開けられている。

それを知った時は思わず言葉を失うほど驚愕した。なんとって憧れの屋上に自由に出入りできるというのだから。

だがまあ、そのような考えを抱いた人物はどうやら自分だけだったのだろう。他の生徒にとっては屋上とは大して魅力のない場所のようで、多くても10人程度、誰もいないという状況の方が多い物静かな場所というのが、この高校に通う学生の屋上に対する共通の認識であった。

さて、今の時間帯は放課後。自分はそんな屋上を訪れていた。隣には友人の梅原正吉の姿があり、ここにやってきたのも彼に連れられてきたからだ。

なぜわざわざ人気の少ない屋上をチョイスされたのかというと、当然人に聞かれたくない話をするためだ。具体的には彼の恋愛相談を

受ける約束をしていた。

梅原の想い人とは1つ上の先輩であり、剣道部に所属している。入学してすぐの部活勧誘で彼女に一目惚れした彼は、意気揚々と剣道部へと入部したは良いものの一向に距離を詰められずにいた。

最近是不貞腐れ気味で部活もほとんど幽霊部員のようになっている。今彼が話している内容も、要約すると振り向いてくれない先輩と運動部としてそれなりにキツイ練習に対しての愚痴がほとんどだ。

まともに相手をするのも面倒というか、そもそも彼もこちらの反応などは求めておらず、自分は適当に相槌を打ちながら聞き流している。

そんな中、梅原は一通り思いを吐き出せたのか、大きくため息をついてからこちらに話しかけてきた。

「はあく……しっかし、大将はいいよなあ……」

「ん？ 何がだよ」

「何がって、そりやお前女の子に恵まれてて羨ましいって言ってんだよ！」

「はあ？ どうした突然」

突如として彼から妬みの対象として矛先を向けられ困惑する。

女の子に恵まれていると言われても心当たりがない……というわけではないが、人に妬まれるほど深い関係の相手などはいないのでどうも実感がわかない。

そんなわけで自分は特に言い返すわけでもなく、次の言葉を求めて彼の方向を向いた。すると、彼はその反応も気に障ったのか一気にまくし立ててきた。

「突然もクソもあるかってんだ！ かわいい妹に幼馴染までいて、その上学園のアイドルにまで手を出そうってか!? ええ!?!」

「ちよ、おま……落ち着けて」

「いや、落ち着いてなんていらねーな！ 大将？ お前はもうちよい自分の立場ってのを自覚するべきだ。自分は全然モテないですよーって顔しやがって」

「……色々ツツコミてえけど、とりあえず全部聞いてやるよ」

学園のアイドルとは森島先輩のことだろう。梅原達には幾度となく彼女との噂に対しての弁解を述べたのだが、未だに納得してもらえていないようだ。

すぐにも心外だという意味を伝えたいのだが、彼の様子的に途中で言葉を挟んでも火に油を注ぐだけだろう。

そう思った自分は諦めて聞き手に回ることにした。

「いいか。お前は知らねえかもしれないけどよ、普通の男子高校生にとって女の子と会話するってのは一大イベントなんだよ」

「おう」

おうじゃないんだが。確かにこの年頃の男にとって女の子と会話は、特別なものだと感じてしまう気持ちはわからなくはないのだが。それにしても「普通の男子高校生にとって一大イベント」は言い過ぎだろう。それが適用されるのは色々拗らせた奴だけはずだ。

そんなんだから憧れの先輩も振り向いてくれないんだぞ。

「それなのに、だ。大将？　ちよつと自分の胸に手を当てて考えてみる」

「おう」

おうじゃないんだが。まあ抵抗しても面倒ごとが増えるだけなので、大人しく両手を胸に当てて目を瞑る。

雰囲氣的にすぐには解放してもらえなさそうなので、何か考え事をすることにした。

そういえば薫のバイト先の Joestar というファミレス、あれも自分の前世のパチモンだったのだろう。おそらく、元ネタはジョナサンというファミレスチェーン店のはずだ。ジョナサン↓ジョナサン・ジョースター↓ジョースター↓Joestar、みたいな。

それに気づいたのは今日の授業中であり、あまりにもな改変内容に危うくため息が漏れるところであった。なんだろう、この世界の神様ってジョジョのファンだったのだろうか。

そんなくだらないことを考えているうちに、30秒は経過しただろうか。ポンと肩を叩かれたのでゆっくりと目を開ける。

「……どうだ大将。思い当たる節があるだろう」

「ねーよ」

しまった。つい本音が。

まあいくら彼に問い詰められたところでないものはないのである。これ以上無意味な問答を続けるのも面倒だし、そろそろ反論することにしよう。

そう思い立った自分は、彼が口を開くよりも先に言葉を発した。

「なあ梅原？ そろそろ俺の方からもいいか？」

「お、おう。かかってきやがれ！」

梅原は仁王立ちのポーズで腕を組み、こちらを睨む。

一々大げさなやつだ。まあそういうところが面白いというか、愛嬌があり好かれているのだろうが。

自分もせっかくだから梅原のテンションに合わせてようと、彼に相対するように立ち上がり睨みを効かせるように向かい合う。

目線を合わせて数秒が経過したところで、ゆっくりと口を開いた。

「ま、ようはお前は俺がそれなりに可愛い女の子と会話してんのに嫉妬してんだろ？」

挑発するように直球の言葉を投げかける。

すると、彼は怯んだように吃りながら口を開いた。

「いや、女の子と話をすること自体に文句を言うつもりはないんだが……もうちよいありがたみを感じて欲しいというか……」

返答の内容的に、自分に対する攻撃の意思は見られない。だが、この際だから童貞を拗らせかけてる友人に色々と言っておこう。

心を鬼にした自分は、ゆっくりと彼に向かって言葉を投稿かけた。

「そのありがたみを感じるってのがそもそも間違ってたんだよ。いいか？ 結局のところ俺もお前も絢辻も森島先輩も、立場つーのは対等

なんだよ。そりゃあ世間一般からしてみりゃ女子高生つてのは価値のある存在だぜ？ でもよ、女の子の立場に立ってみるよ」

「お、おう？ 女の子の立場か？」

「そうだ。お前が女だったとしてだ、一々会話するたびにときめいて欲しいか？ 自分が気になる相手にじゃねえぞ。普通のクラスメイト対して、だ」

「えっ？ そりやお前……モテるってのは嬉しいことなんじゃねえか？」

ダメだこいつ。思わずため息が出る。

「はあ……あんな、お前がそう思うのは相手のルックスが優れてるっつー前提条件を勝手に作ってるからだろ？」

「いや、そんなこと……」

「いや、そんなことあるね。なあ梅原、想像してもみろよ。お前が女でさ、委員会の仕事だとか係りの仕事だとかで仕方なく伊藤ちゃんに話しかけねーといけねー状況があつたとするじゃん？ そんな時にさ、義務的に会話をしてお世辞笑いを浮かべるだけで惚れられんだぜ？

地獄だろ」

「……そりやまあ」

伊藤ちゃんと言うのは自分達のクラスの古典の教科担任だ。

小太りの中年男性であり、女生徒だけでなく男子までもが生理的嫌悪感を抱くようなルックスに無駄にねっとりとした話し方が特徴と
いうことで皆から疎まれていた。

彼には申し訳ないのだが、気持ち悪い男性像という具体例で話に出させてもらった。恨むなら俺じゃなくて梅原を恨んでくれ。

「あんな、女も男も関係なく、好きでもねー奴に惚れられるっつーのは複雑な気持ちなわけだよ。しかもよ、何かイベントを挟むならまだしも話しかけられるだけでだぜ？ ふざけんなって感じだろうよ」

「うっぐ……いや、でもよ大将。俺が言いてえことはそういうことじゃねーんだ。お前が美人と会話する機会が多いことにもうちよいありがたみを感じろって……」

「話は最後まで聞け。お前の美人相手にどうのこうのってのはこっちの価値観だろうが。俺はよ、相手の立場に立って考えろっつってんの。好きでもねえ男に勝手に美人と話せるありがたみを感じられて嬉しいと思うか？ しかも日常会話程度でだぞ？ クソうっとうしいだろうがよ」

「……はい」

ぼそりとそう返事をした梅原は、心なしか眦に涙を浮かべているよ

うだった。

なんだろう、だんだん楽しくなってきた。正論の押し付けなんて非生産的な行為であると思っていたのだが、それなりに快感を得られるのだな。どっかのフランス人女子高生の気持ちが始めてわかった気がする。

「な？　俺がそういう気持ちを持つと相手に迷惑がかかるんだわ。そりゃ俺も男だからよ、美人と会話できるのは嬉しいぜ？　でも相手をお不快にさせたくねーから理性で抑えてんだよ。万年発情期のためーとは違うんだわ。そんなんだからお前は先輩に振り向いてもらえねーんだよ。わかったら寿司屋は寿司屋で大人しくマンボウとでも盛ってる」

「……はい、ごめんなさい……って！　最後！　ただの罵倒じゃねえか！　バカにしてんのか!?!」

しよんぼりと俯いていた彼だが、自分の言葉の意味に気づいたのか抗議するようにこちらに顔を寄せてきた。

その様子に思わずニヤリという嫌らしい笑みがこぼれる。

「なんだ、やっと気付いたのか。これでまた1つ賢くなったな兄弟?」
「あーもう！　お前とは絶交だ！　俺は家に帰ってトロ子に慰めてもらう！」

そう言い残すと梅原はチクショ〜と大声で叫びながら屋上を去っていった。

少しいじめすぎてしまっただろうか？　思わず軽い罪悪感が自分を襲うが、すぐに考えを改める。

まあいいか。梅原はあれでいて結構逞しい男だ。家に帰ってお宝本^{エロ本}読んで出すもの出したらすぐに立ち直るだろう。たぶん。

梅原が去って一人になった自分は、近くのフェンスに腕と顎を置いた。

ふと目線を下にやると、校庭では陸上部が元気の良い掛け声をあげながらトレーニングに励んでいた。

眼下に広がる光景を目に収めながら、先ほどの梅原の言葉を思い出す。

トロ子って一体なんなんだ？

あいつ実は彼女いたのだろうか。だとしたらなんだか腹立たしくなってきた。人に言うだけ言っついて自分には相手がいるってか。

確かに、自分には美人の知り合いは多い。しかし所詮知り合い止まりだ。

こちらら転生してから15年間陰キャ極めてるんだぞ。彼女以前に帰りに一緒に寄り道するような友達すら存在しないのだ。

恵まれているのを自覚するのは彼の方だろう。友達も多く、沢山の人が好かれていると言うのに意識が薄すぎる。

あと家が寿司屋だ。就職先にも困らないだろう。

そんなくだらないことを考えながらぼーっとしてっていると、突然後ろから声をかけられた。

「橘くん？　何してるの？」

一度聴いたら決して忘れないような、透き通るような声色。なぜ彼女がこんなところにいるのだろうか。そう思っ振りに向いた先にいたのは、案の定森島先輩であった。

長く綺麗な髪を風になびかせながらにこやかにこちらを見つめる姿に一瞬見とれてしまったが、それを誤魔化すように慌てて言葉を返す。

「いえ、ちよっと人生つてもものについて考えてましてね……」

自分としてはジョークのつもりで答えたのだが、彼女には伝わらなかったのか真剣な表情でこちらを見つめてきた。

「ふーん。ところで、さっき泣きながら階段を駆け下りていった男子って、きみの友達？」

「ええ。親友も親友、いわば心の友ですね」

そう答えると、森島先輩は目線を外して考え込むような仕草をする。

なんだろう、ホラを吹いたのがバレたか？

少々不安になったので、ジョークだと告げておどけようと考え、言葉を送しようとした。しかし、それよりも先に先輩が顔を向けてきてしまったので言いそびれてしまう。

この妙な空気をどうしようかと頭を悩ませたところで、彼女はクスリと笑みをこぼしながら話しかけてきた。

「ふふっ、橘くんも結構青春してるのね？」

「えっ？ え、ええ。まあ、人並みには……」

「そっか。色々あると思うけどさ、不貞腐れずにそれを楽しみなよ」

そう告げると彼女は自分の目の前まで近づいてきた。それは、まるでキスでもするかのような、恋人以上の関係でしかありえない距離感だ。

先輩の予想外の行動に、早鐘のように心臓の鼓動が高まる。

これは一体どういう状況なのだろうか。困惑する自分の表情を数秒眺めた彼女はおもむろに人差し指を立てると、その指先で一回、ツンと自分の額をつついてきた。

「……えっ？」

先輩からのアプローチはそれっきり。満足したかのような表情を浮かべた彼女は、何も言わずに自分の元を離れる。

そのまま、まっすぐと屋上の出口へと歩いた彼女だが、自分の視界から消える直前でこちらを振り向いた。そして、からかうような笑みを浮かべて大きな声で一言。

「せいぜい悩みな、男の子！」

それだけ言い残すと、彼女はこちらの返事を聞かずに立ち去って行った。

「………えっ？」

ただ一人残された自分は、ひたすら困惑するしかないのであった。

◆◆？

時計の時刻は5時を回っただろうか。屋上を後にした自分は、自教室へと戻り一人本を読んでいた。

しばらくの間梅原と戯れていたのは、もちろん彼のためではあつた

のだが、こちらにも時間を潰すという目的があった。

そろそろ、待ち人との約束の時間だ。そう思ったところで、目線は本に向けたまま意識を外へとむける。

しばらくすると、静まり返った廊下を誰かが歩く音が聞こえてきた。やがてその足音は自分のいる教室の前で止まる。

ガラガラと引き戸が開く音が聞こえたので、本から目線を外しそちらの方向に目を向けた。

「ごめんね。少し遅くなっちゃった」

「お疲れさん。学級委員つてのも大変だね、絢辻」

「ええ。でも、好きでやってることだから」

そう、自分の待ち人とは絢辻であった。

先日約束した本の貸し借りを果たすために今朝声をかけたところ、可能であれば委員会の仕事が終わるまで待っていて欲しいと頼まれたため、時間を潰していたのだ。

こちらの方に歩いてきた彼女は正面の席の椅子を引き、自分に向かい合うように腰掛けた。

その様子を見計らい、カバンから二冊の本を取り出し彼女に手渡す。一冊は図書室で借りた本。本来又貸しは許されない行為なのだが、自分が早々に読み終わり返却期間までだいぶ余裕があるので、相手が信用に値する人物であるということ、その行為に及んだのである。

「ありがとう。えーっと、まずはこっちを読んだ感想を聞こうからしら」

そう言つて彼女が持ち上げたのは東野圭吾の「秘密」。自分が彼女より先に借りた本だ。

さて、尋ねられたからには感想を答えなければならぬ。

「んーと、まずはじめに聞いておきたいんだけど、それつてお世辞で聞いている？ それとも俺の本心で答えていい？」

「そうね、後者でお願いするわ。もちろん、ネタバレしない程度にお願いね？」

そう言うといタズラっぱい笑みを浮かべる絢辻。

放課後の教室に二人きりという状況も相重なり、どこか怪しい魅力を放っている。

思わずドキリと心臓が脈打つが、頭を落ち着け、いたって冷静な表情で彼女に話しかけた。

「率直な感想を言うとならば、普通の一言かな」

「へえ。それはマイナスの意味で？」

「いや、どちらかと言うとプラス寄りだね。つまらなくはなかったし良いところも多かったよ。ただ……」

自分は一呼吸置いてから、また言葉を繋げる。

「終盤の失速具合がね？ 文庫本一冊で収めなければならぬって制約からか、割と投げやりなオチに思えたかな」

あくまで自分にとってはね、と付け加える。

すると、彼女は特に表情を変えずに話しかけてきた。

「ふーん、そうなんだ。まあこの話は私が読み終わってからまたしましょ。それで、こっちが橘くんのオススメの本？」

そう言っただけで彼女が持ち上げたのはもう片方の本。タイトルは「コンチキ号漂流記」。

正直、女の子に勧める本ではないとはわかっているのだが、彼女の嗜好がわからない以上、自分が純粹に面白いと思えているものを渡すのが一番だと考え選んだものだ。要は名刺代わりのような感覚だ。

「まあ、タイトルから大体想像つくと思うけど冒険小説だよ。ノンフィクションのね」

「そうなんだ。ちなみにどんな話？」

「それをここで聞くのはやめた方がいいよ。たぶん、次の日の朝まで語り続けることになるだろうから」

「あはは、それはちよつと困るわね」

お互いに顔を見つめ合いクスクスと笑うと、彼女は両方の本をカバンにしまって立ち上がった。それに合わせて自分も帰る支度を済ませる。

こちらの用意が整ったタイミングを見計らい、彼女は話しかけてきた。

「それじゃあ二冊とも有り難く読ませてもらうわ。私のオススメの本はこれを返す時に一緒に渡すから、楽しみにしてて」

「うん。それじゃあ絢辻、また明日」

「ええ、橘くんも。また明日ね」

そう言い合うと、彼女は軽く手を振ってから教室を出て行った。

この程度で済ませられるというのであれば、別に放課後まで待つ必要はないと感じられるかもしれないが、彼女はクラスではそれなりに有名なのだ。森島先輩の一件で参ってしまった自分は、二人で本の貸し借りをしていると見られて変な噂話を広められたら面倒だという要望を聞いてもらい、今日の放課後に時間をつくってもらった。

絢辻が去り適当な時間が経つたのを見計らい、自分も教室を後にするのであった。

帰りのホームルームが終了してから30分は経っただろうか。この時間帯になると生徒の大半が部活に向かうか帰宅するかで、校舎からは人の気配が消え始める。そんな中、自分は誰もいない校舎の屋上からなんとなく校庭を眺めていた。

今日はサッカー部の練習日のようで、いくつかのグループに分かれた部員たちがそれぞれパス練習やシュート練習に励んでいる。別に知り合いが所属しているわけでもない男子サッカー部の練習などなんの面白みもないのだが、不思議と見ていて飽きないものだ。

11月も半ば過ぎということもあり、冷たく乾燥した風が頬を撫でる。

こういう雰囲気は嫌いではない。孤独ではあるのだが、なぜだか心地よさを感じるような、そんな雰囲気だ。

本当ならイヤホンを付けて音楽でも聞きたいのだが、悲しいことに今は20世紀。残念ながら携帯音楽プレイヤーは普及しておらず、パソコンから気軽に音楽を入れられるiPodなどは夢のまた夢だ。

基本的に前世に未練などはないのだが、こういう時は少々もどかしい気持ちになる。今ここで音楽を聴けたら一体どれだけ気持ちがいだらうかと。

そういえば確か、前世のサブカルチャーのジャンルには神様転生というものがあつたはずだ。具体的に説明すると、神様がいくつか融通を利かせてくれた上で新しい世界に転生させてもらえるというものだ。

自分は別に神様の手違いで死んでしまった訳ではないとは思うのだが、今からでも何かもらえないものだろうか。例えば、何故かこの世界でも普通に使える魔法のスマホとか。それが無理ならジヨブズも一緒にこの世界に転生させてやって欲しかった。

そんなくだらないことを考えているうちに、後ろに人の気配を感じた。特には気にも留めなかったのだが、何故だかその気配はどんどんこちらに近づいて来る。

そして、とうとう謎の人物は自分の真横へと到着した。

このただっ広い屋上で、何故わざわざ自分の側に来たのだろうか。本当は横の人物の顔を確認したいのだが、困惑と無気力感からか視線を校庭から外す踏ん切りがつかない。

そうした状況のまま、1分ほど経っただろうか。不意に隣から声をかけられた。

「きみ、何をしてるの?」

聞こえてきたのは女性の声。しつとりと落ち着いた、耳触りのいい声色だ。

なんとなくこの不思議な状況に乗っかってみようと思いついた自分は、話しかけてきた人物の確認をせず、視線を動かさなまま返答した。

「いえ、ちよつと考え事を」

「ふーん。どんな?」

適当に答えたのに内容に突っ込まれてしまい、思わず心の中で動揺してしまふ。

さつきまで何を考えていただろうか。余りにもしようもなさすぎて一瞬で忘却しかけていた記憶を思い返したあと、返事をするためにゆっくりと口を開く。

「神様のこと……ですかね……」

「へえ。神様ね……」

嘘は言っていない……言っていないのだが、きつと外から見れば黄昏ながら哲学的な考えに頭を悩ませていたと思われるだろう。

実際は100万円あったら何するか程度のくだらない妄想浸っていただけなのだが。

まあ勘違いされていたらそれはそれで面白いなと思ったので、そのまま特に言葉は付け加えずに相手が口を開くのを待つことにした。

十数秒間は互いに無言を貫いていたのだが、その静寂は不意に破られることとなる。

「ふふっ。きみ、結構面白いね。はるかが気に入ってる理由がなんとなくわかるわ」

こちらの発した言葉を何度か頭の中で反芻した彼女は、不意にクスクスと笑みをこぼしながらそう答えた。自分でやっというてなんなのだが、この会話から俺への評価を下さないで欲しい。

今更ながらここまで言動を少々後悔し始めていたのだが、彼女が述べたあるワードが引つかかり、疑問が口から出た。

「はるか？ それって森島先輩のことですか？」

「そうよ。最近ね、はるかの口から時々きみの名前が出るの」

「へえ……どんな話をしてるんです？」

「ふふっ、気になる？」

「まあ……でもそれより、あなたの正体が気になります」

そろそろ顔を合わせないで話すのも限界だと感じた自分は、体ごと相手の方を向く。

そこにいたのは軽く口元を緩めてこちらを見つめる女の子。

身長は175センチある自分とそこまで差があるようには見えず、手足はスラリと伸び、胸もそれなりに膨らみが見られる。

顔立ちは整っているが、ツリ目からか少々強面に見られる。だが、十分美人と言えるだろう。少し伸ばした髪をポニーテールにまとめているのが良く似合っている。

ここまで美人であれば一度会ったことがあったら記憶に残っているだろうし、初対面で間違いないだろう。

自分がそうしたようにこちらの姿を数秒注視していた彼女だが、やがて微笑みながら口を開いた。

「名乗るのが遅れてごめんなさいね。塚原響、はるかの友達よ。よろしくね」

「橘です。橘純一。それで、塚原先輩はどうしてここに？」

「頼まれたのよ。どっかの誰かさんに悩める後輩の相談に乗ってやって欲しいってね」

「……それって森島先輩ですか？」

そう質問すると塚原先輩は軽く頷いた。

これは一体どういう状況なのだろう。悩める後輩というのはこの場合自分しかないのだが、腑に落ちないというか……そもそも自分

で受け止めきれないような悩みなどは存在していないのだが。何か森島先輩に悟られるようなことがあったのだろうか。

こちらの表情から困惑の意思を感じ取ったのか、塚原先輩は気を使うように話しかけてきた。

「ま、わたしにできることなんて何もないかもしれないけど。それでも話くらいは聞いてあげられるよ?」

「あの……要領を得ないんですけど……」

「初対面だから話せるってこともあるでしょう? 友達との人間関係のことなんて、なかなか人に話せないとは思うけど……溜め込むよりは思い切って吐き出してみたら?」

森島先輩から頼まれてやってきたという彼女は、相談相手が人間関係の悩みを抱えていると伝えられていたらしい。

たった今、話の全体像が見えた。先日、屋上で会話した森島先輩は、直前に梅原が走り去る姿と自分が一人屋上に残っていた姿から二人の間に何かがあったと推測したのだろう。それを解決するために塚原先輩に相談し、彼女をこちらに寄越したというわけだ。

……どうやら、自分とはんでもない勘違いをさせていたみたいだ。何かおかしいとは薄々感じていた。最近妙に森島先輩が気を使ってくるなど疑問に思っていたのだ。

顔をあわせると変に優しい態度で接してくるし、しきりに悩みがないかと尋ねてきた。特に心当たりがなかったのでそれらを軽くあしらっていたのだが、それ故にさらに勘違いを拗らせさせてしまい、結果として塚原先輩を頼るに至ったのだろう。

さて、この状況をどうしたものだろうか。

笑い飛ばしたい気分ではあるのだが、森島先輩は自分のことを心配してくれての行動だろうし、それは論外だ。

だとすれば、とりあえず塚原先輩に事情を説明して話を合わせてもらうしかないだろう。少々彼女には恥をかかせることになってしまいうが、このまま嘘を吐いてまで誤魔化すわけにもいかない。

そう思い立った自分は、発する言葉を選びながら口を開いた。

「あー……塚原先輩? 話せば長くなるんですけど……これ、多分森

島先輩の勘違いです」

「……どういう意味かな？」

こちらを見つめて疑問を口にする彼女。元々の顔立ちと落ち着いた喋り方が相重なり、妙な威圧感を発している。

その雰囲気思わず怯んでしまったが、気を取り直して事の真相を述べるのであった。

◇ ◆ ?
◇ ◆

……つてことがあります。多分、それで余計勘違いさせてしまったんだと思います」

「はあ……あのバカはるか……」

黙って話を聞いていた塚原先輩だが、自分が今までであったことを話し終えると、頭に手を当てて俯いた。よく見るとほんのり耳が赤く染まっているので、やはり多少恥をかかせてしまったようだ。

恐る恐る様子を伺っていたこちらに対し、先輩は大きく息をつくとき非難めいた口調で話しかけてきた。

「……でもそれって、きみにも責任があるんじゃない？　もう少し普段から相手のことを気にかけるべきよ」

「いや、ほんと、それはもうその通りだと思います」

自分にも非があるという自覚はあるので、素直を頭を下げる。

その様子に満足したのか、塚原先輩は一度仕切り直すように咳き込むと、ゆっくりと口を開いた。

「で、わたしはどうすればいいのかしら？」

「えー、あー、こういう事を頼むのは非常に心苦しいのですが……森島先輩に恥をかかせたくないなので、誤魔化すのを手伝ってもらえませんか？」

「具体的には？」

「悩みは解決したようだと言っていただければ。そしたら僕が後日礼を言いに行きますので……」

塚原先輩と森島先輩のおかげで気が楽になったと伝えれば、彼女も

安心するだろう。そもそも梅原とは次の日から元気にエロ本の読書感想会を開いていたくらいだし、自分たちの言動から嘘がバレることはないはずだ。

その旨を塚原先輩に伝えると、どうやら納得していただけたようで、強張った表情を少し緩めてくれた。

「ま、それが無難よね。わかったわ。こっちはこっちで上手くやっついてあげる」

「ありがとうございます。……色々ご心配をおかけしまして、すいませんでした」

「ううん。この場合誰も悪くないでしょうし、仕方ないわ」

よかった。初めはどうなることやと思っただが、上手く事態を収めることができそうだ。

塚原先輩の言葉によつて安心することができたので、ほつと一息つくこうと大きく息を吸ったのだが、それを吐き出すより先に先輩が言葉を発してきた。

「で、橘くん？ はるかとはどこまで進んだの？」

「!?……っげほっ！……ちよ！ 何言ってますか!？」

先輩から放たれた、予想外の言葉により思わずむせてしまう。

どこまで進んだかという質問は……つまり……そういうことなのだろう。自分は男なので一々赤面したりはしないが、何よりも塚原先輩の口からそのような冗談が出たことに動揺してしまった。

その様子をにやけ面で眺めていた先輩は、こちらの呼吸が整ったのを見計らい、いたずらっぽい笑みを浮かべながら話しかけてきた。

「なに？ もう人には話せないようなことまで経験済みなわけ？」

「先輩からかってますよね!？」 ほんと何もないですから!？」

「えー。でもお、はるかがどこまで男の子のこと気にかけることなんて初めてだし……本当に何もないの？」

「ないですよ！ マジで勘弁してくださいって！ 今後顔合わせた時に気まづくなるんですから!？」

ほんと洒落になっていない。ただでさえ森島先輩の仕草にはドキリとしてしまうことが多々あるというのに。こっちだって意識しな

いように会話するのは大変なんだぞ。これが原因で上手く会話ができなくなってしまうたらどう責任を取ってくれるんだ。

こちらの慌てる姿を一通り眺めた先輩は、満足したかのような表情を見せると、笑いながら話しかけてきた。

「あはは、ごめんごめん。慌てる姿があんまりにも面白いものだから、ついからかいたくなっちゃった」

「ったく。男に対してそういう冗談はタチが悪いですよ……」

「いいじゃない。これでおあいこつてことにしてあげる」

先輩はそれだけ言うと、じゃあねとヒラヒラと手を振りながら屋上を去っていった。

何だろう、どうしてもルツクスから気難しい人だと思ってしまったのだが、案外気のいい性格のようだ。自分のことも森島先輩のことも気にかけてくれて、更に後味が悪くならないように場の空気を変えてくれた。

森島先輩があれだけ天真爛漫なのに、特に問題を起こしていないのは彼女のフォローがあるからなのだろう。だとしたら、あれでいて結構苦労しているに違いない。

しばらくの間そうやって塚原先輩の事情を考えながら、わずかに熱くなった頬の熱が冷めるのを待つのであった。

◆◆？◆

「ただいまー」

屋上での一連が終わったあと、自分はどうしても学校でのんびりする気が起きず、すぐに家へと帰宅した。

今の時刻はまだ5時過ぎ。ここまで早く帰ってくることは中々ない。

いや、別に家に帰りたくないという気持ちは全くないのだが。それよりも、学校の居心地がいいのが原因だ。

そんなこんなで妹に帰宅を告げるために大きな声を出しながら玄

関を開けたのだが、タタキに家族以外の靴が並べられていることに気がついた。

若い女の子向けの可愛い靴だ。母親のものとしては幼すぎるし、美也のものとするど大人っぽすぎる。

一体誰のものなのかという疑問が浮かんだのだが、それは居間から発せられた声によってすぐに解消されることとなった。

「おかえりにいー!」

「純ーおかえりー!」

妹の次に聞こえたのは、聞き覚えのある声だ。となると、この状況からも必然的に一人に絞られる。

まあわざわざ予想する必要もないかと思ったので、居間の扉に手をかけると、ゆっくりとそれを開いて中へと入っていった。

そこにあつたのは、妹と一緒にコタツでくつろぎながらおやつを食べる幼馴染の姿。

「いらっしやい梨穂子。今日はどうしたの?」

「んーとね、ほら! この前一緒に学校に行った時ビデオを貸す約束したでしょ?」

「あー。持ってきてくれたの?」

「うん。後で一緒に見よ?」

そう言つて微笑む梨穂子。

思わずこちらも笑みがこぼれるが、その気持ちは自分達をにやけ面で眺めていた妹の様子によって、すぐさま冷まされた。

「にしし! なあに?もしかしてみやーはお邪魔?」

「そんなことないよ。美也ちゃんも一緒にね?」

「うーん……残念だけどりほちゃん。みやーは今、受験生なのだ!」

無い胸を張りながら堂々と宣言する美也。

その様子を見た梨穂子は、笑みを浮かべながら口を開いた。

「そっかあ……息抜きしなくなったらいつでも言つてね?」

「うん! ということでのいにい? みやーは勉強に戻ります。りほちゃんの相手はよろしくね?」

「おう。がんばれな」

はーい、と元気よく返事を返した美也は、ドタバタと駆けながら自分の部屋へと戻って行った。

自分も一度部屋へ着替えに戻ろうかと思ったのだが、同じ部屋にいる幼馴染が隣を手でぽんぽんと叩いているのを見て考えを改める。

鞆だけを部屋の隅に置くと、誘われるがままに彼女の隣へと腰を下ろした。

「梨穂子がうちに来るのも、なんだかんだで久しぶりだよな」

「そうだね。昔はよくこうやって一緒のコタツであつたまつたのに」

「懐かしいな。……なあ、ところで梨穂子？　なんだかこのコタツ狭くないか？」

「……………き、気のせいじゃないかな？　あは、あはは……………」

冷や汗を流しながら体を無理に端に寄せてごまかす梨穂子。

女の子に体型のことをどうこう言うのはデリカシーに欠けるといふ認識はあるのだが、茶化す意味でなく本当にコタツが狭く感じられたのだ。

そつぽを向いてわざとらしく口笛を吹く幼馴染に、冷ややかな目線を送りながら言葉を発する。

「……………太ったのか」

「そんなことないよ！　今日はちよつと調子が悪いだけで……………えーつと……………」

心外だと彼女はすぐに訂正してきた。

……………なのだが、うまく言い訳の理由が見つけれられないようで、あわあわと慌てふためきながら言葉を濁している。正直見ていられない。

「……………いや、いいよ。ごめんな梨穂子。ちよつとデリカシーが足りてなかったな」

「ちよつと！　謝らないですよ！　本当に今日は調子が悪いんだって……………」

「体重って日によって変わるものなの……………」

「えっ？　朝と夜で変わったりしない？」

そりや飯食う前と後とじゃ体重も変わるだろうよ。

いや、この話はここまでにしておこう。これ以上は、幼馴染の女性

としての沽券にかかわる。

そう思った自分は、なんとか慌てる梨穂子をなだめ、話題を変えるために話しかけた。

「で、梨穂子は今日はどうすんの？　うちでご飯食べてく？」

「うん。そのつもり。おばさん今日は遅いんでしょ？　美也ちゃんがカレー食べたと言ってたから作ろうと思うんだけど……」

梨穂子がこうやって料理を作りにきてくれることは、たまにだがある。

うちは親が共働きで、日によっては夜遅くまで帰宅しないことまで度々あり、幼い頃は家族ぐるみで付き合いのあった梨穂子のお母さんによく晩御飯をご馳走してもらっていた。

そして、中学に上がるとその役目は彼女の料理の勉強を手伝うという名目で梨穂子に移ったのだ。

所々抜けたところのある梨穂子だが、料理の腕だけは非常にレベルが高い。今はもう、うちで料理の練習をすることはなくなったのだが、妹が度々ねだるので彼女も快くそれを引き受けて腕を振るつくれるのだ。

「いいんじゃない？　俺も久しぶりに食べたいかも」

「ほんと？　じゃあ6時過ぎくらいには食べられるように作るね！

材料は冷蔵庫にあったから、楽しみにしてて」

「ん、ありがと。なんか手伝うことある？」

「えーっと、じゃあ純一はサラダをお願い」

「りょーかい。まあ後20分はのんびりしてようか」

時計の針は5時15分を指している。今すぐ作業に取り掛かる必要はないと感じた自分はその場に寝転ぶと、隣の幼馴染の話に相槌を打ちながら、だらしない姿で煎餅にかぶりつくのであった。

高校生ならではのイベントと言えば何が挙げられるだろう。

パツと思いついくものだと、体育祭や定期試験、修学旅行に卒業式、それから、文化祭といったところだろうか。

この中でも文化祭と言えば一大イベントだろう。クラス全員で1〜2ヶ月ほど準備をし、生徒主体でイベントの計画から運営までを行うという数少ない行事だ。所詮出し物も子供騙しといった内容だが、そもそも子供である高校生にとっては十二分に盛り上がれるはずだ。

当然、自分たちの通う輝日東高校にも文化祭は存在する。しかしこの学校の文化祭は他校のそれと比べて、異質といっても問題ないはずだ。

別に、内容がどうだとかの違いはない。強いて挙げるなら巨大なクリスマスツリーの装飾を実行委員が行うと言うことぐらいだろうか。では一体何が他校と違うのか。それはズバリ日程なのだ。

輝日東高校創設祭は12月24日のクリスマススイヴの朝から夜にかけて開催される。クリスマスイヴといえば普通の学生にとって冬休み真っ只中であり、そんな時期に文化祭を行うなど正気の沙汰じゃないだろう。

そう。この輝日東高校は正気ではないのだ。具体的に述べると冬休みの期間が他校のそれと大幅にずれており、なおかつ圧倒的に短い。その代わり夏休みが9月終わりまでであるので、休みの総数としてはそこまで変わりはないのだろうか。

そんなこんなで他校の生徒が続々と長期休みに入る中、自分たちは普通に授業を受け、同時に創設祭の準備も進めていた。

そして今日がとうとう12月24日、創設祭当日だ。

自分たちのクラスの出し物はクレープ屋という無難なもので、自教室を使用し朝から昼過ぎまで営業を行なった。料理のできる女子がそれなりにいた自分のクラスは、学級委員である絢辻の統率の元それなりに息のあったコンビネーションにより、無事完売まで客を捌ききることができた。

そして、残しておいた具材で焼いたクレープとジュースによる乾杯を行なった後、簡単な片付けを済ませて解散となったのだ。

さて、今の時刻は5時半。日はとうに落ちきっているのだが、これから創設祭の本番と言っても過言ではないだろう。

朝と昼は主に外部からの来客に向けた出店なのだが、それが終わってからの後夜祭は、内部の人間に向けての出し物が多く開催される。校庭には数多くの部活が屋台を出店し、メインステージではミスコンを含め様々なイベントが行われている。もちろん強制ではないので全員が参加するわけではないのだが、それでも数多くの在校生によって校庭は賑わっていた。

自分は茶道部を訪れるという約束を梨穂子と交わっていたのだが、約束の時間まではまだ20分程度の余裕があり、時間をつぶすために一人でぶらぶらと露店を見て回っていた。

特に目的があるわけでもないのに、屋台の内容と店番をしてる人の顔を数秒目に入れると次に移るというのを繰り返していたのだが、ふと近くの店に見知った顔があるのに気がついた。

その屋台とは水泳部の出し物であるおでん屋だ。だとすれば、店番をしている見知った顔というのも必然的に一人に限られる。

自分が向けている目線に気がついたのか、彼女はこちらに顔を向けると軽く手を振ってきた。

気づかれなければスルーしようかと考えていたのだが、どうやら構ってもらおう余裕があるようなのでそちらの方に足を運ぶことにした。

「いらっしやい橘くん。おでんどう？ 美味しいわよ？」

「牛すじ入ってます？」

「ないわね」

「じゃ、いいです」

つれないわね、と塚原先輩は表情を変えることなく返してきた。

知り合いの水泳部員とは塚原先輩のことだ。三年生が受験で引退した今、先輩は女子水泳部の部長に就任している。

ファーストコンタクトこそ微妙な状況であった自分と先輩だが、彼

女は森島先輩の親友ということでもよく二人で行動しており、顔を合わせ共通の知り合いとなり得たことで会話をする機会がぐっと増えた。そして、同じ森島先輩に振り回される同士として妙な共感を得られたのか、今では森島先輩抜きでも会話を交わすほどには親交を深めている。

ただ、いくら顔見知りとはいえ買う気がないのに店先に止まるのは迷惑かと思ったので、挨拶だけして立ち去ろうと考えた。しかしそんな自分の心情を察してくれたのか、先輩は笑顔で引き止めてくれた。「別に構わないわよ。そろそろメインステージが騒がしくなる時間だし、退屈してたの」

「そうなんですか。じゃ、お言葉に甘えて」

「ええ。というか、橘くんはミスコン見ないの？」

塚原先輩の言うミスコンとは、輝日東高校後夜祭の伝統行事であるミス・サンタコンテストのことだ。その名の通り、サンタの格好をした女子生徒の中から一番を決めると言うイベントである。

やはりミスコンということもあり、出場する人物は皆ルックスに自信を持つ人ばかりなので男子生徒の大半は見物に行くのが通例だ。

だが自分はイマイチ気がそられない。というのも……

「結果が見えてるじゃないですか。森島先輩が生娘どもを蹂躪するのを見て、大して盛り上がれませんって」

「そう？　ほとんどの男子がそれを目当てにしてると思うんだけど。橘くんって変わってるのね」

そう言っただけで微笑む塚原先輩。

ほんとはサンタコスに森島先輩に興味がないわけではないのだが、今からイベントに参加すると中途半端な時間で抜けなければならなかったため諦めている。

まあ正直、いつも通りにノリノリで男子を悩殺する森島先輩を見れない悲しさよりも、貴重なエプロン姿で微笑む塚原先輩を見れたことに対する喜びが優っているので特に問題はない。

せっかくだしストレートに褒めてからかってやろうかと思いついたので、心の中でいやらしい笑みを浮かべながら塚原先輩に話しかけ

た。

「まあ代わりにエプロン姿の塚原先輩を見れましたし。役得じゃないですかね」

「なにそれ。口説いてるの?」

「だとしたらどうします?」

そう尋ねると、塚原先輩は顎に手をやり考え込む仕草をする。

先輩の慌てふためく姿をを期待していたのだが、思わぬ反応をされたことのでつい動揺が顔に出してしまう。

そんなこちらの表情を確認した先輩はゆつくりと顔を上げると、満面の笑みを浮かべながら口を開いた。

「わたし、たくさん食べる男の子がタイプなの。これ全部片付けてくれたら喜んでお付き合いですよあげるんですけど?」

「お疲れでした! 店番頑張ってくださいね!」

またね、と微笑みながら軽く手振る塚原先輩の姿を尻目に、自分は早々にその場を立ち去ることにした。

やはり塚原先輩は強敵だった。伊達に何年も森島先輩に振り回されているわけじゃない。

そうして確かな敗北感を感じながら、逃げるように人混みの中へと消えていくのであった。

◆◆?

塚原先輩と別れた自分は適当に露店を冷やかしながら時間をつぶしていたのであったが、メインステージの熱が高まり始めたのを頃合いと感じ人通りの多いエリアから離脱した。

茶道部の出し物とは甘酒の提供であり、あまり目立つようなものではない。しかし、部員たちが着物姿で接客を行うとのことなので毎年それなりに盛況している。

ただ、メインステージでの出し物が盛り上がるこの時間帯は訪れる

人が減り始める。だからこそ知り合いを訪ねるなら丁度いいだろうと考えたので、この時間で梨穂子と約束したのだ。

そんなこんなで、今は校舎裏にある茶道部の部室を目指して人通りの少ない道を歩いていたのだが、突然後ろから声をかけられた。

「あれ？　桜井の旦那じゃん！　何してんの？」

後ろを振り向いた先にいたのは、ショートカットの活発そうな女の子。確か梨穂子のクラスメイトのはずだ。よく行動を共にしている姿を見かける。

名前は……

「あー……伊藤ちゃんだったっけ？」

「……間違っではないけど、できれば名前で呼んでくれるかな」

「おっけー。香苗さんね」

小太りの中年男性である古典教師の伊藤ちゃんと同じ呼び名で呼ばれるのは、女の子にとっては複雑な気持ちなのだろう。改めて名前と呼ぶと、伊藤香苗さんは満足そうな表情で頷いた。

「そつちの名前って、橘くんであってるわよね？」

「うん。橘純一。よろしくね」

「よろしく！　で、ただけど。橘くんも桜井のところに？」

「そうだよ。まあ幼馴染として顔ぐらい見せようと思ってさ」

「そうなんだ。なら、良かったら一緒に行かない？」

特に断る理由もなかったのです承すると、彼女は横について歩き始めた。小柄な彼女が自分と並ぶと、なんだか兄妹のように見えなくもない。

初対面の彼女と何を話そうかと考えていたのだが、それよりも先に彼女の方が口を開いた。

「ねえねえ！　橘くんってさ、桜井と付き合ってるの？」

「……ただの幼馴染だよ。仲がいいのは確かだけどね」

いきなり突っ込んだ話をしてくる香苗さんだが、そのような疑問を投げかけられるのも初めてではないので、特に動揺することもなく淡々と返答する。

どうやら彼女にはからかう意思はなかったようで、こちらの言葉に

納得すると質問の真意を教えてくれた。

「ふーん、そうなんだ。いやさ、桜井ってかわいいじゃない?」

「そうだね」

「でしょ? だから男子の間でも結構人気なんだけどさ。あんたと付き合ってるのかもしれないからって理由でなかなか告白されないみたいなの」

「ええ……それは……」

それは……なんというか……。

かわいい妹分に変な虫がつかなくて喜ばしいのか、それとも彼女の恋路を邪魔してまって申し訳無いのか、なんとも形容しがたい気持ちだ。

思わず微妙な表情を浮かべてしまったが、香苗さんは特にこちらを気にかける様子は見せず話を続ける。

「わたしとしては桜井に変なのが寄り付かなくて助かってるんだけどね。ほら、あいつ割とヌケたところあるじゃない?」

「それはもう。十二分に把握してるよ」

「でしょでしょ? だからさ、いつそのことあんたらが付き合ってくれたらこっちも安心できるのになって」

「その会話の流れで何が『だから』なのかがわからないんだけど……」

呆れ顔でそう呟くが、香苗さんは特に返答することもなく話題を梨穂子の日常生活へと変えてきた。

なんだろう、ノリがいい女の子ではあるようだが、結構マイペースな性格のようだ。

……いや、相手が自分だからだろうか。一瞬真面目に話しているのかと動揺してしまっただが、堪え切れないかといった様子で笑いを吹き出した香苗さんに、背中をバンバンと叩かれた。どうやら今のは単にからかわれていただけらしい。

そんな調子で軽く打ち解けた自分と香苗さんは、二人で茶道部の部屋へと向けて歩みを進めるのであった。

「あつ！ 純一と香苗ちゃん！ いらつしやい！」

「おつす桜井！ 着物姿似合ってんじやん！」

「そうかな？ えへへ……」

香苗さんにそう褒められ照れる梨穂子は、桜色の着物に身を包んでいる。普段とは違い髪の毛も後ろで纏めており、その格好は彼女によく似合っていた。

「というか、これはもしかして生まれる時代を間違えているのではないだろうか。もし時代が着物を普段着として着用することを許していたら、きつと彼女はとてつもない美人としてもはやされていただろう。」

香苗さんに続いて、軽く梨穂子と挨拶を交わす。

「そうして調子を取り戻した彼女は、自分と香苗さんの姿を不思議そうに見つめると口を開いた。」

「あれ？ 純一と香苗ちゃんって知り合いだったっけ？」

「何言ってるんだ梨穂子。この前道で会った時に紹介してくれただろ。忘れたの？」

「あー！ そうだったね！ ごめんごめん、うっかりしちゃってた」

「いや、今日初対面だから……」

「適当に吹いたホラを信じ込んだ梨穂子は、すぐさま訂正してきた香苗さんの言葉に絶句した。」

その姿が面白くて、つい笑いが漏れてしまうのであったが、香苗さんから冷ややかな視線を向けられ慌てて口をおさえる。

「妙な威圧感に思わず冷や汗を流してしまふ自分の姿を眺めた香苗さんは、大きいため息を吐くと口を開いた。」

「はあ……あんたらがどういう関係なのか良くわかったわ……」

「まあ大体こんな感じだわな」

「面白いのはわかるけど、からかいすぎちゃだめよ。節度を守りなさい」

「りよーかい」

「ちよつと香苗ちゃん!? わたしの意思は!?!」

勝手におもちやにされようとしている状況に勢い良くツツコミを入れる梨穂子。

その様子をクスクスと笑った香苗さんは、笑い顔のまま梨穂子に話しかける。

「ごめんごめん桜井。それより、甘酒飲ませてくれるんでしょ？」

そうだった、と気を取り直した彼女は、着物故に小さな歩幅でトテと部室の奥へと向かっていった。

それを見送った自分たちは、庭に出されている腰掛の中から適当に選んだものに腰を下ろした。

その後、香苗さんと談笑しながら梨穂子が戻ってくるのを待っていたのだが、突如として誰かに後ろからがっしりと肩に手をかけられる。

驚いて体をビクつかせてしまったのだが、こちらが疑問を口に出すより先に声をかけられた。

「よう橘！ やっと茶道部に入部する決心がついたか！」

「歓迎する……」

振り向いた先にいたのは着物姿に身を包んだ二人の少女。茶道部部長の夕月琉璃子先輩と、副部長の飛羽愛歌先輩だ。

夕月先輩はショートヘアにメガネをかけており、男勝りな性格の人。一方、飛羽先輩は長く伸ばした髪を前にも垂らした、どこか鬱屈した雰囲気醸し出している人だ。

彼女たちとは梨穂子を通して以前から面識があったため、割と気安く接してもらっている。

「こんちわつす。甘酒飲みにきただけですよ」

「そうか？ ついでに入部してくれてもいいんだぞ？ ほら、これを提出するだけで終わりだから。簡単だから。な？」

そう言つて、夕月先輩は帯の隙間から折りたたんだ入部届けを取り出した。毎度のことながら、何故かその用紙は必要事項が全て記入されており思わず背筋に寒気が走る。

ドン引きする自分の姿から今日の勧誘を諦めた先輩は、渋々入部届けをしまうと、表情を変えて話しかけてきた。

「いや、でも橘が来てくれて助かったよ。悪いんだけどさ、甘酒飲んだらちよつと手を貸して貰えないか？」

「ん？ 何かあったんですか？」

自分がそう尋ねると、先輩は部室の一角を指差した。

思わず顔を見ると無言で顎をしゃくってきたので、その意思を汲み取り外から縁側の扉を開く。すると、その先には予想だにしない光景が広がっていた。

「……は？ 高橋先生？」

我が担任の高橋麻耶先生が、何故かだらしない格好で横たわっていた。

何かあったのかと動揺した自分は慌てて駆け寄ろうとしたのだが、それより先に夕月先輩に腕を掴まれる。

「おい。よく見てみろ」

微妙な表情で諭してきた先輩の言葉に従い、まじまじと先生の姿を注視する。

美人で有名な高橋先生は大人の女性らしく化粧を済ませており、眠りについている姿もどことなく色っぽい。その表情は穏やかで体調不良というわけではないようだ。顔の血色も良く……というか、血色良すぎる気がする。良く見ると顔全体が薄く赤く染まっていた。

そう、その姿はまるで……

「……酔っ払ってる？」

「ああ。甘酒飲んでな」

「え？ 冗談ですよね？」

夕月先輩の言葉を信じきず、飛羽先輩の方にも目を向けたのだが、無言で首を振られてしまった。

え？ 甘酒のアルコール度数って1%未満だよな？ ってか、仮に先生がとてつもなくお酒に弱かったとしても、既に何年か社会を経験してるのに潰れるようなミスを犯すはずないだろ。

様々な疑問が頭の中を過ぎるが、とうとう納得できる答えを見つけてしまい、恐る恐る口を開いた。

「先輩……一服盛りましたね？」

「ちげーよ！　なんでそうなるんだ！」

バシッとそれなりの強さで頭を叩かれた。

思わず叩かれたところを抑えて蹲る自分に、夕月先輩は呆れ顔で事情を話し始めた。

「どうやら高橋先生がアルコールにとてつも無く弱いのは本当らしく、茶道部にやってきて潰れるのは毎年の恒例行事なのだそうだ。」

先輩たちは止めたそうなのだが、先生は自信満々に今年は大丈夫と押し切ったらしく、その結果スイッチが入ってしまい何杯もせびられて潰れるに至ったらしい。

この言葉が事実だとすると、彼女は解雇されていてもおかしくないのだが。

いや、どうなのだろう。今の時間帯はおそらくオフなのだろうし、ユーモアで済まされるのだろうか。

高橋先生のごことは自分もいい先生であると思っている。それは、教科担任としても、クラス担任としてもだ。

授業はわかりやすく、放課後に質問に行っても笑顔で根気よく教えてくれる。担任としては友人の少ない自分のことを気にかけてくれたことからも非常に面倒見の良い教師だとわかる。

彼女の人徳からすると、これくらいは大目に見られてるとしても納得できなくはない。

そうやって思考にふけっているうちに高橋先生は目を覚ましたよううで、ゆっくりと体を起こすと目をこすってから周りを見渡した。

そして自分と目が合うと、上気した顔で一言。

「あー！　橘くん！　あ　友達できた？」

「ええ……」

開口一番のセリフがそれなのか。馬鹿にされると怒るべきか、気にかけてもらえると喜ぶべきか判断がつかない。

ただ一つだけ言えるとしたら、周りにいた知り合いたち全員の爆笑の渦に巻き込まれてしまったのは、彼女の発言のせいなのだろう。

腹を抱えて笑っていた夕月先輩だが、なんとか呼吸を整えるとニヤケ顔のまま話しかけてきた。

「くっ……はあ、はあ……よかつたな橘？　少なくともりほっちと香苗は友達だつて言つてやれよ」

「そっ……そうだよ、橘くん？　私は友達だと思つてるから……ぷっ……」

「笑うのか気を使うのか、どっちかにしてください……」

本気でへこみかけた自分の姿に流石に罪悪感を感じたのか、夕月先輩はからかうのをやめて人のいい笑みを浮かべる。

「悪い悪い。それよりさ、先生起きちゃったから先に人のいるところまで連れてくの手伝つてくれないか？」

「はあ……わかりました。肩を貸せばいいんですね？」

「ああ。頼むよ」

甘酒を運んできた梨穂子に事情を話した自分は、未だ泥酔している高橋先生をなんとか立たせ、夕月先輩に誘導されて創設祭本部へと向かうのであった。

定期試験。それは、学生にとって逃れる事のできない試験。しかも高校生にとってのその重要度は、中学生までのものと一線を画している。

中学の定期試験は補習等の罰則こそ存在するものの、それさえクリアできれば何の問題もなく学生生活を送れるだろう。しかし、高校生ともなるとそうはいかない。何故なら留年の危機というものが存在しているからだ。

もちろん留年する生徒なんて早々出ない。いたとしても、それはテストの結果ではなく、出席日数が規定されたものに届かなかったことが原因なのが殆どだろう。

客観的に見れば教師側も素行がまともな生徒を安易に放り投げるはずはないのだが、当事者である高校生にとっては理解はできても安心できるかと言えば話は別だろう。

そういうことは大抵先輩から後輩へと噂として受け継がれるものだ。「テストの結果がこれだけまずいと留年になる」や「自分の知り合いの先輩のクラスには留年生がいた」といった風に。

2月ももう両手で数えるほどになったことで、輝日東高校は学校全体がどこかピリピリとし始めていた。

それは学年末テストまで、後2週間を切っているからだ。この時期は今まで真面目に勉強してきた生徒と、いくつかの科目でリーチをかけられており、散々教師に脅されている生徒の表情に差が現れはじめる。

自分のクラスもそれに当てはまり、何人かの生徒は相変わらず勉強はしないまま悲観に浸っている姿を見て取れる。4限の授業の終了直前に数学の教科担任が少し早めに授業を切り上げて脅しを入れたため、その雰囲気は色濃くなりつつあった。

そんな中、昼休み開始のチャイムがなったことにより一気に周りが騒がしくなる。自分は授業中に解いていたある問題に少しわからないうところがあったので、すぐには席を立たずそのまま2分ほどノート

に向かっていた。

「大将！　これからケンとマサと食堂に行かねえかって話してたんだが、どうだ？」

問題を解き終わり、ノートを閉じて大きく伸びをしたタイミングで梅原が話しかけてきた。その横には二人の男子生徒の姿がある。

これは冬休み前からの大きな変化なのだが、自分は最近3人の男友達と昼食を共にしていた。

今までは友達の友達といった関係だったケンとマサの二人だが、創設祭の出し物の店番で行動を共にしたのをキツカケに仲が良くなった。そして、梅原が仲を取り持つてくれたこともあり今では友人と呼べる関係にまで発展したのであった。

「悪い、今日コンビニだわ」

「あー、そうか……」

「変に気使うなって。また誘ってくれ」

事情があるとは言え、いつも複数人で行動しているメンバーから一人省くには妙な罪悪感を覚えるものだ。取るべき行動に悩んでいた梅原に今日は読書をしたいからと理由を告げると、彼は納得してくれたのかいつも通りの明るい表情へと戻った。

「いいのか大将？　今来たら梅原が奢ってくれるって言ってるぞ」

「おいケン！　なんで俺が払わなきゃなんねえんだ！」

「そうだぞ大将。人の金なんだしいいじゃねえか。梅原に感謝しろよな」

「お前もかマサ！　いい加減にしろ！」

「コントもその辺までにしとけて。梅原にはまた今度奢ってもらから。俺のことは気にすんな」

「おい！　あーもう、寄ってたかって何なんだよ！」

そうしてみんなで軽口を叩きあった後、食堂に向かう3人は一言ずつ自分に言葉を残して勢い良く教室を飛び出して行った。

一人でいることには慣れているしそれはそれで好きなのだが、こういう騒がしいのもやはり楽しいものだ。

ただ1つだけ不本意なことがあるとすれば、自分のあだ名が大将で

確定したことだろうか。しかも梅原がバツチリ由来を話してしまつたため、あの3人には完全にそういうキャラだと思われている。まあそれのおかげで親しみを感じてくれたのなら、そこまで悪いこととは言い切れないのだが。

3人の背中を見送つたあと、こっちはこっちで食事につくことにした。今日の昼食はコンビニで買った菓子パンとココアというのを簡素なものだ。

自分の家庭は母親も仕事で朝早いため、昼食は全て自己管理で行われる。そして、基本的に妹に弁当を作つて欲しいと頼まれた時に限り自分のも作るようにしている。

今日はそれに当てはまらず、特に食欲があつたわけでもなかつたため質素な食事を選んだ。学校にも購買はあるのだが、そこで買えるパンは近くのパン屋が出来立てを運んでくるということ人で人気があり、いつも混雑している。そして購買自体が1年生の教室からは遠いということ、売り切れを危惧してコンビニをチョイスしたのだ。

パックのココアにストローを刺し、菓子パンの袋を開ける。左の腕には開いた文庫本を持ち、読書をしながらパンにかぶりつく。

今日読んでいる本は「カラフル」という小説だ。昨年の7月に出版されたこの本は、先日本屋で立ち読みしている時にたまたま手に取つたものだ。その場で軽く目を通した時に妙な既視感を抱いたので、もしかしたら前世と繋がりのある創作物なのではないかと思ひ立ち、購入に至つた。

そんなこんなで昼休みを気ままに過ごしていたのだが、菓子パンを1つ食べ終わり、2つ目の袋に手をかけたところで絢辻に声をかけられた。

「橘くん、お客さんよ」

「ん？」

文庫本から目を離し彼女の顔を見つめると、教室の入り口を指さされる。

それに従い目線をそちらに移すと、そこにはわざとらしくモジモジと体をくねらせ、チラチラとこちらに目線をやる薫がいた。

普段の彼女とはあまりにもかけ離れた仕草に、思わず表情が曇ってしまう。

「どうしたの？ 行ってあげないの？」

そんな自分の様子に不穏な空気を感じたのか、絢辻が心配そうな表情で話しかけてきた。

我に返った自分は、慌てて表情を変えると彼女に1つ頼みごとをする。

「あのさ絢辻。悪いんだけど、あのワカメみたいなのにここに来るよ
う伝えてくれない？」

「わ、わかめ？ ……ええ、構わないけど……」

そう言って薫の方に向かって行った絢辻は、彼女にいくつか言伝すると自分の席へと戻って行った。

それと同時に薫がこちらに向かって歩いて来る。相変わらず気持ち悪い動作を続けたまま。

目の前に到着した薫はそのまま照れてる女の子ごっこを数秒続けていたのだが、ドン引きする自分の姿に気まずさを感じたのか、若干顔を赤らめながら話しかけてきた。

「た、橘くん……？ 教室でなんて……恥ずかしいよ……」

「5秒以内に要件を言わないと、問答無用で断るぞ」

「勉強教えてください！」

隼のようなスピードで頭を下げた薫は、ハッキリとした大きな声でそう頼んできた。

そんな彼女の行動に思わずため息がこぼれる。

「はあ……ヤベーのはどれなわけ？」

「……全部？」

「マジで言ってるの？」

「ウソ。現社が致命的で英語もちよっとって感じ」

そう言って顔を上げる薫。

そういえば彼女は中学の頃から社会科全般が苦手だったことを思い出した。ただまあ、現代社会なら1週間もあれば赤点を平均点程度までは上げられるだろう。

「おっけ。とりあえず授業プリント全部と、今までのテストの点数のまとめだけは用意しとけよ」

「てんきゅー！ さすが純一、やっぱり持つべきものは友達よね！」

「都合のいいやつだなあ、おい。飲み物くらいは奢れよな」

「もちろん！ 早速だけど今日の放課後からでいい？」

「おう」

「それじゃ、授業終わったら迎えに行くわね」

要件は伝えられたので、会話はそこで終わりのはずだ。彼女もわざわざ他クラスに残ってまで話を続けるほど、暇を持て余していることはないだろう。

そう思ったところで投げやりに返事をする、視線を再び文庫本へと移した。しかし薫は何故かその場から離れようとせず、逆に自分の肩をがっしりと手で掴んできた。

「……なんだよ」

仕方なく顔を上げ、彼女の顔に目をやる。ぶつかり合った視線の先にいる薫は、何故だか満面の笑みを浮かべていたのだが、その表情の裏には妙な威圧感を感じられた。

そのまま無言で数秒見つめ合う自分たちであったが、不意に薫が口を開いた。

「……で、誰がワカメですって？」

「悪い。海の幸だったか」

「ギルティー！」

そう叫んだ彼女は座っている自分に対し、それなりの強さでトキックを放った。そのつま先はふくらはぎへと突き刺さる。骨は避けたことで声を上げることにはなかったが、それでも痛みから蹴られた箇所を抑えて蹲ってしまう。

「だ、だって！ 海の中のワカメみたいな動きしてたじゃん……！」

「照れてたのよ。言わせんな恥ずかしい」

「絶対嘘だ……！ 理不尽過ぎる……！」

「ま、頼む立場だしそれくらいで勘弁してあげるわ」

未だ痛みに悶える自分を尻目に、彼女は簡素な挨拶を投げかけると

こちらを気にせず教室を出て行った。

相変わらず加減を知らない女だ。そんなんだから「輝日東の核弾頭」とか言う不名誉なあだ名をつけられるんだぞ。

そのまま十数秒は蹲って足を抑えていたのだが、だんだんと痛みが引いてきたので体を起こす。

すると、そのタイミングを見計らい絢辻が話しかけてきた。

「あ、あはは……橘くん大丈夫?」

こちらを心配して声をかけてくれた絢辻だが、その顔には苦笑いを浮かべている。薫にワカメと呼んだことを知らせたせいで蹴られたと、罪悪感を感じているのだろう。

変に勘違いを拗らせさせても申し訳ないし、少しでも空気を軽くするために、戯けた口調で彼女に話し掛ける。

「ヤベエよなアイツ。絢辻、PTAに訴えてくれていいんだぞ」

「えーっと……」

「冗談だって。いつもあんな感じだから気にしないで」

「そ、そうなんだ。えつと…蹴られたとこ、痛くない?」

「大丈夫。心配してくれてありがとね」

「ううん。それなら安心したわ」

そう言葉を交わすと、彼女は用事があるからと教室を出て行った。

多少気を遣わせてしまったようだが、フォローは入れたし自分と薫の関係はわかってくれただろう。

そうして、彼女が離れると同時に、自分も食事を再開するのであった。

◇ ◆ ? ◇

授業終了後、薫に連れられてやってきたのは学校からそう離れていないファミレスだった。しかしそこは薫のバイト先ではない。さすがに職場で知り合いに見られながら勉強するのはということ、そこからもう少し離れた場所にある、学生向けの値段設定の店をチョイスしたのだ。

空いていたボックス席を選び、自分は薫と向かい合うように腰を下ろした。そのままやってきたウェイトレスに飲み物だけを注文する。試験対策の勉強ということできっさりと始めてしまいたいのだが、それよりも先にどうしても尋ねなければならぬことがある。

「あのさ薫。そろそろ隣の子のこと紹介してくんね?」

何故かその場には自分と薫以外に、薫のクラスメイトである女の子が同席していた。ショートボブのどこか気弱そうな女の子だ。

授業後教室を出た時点でその子は薫と一緒にいたのだが、彼女からは一緒に勉強を教えてやってほしいとだけ話され、詳しいことは教えてもらえていなかった。

「そ、そうだよ薫。いい加減挨拶くらいさせてくれないと、気まずいつて……」

「そうね。なんか純一も思ってたよりもつままない反応しかなかったし、そろそろいっか」

「つままない反応って……」

どうやら彼女は初対面の女の子を同伴させることで、自分の反応を見てからかうつもりだったらしい。だが、そんなことされても普通に気まずさしか感じない。

「ごつち、私の高校からの友達の田中恵子。そんでごつちが中学からの付き合いの橘純一」

「ど、どうも」

「……よろしく」

投げやりに紹介を振られた自分と田中さんは、ぎこちなく挨拶を交わす。お互いにいきなりのことで戸惑ってしまい、そのまま数秒無言が続いた。薫は黙ったままなのでこちらで会話をしろとのことなのだろう。

黙っていても仕方がないので、無理やり口を開いて言葉を絞り出す。

「あー……田中……さん? も、現社がダメってことでいいんだよね?」

「う、うん。えっと、橘くん? 突然で悪いんだけど、よろしくね?」

「何よアンタら。普通に話せないの?」

「お前が普通に初対面のタイミングで紹介してくれてたら、こうはならなかっただろうよ」

「そうだよ薫、気まずさでいたたまれなかったよ……」

「仕方ないわね。あたしちよっとお手洗い行ってくるから。それまでに打ち解けておいてよね」

んな無茶な。

考えることは一緒だったのだろう、田中さんの顔を見ると彼女も形容しがたい表情を浮かべていた。そんな自分たちをよそに薫は席を立つと、スタスタとその場を立ち去って行く。

残された自分たちだが、ずっとこのままにいるわけにもいかない。何か当たり障りのない話題を出して空気を変えようと考えたのだが、それより先に田中さんの方が口を開いてきた。

「ね、ねえ。あのさ……橘くんと薫って、付き合ってるの？」

「……それは男女交際的な意味でだよね？」

そう尋ねると田中さんはコクリと頷いた。

思わずため息が出そうになるのだが、そう勘違いされる理由もわからないわけではない。ただでさえお互い気まずさを感じている状況なのだ。この話題から話を広げていくしかないだろう。

「ただの友達だよ。中3の時からだね」

「そうなの？ でも、名前で呼びあつてるみたいだし……」

「ある程度話すようになってからは俺が軽口を叩いてばっかだったからさ。お互いだんだん遠慮がなくなつてったんだ」

「そうなんだ……」

田中さんはあまり納得しているようには見えないが、これ以上は弁解するよりも自分と薫のやりとりを見て判断してもらおう方が早いだろう。

そう思ったところで、多少強引に話題を変えることにした。

「それより、田中さんはいつから薫と仲良くなったの？」

「え？ えーつと……たしか、最初の席替えがきっかけだったと思う」

「そうなんだ。でも、なんか意外かも。アイツに振り回されて大変じゃない？」

「あはは……でもまあ、それも結構楽しいし。やっぱりなんか気が合うんだよね」

そう語る田中さんの表情から、本心でものを言っているのが伝わる。

彼女の気持ちはよくわかる。自由奔放で人を振り回す薫だが、やはり一緒にいると楽しいのだ。でなければ自分など早々に縁を切っているはずだ。

それは彼女の魅力のなし得ることなのだろう。なんだかんだで面倒見もよく、持ち前の明るさで落ち込んでいる時もその気持ちを振り払ってくれる。「核弾頭」なんて呼び名を付けられているが、結局彼女はどこまでも善人なのだ。

その旨を田中さんに伝えると、なんとも味わい深い表情を浮かべて話しかけられた。

「……ねえ、二人ってほんとに付き合っていないの?」

「いや、違うって。なんでそうなるんだよ」

「ええ……はあ、もういいや。よくわかんないんだけど薫だし。それで納得することにする」

「お、おう」

大きくため息をついた田中さんだが、顔を上げると表情を明るくして口を開いた。

「それでさ、橘くんに現社を教えてもらいたいんだけど……」

「ああ、そうだったね。まあ教えるって言ってもヤマを当てるだけなんだけどさ」

「えっ!?! ヤマ?!」

田中さんは驚愕の表情を浮かべてそう叫んだ。

それに対して自分は笑いながら話しかける。

「まあまあ、これでも結構良く当たるんだよ。流石に表に名前が乗るまでは無理だけど、平均点以上は約束してあげられるよ?」

「ほんとう? 割と死活問題なんだけど……」

不安そうな表情を浮かべる田中さん。恐らく補習ギリギリの点数でここまできってきたのだろう。

自信があるのは本当だ。現代社会の授業は主にプリントの穴埋めを通して進められるのだが、ある程度勉強を進めている人間からすればどこがテストに出されるかの予想は大体つく。

学年末テストとのことでプリントの総数は20枚近くに登るのだが、上手くやれば半分以下には絞れるだろう。そうすれば、苦手意識のある二人でもきちんと勉強してくれるはずだ。

そんなこんなで田中さんにこれからの勉強を説明しているうちに、薫が席に戻ってきた。

「おまたせ。あんたよりも上手くやれてるみたいね」

「ま、なんとかな。それより、さっさと始めるからお前も早くプリント出せよ」

「りよーかい。お願いね」

二人から授業プリントの束を受け取った自分は、マーカーを片手に問題の選別作業に移るのであった。

◇ ◆ ? ◇

「ねえ、純一？ あんたってさ、がつつり勉強してるわけでもないのになんでそんなに成績いいの？」

「人より早く始めてたからな。小学校の時とかほとんど友達いなかったから。ずっと図書室で勉強してたわけ」

「ええ……」

変化とは二つに分かれるものだと思う。それは、いい変化と悪い変化だ。もちろん、一概に判断できない場合も多い。しかし、主観で判断するとなると大体はそのどちらかに帰結させることができるはずだ。

2年生に進級した自分に起こった変化は、どちらかと言うといい変化であったと思っている。

新しいクラスに知り合いが多かったことは、交友関係が狭い自分にとって是有難いことだった。ケンとマサとは文理選択によって別れてしまったが、1年のクラスだと梅原と絢辻、それ以外の知り合いだと薫と田中さんと同じクラスになることができた。

特に梅原と薫と同じクラスになれたのは嬉しかった。これからの多くの学校行事で気心の知れた奴らと馬鹿をやれると思えば、楽しみも増すというものだ。

それからこれも大きな変化なのだが、妹の美也が無事、輝日東高校に進学することができた。

自分も受験勉強の手伝いをしていたので合格は問題ないだろうとの予想はついていたのであるが、それでもやはり合格発表までは自分のことのように緊張していた。その分合格がわかった時の喜びも大きかったが。

ここまで自分の身の回りの変化について語ったが、もちろんトータルで見れば変わらないことの方が多い。

相変わらず森島先輩はかなりの頻度でラブレターをもらっているし、梅原は先輩に振り向いてもらえていない。茶道部にも新入部員は入っておらず、高橋先生は独身のままだ。

結局、学年が一つ上がったことで生じる変化など些細なものなのだ。新しいクラスメイトなどは1週間で慣れるし、逆に離れ離れになってしまった友達とも案外顔を合わせる機会は多いことを知った。

進級から2ヶ月経った6月のある日、自分は目新しいことを一通り経験し終わり心情的には落ち着きを取り戻し始めていた。

現在は昼休みの時間なのだが、今日はいつも昼食を共にしている梅原と薫の二人が食後すぐに出なければならぬ用事があるとのこと、一人で過ごしている。

新しい教室にも慣れたし、相変わらず知り合い以外の人間関係は広げられていないので、特に自教室に止まる理由も見つからず、今はふらふらと学校をさまよっていた。

と言っても広くて狭い高校だ。他学年のフロアなどには行く気もないし、散歩をするとなるとやはり校舎の外に限られる。

下駄箱で上履きから革靴へと履き替え、玄関から外へ出る。春の暖かい日差しに思わず目を細めるが、数秒で慣らすと足を動かして校舎の周りを歩き始めた。足を止めてしまうと変質者になってしまうので、基本的には歩きながら外の様子を眺める。

昼休みとはいえ校庭は多くの生徒で賑わっていた。

軽く周りを見渡すと、熱心な運動部が昼間も練習をしている姿を見て取れる。また、部活の邪魔にならないような空いたスペースでは、何人かの男子生徒が戯れに体を動かしていた。

ただまあ、知り合いの姿は見当たらないので特にそれを眺め続ける理由はない。ゆっくりとした歩幅で歩いてはいるが、2、3分もするとその場を後にすることになった。

校舎を一周して玄関へと戻って来るつもりだったので、校庭を通り過ぎた後は校舎裏へと足を運ぶことになる。人気のない校舎裏を花壇を眺めながら歩いていると、やがて校舎と校舎をつなぐ渡り廊下へとたどり着いた。

下級生の校舎と上級生の校舎をつなぐその廊下なのだが、そこには見知った顔が二人と、見慣れない人物が一人、計3人で談笑している姿が見えた。

校舎を一周するためにはその場を突っ切る必要があるのだが、内輪で盛り上がっていると声をかけるのも気まずい。

そう思った自分は後ろを向いて引き返そうとしたのだが、背を向けた時点で向こうに気づかれたのか、大きな声で引き止められた。

「あつー！ おーい、橘くんー！」

聞こえないふりをするには無理がある声量と距離感だったので、諦めてそちらに顔を向ける。自分の名を呼んだ森島先輩は手を振りながらこちらを見ており、これでそのまま立ち去るのは失礼だろう。

一言挨拶を交すべきだと感じた自分は、軽く会釈をしながら先輩達の方へと近づいて行った。

「こんにちは」

「こんにちは橘くん。こんな人気の少ないところで何してるの?」

「何もすることがないから来たんですよ。ただの散歩です」

いきなりその場に現れた自分に対し、塚原先輩は邪険に扱うことなく、挨拶を返してくれた。

「そうなんだ! わたしも同じで暇してたんだ。そしたら響ちゃんたちがお話をしてるのを見かけたから、交ぜてもらったの」

「真面目な話をしてたんだけどね。はるかかったら、遠慮が無いんだから……」

「へえ。じゃあ、その子は水泳部の後輩ですか?」

そう言つて、自分は塚原先輩と森島先輩に挟まれるような位置に立っていた女の子に目を向ける。彼女の方は突然現れた男子生徒に困惑しているようで、硬い表情でこちらを見つめていた。

塚原先輩はおそらく肯定の意思表示をしようとしたのだが、それよりも先に森島先輩が口を開いた。

「橘くん、当ててみてよ」

「いや、だから水泳部の後輩なんじゃないかって……」

「ほんとにそれでいいの? 響ちゃんは委員会もやってるし、そつちかもよ?」

ノリノリで提案してくる森島先輩。しかし、知人の知人という微妙な距離感の人が近くにいる状況ではイマイチ乗り気になれない。

助けを求めるように塚原先輩の顔を見つめると無言で顔を振られてしまったので、どうやら付き合うしかないようだ。

「当てられたら何か貰えるんですか?」

「え? うーん……響ちゃんのハグ……とか?」

「マジかよ。外せなくなりましたね」

「あなた達、いい加減にしなさいよ」

声を低くして自分たちを止めにかかる塚原先輩だが、それを無視して思考に耽る。

こんなものボーナス問題に近いのだが、普通に答えても面白くないし、何かひねりの効いた答えを探すことにした。

どうせハグなんかしてもらえないだろうし。

本当はもう一度女の子の顔を確認したいのだが、見知らぬ男子生徒に見つめられるのも気まずいだろう。先ほど目に入った姿を思い出して考える。

確か髪型はショートヘアだったはずだ。身長は先輩方よりも低かったのも、女子の平均程度。

ルックスは……目つきは鋭かった気がする。ただ、顔のパーツは整っており美人と評価しても問題ないだろう。スタイルも悪くなかったはずだ。胸の大きさは年相応であったが。

なんとというか、かわいいと美人を足して2で割ったような女の子だ。あくまで外見での判断だが。

そこからある答えが導き出せた。絶対ありえないものなのだが、なんだか面白そうなのでそのまま口に出すことにする。

顔を上げた自分は答えを待つ二人の顔を眺めると、ゆっくりと口を開いた。

「塚原先輩と森島先輩の隠し子ですね。あの噂は本当だったんだ……」

「はあ……………」

「違うわよ！ って橘くん!? あの噂ってなんなの!?!」

塚原先輩は深いため息を吐き、森島先輩は大きく動揺している。

「ははは、隠さないでもいいですって。僕たちの仲じゃないですか」

「だからあの噂ってなんなのよ!?! 教えてよ!」

「じゃあね後輩。お母さんとママを大事にしろよ」

自分はわーわーと叫んでいる森島先輩を尻目に、ドン引きしている後輩に一言挨拶すると、彼女達に背を向けてその場を立ち去ることにした。

ちなみにあの噂とは塚原先輩と森島先輩が実はデキているというものだ。たつた今自分が作ったので出回ってはなない。

相変わらず自分の名前を呼ぶ声は聞こえるが、塚原先輩がいることだし上手くフォローを入れてくれるだろう。一つ問題があるとすればあの後輩と顔を合わせづらくなつたことだが、そもそもそんな機会ないだろうし問題はなない。

そう思つた自分は、自教室へと戻るために来た道を引き返すのであつた。

◇ ◆ ? ◇

突然だが、この輝日東高校には時々猫が現れる。首輪はつけていないので恐らく野良猫だ。

それは特に有名な話というわけではなく、放課後に校舎裏を訪れる風変わりな人のみ知り得る情報だ。

悲しいことに一年生の終わりまでほとんど友人が存在しなかつた自分は、その猫を見かける機会が多かつた。特にエサなどは与えていないのだが、人懐っこい性格だったのかよく撫でさせてもらえ、今では顔を合わすと自分から寄つてきてくれるようになった。

しかし、長期休みである春休み中はもちろん、新学期が始まつてからも色々あつて3ヶ月ほどその猫とは会えていなかつた。

なので、ひと月ほど前から暇があるときは放課後に校舎裏を訪れることにしている。

今日は特に用事もなかつたので、猫と戯れるために校舎裏を散策することにした。

心当たりのある場所を順番に見て回る。彼だか彼女だかわからないが、自分がその猫を見かけるポイントは主に3箇所ほどあり、そのうち2つは不作だつた。

そして、とうとう3箇所目が目で見て取れる距離まで近づいたのだが……

「おっ」

いた。

遠くから見つめる自分の目線の先には、校舎裏の非常階段の下のコンクリートに寝そべりながら日向ぼっこをする黒猫の姿がある。

急に近づいて驚かれたら困るので、わざと足音を鳴らしながら近づく。すると、猫の方もすぐに気がついたようだ。サツと体を起こすと大きく伸びをして、その後トテトテと自分の方に寄ってきてくれた。近くのコンクリートの段差に腰を下ろすと、猫は自分の膝に足をかけて登ってくる。そのまま体全部を乗せ終わると、楽な姿勢を取れるポジションを探して寝転がってきた。

どうやらコイツは自分のことを覚えていてくれたようだ。

背中を撫でると気持ちよさそうに目を細めるし、喉を撫でるとゴロゴロと声を出す。

そんな微笑ましい猫の姿を取られ、自分の近くに寄ってくる人の気配には気がつかなかった。

2、3分はそのまま無言で猫を撫で続けていただろうか。ふと顔を上げて周りを見渡すと、5、6歩ほど離れた先から自分たちの姿を見つめていた人物と目があった。

「……どうも」

「……おう」

自分の目線の先にいたのは、今日の昼に先輩方と一緒にいた女の子。彼女は自分と目が合うと、無表情で会釈をしてきた。

特に驚くことはなかったのだが、昼間の出会いが出会いだけに、気まずい空気がその場に流れ始める。

そのまま数秒無言が続いたのだが、不意に彼女の方が口を開いた。

「その猫、」

「ん？」

「その猫、名前はありますか？」

そう言っって後輩は自分の膝の上を指差した。

猫の名前……そう言えば自分はいいつの名前を聞いたことがない。

特に人との会話で話題に出すこともなかったし、コイツが自分から名乗ってくれるわけでもないので、知る機会がなかった。

「わかんね。俺は知らないや」

「初めて会ったわけじゃないんですよね？」

「去年からの付き合いだね」

「……名前、つけないんですか？」

「必要ないじゃん」

「……そうなんですか？」

即答した自分の返事に対し、不思議そうな顔を浮かべる彼女。

やっと崩れたその表情は年相応のあどけないもので、張り詰めていた場の空気も少し緩やかになった。

「だってコイツは俺の名前を知らないよ？」

「まあ、確かに」

そもそも名前を呼ぶ機会がないのだ。猫と会話をするわけでもないし、呼んだら飛び出てくるというわけでもない。お互いに顔を合わせて初めてコミュニケーションを取れるという間柄に、固有名詞は不要だ。

ただまあ、彼女は猫の名前を知りたかつたのだろう。自分にとっては不必要と感じる名前だが、それを欲する気持ちもわからないわけではない。やはり、呼び名があると距離感は近く感じられるだろう。

相手が物言わぬ愛玩動物ともなれば、お互いの距離感などは人間側の主観で判断するしかない。では何を以て動物と仲が良いかと決めるかという点、客観的に見て取れる懐き具合以外だと、相手のことをどれだけ知っているかという情報量から測ることになる。

まあ、要は名前があれば気持ち的に仲良くなれる気がするのだ。

「名前、つけてあげれば？」

「……わたしがですか？」

「うん」

名前がないなら付けてあげれば良い。

きっとこの猫には他に可愛がる人から付けられている呼び名は存在するのだろうが、それはそれだ。新しい名前をつけたところで前のそれが消えるわけでもないし、そもそもコイツが名前というものを理解しているかも怪しい。名前がなくともコミュニケーションが成立

するのなら、こちらの自己満足でつけても問題はないはずだ。

「プーとか……」

後輩がしばらく考えて捻り出した名前は、黒猫に似合った可愛らしい響きのものだった。

彼女の方はあまりこういうことに慣れていないのだろう。自分のネーミングセンスに自信がないのか、不安そうな表情でこちらを見つめている。

「いいんじゃない？ こいつも喜んでるよ」

「わかるんですか？」

「ううん。そうだったらいいよねって思っただけ」

「……なんですかそれ」

こちらの返しに、彼女は呆れたような表情を見せる。

自分としては真面目に返答したつもりだ。どうせ動物の真意なんて絶対にわからないのだから、こちらの都合のいいように解釈するべきだろう。

動物の気持ちというものは、どう解釈してもこちら側の押し付けにしかない。大切なのは相手の気持ちを察することよりも、思いやりを持って接することなのだ。

その旨を彼女に伝えると、納得してくれたのか頷いてくれた。

しかし、会話はそこで途切れてしまう。自分は特に話す話題が見つからず、膝の上の猫を撫でることで気を紛らわす。

十秒ほどそんな自分たちを眺めていた後輩は、ふと表情を崩すと話しかけてきた。

「ふふっ。先輩って結構、まともな人だったんですね」

「ひでえこと言いやがる」

「自業自得です。初対面の時のアレ、セクハラで訴えられてもおかしくないですよ」

「まあ……」

「気にしてませんけどね。塚原先輩とか感心してましたよ。『橘くんもはるかを振り回せるほどに成長してくれたのか』って」

それは褒められているのだろうか。

皮肉として捉えられない気もしなくはないが、塚原先輩の性格とそれを語る後輩の表情から、どうやらマイナスの意思はなかったことを悟り安心する。

後輩の方も本当に気にしていないようだ。初対面の印象こそ最悪だったようだが、なんとかここまでこのやり取りで挽回できたらしい。

「あー……俺は橘純一。二年生。そっちは？」

「七咲です。七咲逢。よろしくお願いします、橘先輩」

今更だが自己紹介を交わす。

後輩の名前は「ななさき」というらしく、それは彼女の雰囲気似合う、澄んだ響きの名前だった。

「ななさきって、七つに崎？」

「いいえ。七つ咲いて出逢うで、七咲逢です」

「へえ。洒落た名前してるんだね」

「……ありがとうございます？」

疑問形で返答する七咲。

一応褒めたつもりだったのだが、あまり伝わらなかつたらしい。

その後、彼女と先輩方との出会いなどについて話しながら過ごしていたのだが、五分ほど経ったあたりで彼女は自分に時間を聞いてきた。た。

腕時計に目をやりそれをそのまま伝えると、彼女は部活の時間が近いので去らなければならぬと答えた。

「すいません先輩。わたし、そろそろ部活なので」

「そっか。水泳部だよ、頑張って」

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

ぺこりと頭を下げてからその場を立ち去る七咲。

クールで無愛想なように見えて、意外と律儀なやつだ。

彼女はすぐに自分の視界から消えて行ったのだが、自分はその場に漂う不思議な雰囲気当着られ、膝の上の猫に催促されるまでその場を動けずにいたのであった。

「なあ、大将。どうやったら彼女ってできるんだろうな」

「知らね」

放課後の図書室の二階、洋書が並べられている棚と棚の間で自分と梅原は雑談していた。

本来図書室での会話はご法度なのだが、このスペースは図書委員が座っている受付から遠く、なおかつ置いてある本が本だけに人気がほとんどない。

なので、普通に会話する程度の声量なら人に聞かれる心配をしなくて済むのだ。

「冷たい反応だな……」

「いや、だってさ」

何故わざわざ図書室を選んだかという点、特に理由があったわけではない。ホームルーム前にしていた会話の続きを何となく放課後まで引きずることになったのだが、今日はあまり関わりのない女子のグループが教室に残るようだったので、人気の少ないところを目指して適当に歩いていたら辿り着いたというわけだ。

「俺は16年陰キャ極めてたんだぞ。彼女なんかできたこともないし、作り方なんて想像もつかねえって」

「……あー、大将？ その…陰キャって、何だ？」

「陰気なキャラクターの略語」

自分の返事に対し、梅原は形容しがたい表情を浮かべた。

「……橘って、たまに訳のわからない言葉を使うよな」

「時代の最先端を駆け抜けてんだよ」

「お、おう」

若干引き気味に返事をする梅原。

こっちは本気で、少なくとも10年は先を歩いている自覚があるのだが。

前世の自分がいつ死んだかはイマイチ覚えていないのだが、記憶の断片から予測を立てると、恐らく2010年から2020年の間のはずだ。今年は1999年なので単純計算でそうなるだろう。

前世では10年以上先の未来で高校生をやっていた自分だが、基本的にこっちの人生で不自由を感じることはない。しかし、今のような言葉使用的なことになると話は変わる。

なんというか……前世のスラングは頭に染み付いてしまっているのだ。今の時代は存在していない言葉も、ふとした瞬間に口から出てしまうことが多々ある。

自分にしか通じない言葉を話すというのは、外からしてみれば変人以外の何者でもない。今でこそ略語以外のものが口から出ることはほとんど無くなったが、幼い頃は記憶の混同も相重なって結構苦労したものだ。

「まあ、学校にエロ本持ち込んでる限りはできねえだろうな」

「手厳しいな……」

「事実だろ。あんな女子に見られたら人生終わるぞ」

何たって内容がニツチすぎるのだ。「ローアングル探偵団」ってなんなんだ。タイトルで笑わせにきているとしか思えない。しかも、シリーズ化されているという事が余計謎だ。

「んじゃあよ、大将。どうやったら女の子と仲良くなれるんだ？」

「部活でもやれば？」

「それはもうやった」

幽霊じゃなくて真面目にやるんだよ。

思わずそうツッコミそうになったが、梅原も初めからやる気がなかったわけではない。男女混合の剣道部で、半年は真面目に部活をした上での経験談なのだろう。それなら今のは的外れな指摘になってしまう。

「なら、自分から話しかけるしかないんじゃね？」

「それができたら苦労しねえよ……」

梅原は困り顔でそう呟いた。

まあ、その気持ちはわからないわけではない。前世の自分が同じことを言われていたら、きっと実行できなかっただろう。

やはりこの年齢の男女にはそれなりに深い溝というものが存在している。今の自分がそれを気にしないでいられるのは、前世の経験を加算して、無駄に精神年齢が上がってしまったているからだろう。

前向きに捉えれば大人びてると言えるが、自分としては枯れてしまっているようで少し寂しい。

少し間が空いたことで気を取り直した梅原は、表情を変えるところに話しかけて来た。

「てかよ、大将はなんでそんなに余裕があるんだ？」

「ん？ なにが？」

「女子と話すことにだよ。俺は森島先輩相手に冷静でいられる気がしねえんだが……」

「自分があの人の眼中にないのがわかってるからな。恋愛対象的な意味で」

「寂しいこと言うなあ。んじゃ、絢辻さんとか柵町はどうなんだ？」

絢辻と薫……。

薫は中学からの付き合いという事で、距離感が近くてもドキドキするような間柄ではない。

別の意味でドキドキすることはあるが。

「薫は友達じゃん。そもそも、お前も普通に話してるやんけ」

「まあ、そうだな。なら絢辻さんはどうなんだ？ 確か1年の頃から仲良かっただろ？」

どうなんだろう。というか、絢辻とは本当に仲が良いのだろうか。

確かに1年の時から話をすることは比較的多かった。趣味が合うということ、向こうから話しかけられることも度々あった。

だが、仲がいいのかと言われれば少し返事に詰まる。

別に喧嘩をしたとかいうわけではない。なんというか、これは二人で話すようになってから気がついたのだが、彼女と話をしていると妙な壁のようなものを感じるのだ。

ただまあ、具体的にどういうものかというと言葉にできないのだが。あくまでこちらの感性の問題だ。

あとこれは別の話なのだが、絢辻との会話で三回話がスベると、親の仇を見るような目で見つめられることがある。彼女はすぐに表情を戻すのだが、やはり裏では嫌われているんじゃないかと怖くなってしまう。

「絢辻も話しやすい部類だろ？ だからクラスで慕われてんだろ？」

「まあ、そうか……」

「多分、梅原は色々考えすぎなんだろ。仲良くなるために話しかけるんじゃないってさ、話した結果仲良くなれるんだって思えば、ちよつとは気が楽になるかもよ」

「そんなもんか？」

「そんなもんだろ」

会話はそこで途切れてしまった。梅原は何か考えに耽っているようだ。

こいつも目線を自分の周りに向ければ、彼女くらいすぐにできる気がする。ノリもいいし、性格もいい。スポーツもできる。勉強はそこまですれないが、実家の寿司屋を継ぐと言っているし問題ないのだから。

なんというか、俗に言う「ワンチャン」が存在しない人に固執しているのが、彼の恋愛のハードルを上げている原因なのだろう。1年以上同じ相手を思い続けているのは一途だと言えなくはないが、自分としてはさつさと諦めて他に行けと思わないわけではない。

少し時間が経ったが未だ梅原は自分の世界に入っており、このままでは黙ったまままでいそうなので話しかけることにした。

「ま、あれだ。数打ちや当たるって言うじゃん？ 恋愛できるかどうかは別にしてさ、とりあえず色んな女の子と話してみれば？」

「ん？ んー……例えば？」

「うちのクラスでも話しやすそうで可愛い子は多いだろ？ 絢辻とか、田中さんとか。あとは、あの……ポニーテールの子……とか」

「北川さんな。いい加減クラスメイトの名前くらい覚えろよ……」

梅原は呆れ顔で苗字を覚えてくれた。

勘違いしないで欲しいのだが、クラスメイトの名前を覚えていないと言われれば多少語弊がある。

北川さんは基本的に「やよいちゃん」と名前で呼ばれており、それはきちんと把握している。ただ、自分はほとんど会話したことがなかったなので、会話の中での言え名前を呼ぶのは何かチャラそうで嫌だったのだ。

「うーん。田中さんはまだしも、絢辻さんはハードル高いな……」

「なんで？」

「なんでって……美人だろ？ それに勉強もスポーツもできるし、いざ楽しくお話ししようとなると尻込んじまうって」

「そうか？」

確かに絢辻のスペックは高い。だが、近づきにくいタイプではないはずだ。一度話をしてみれば、よっぽどなことがない限りは普通に会話できるだろう。

……と、言う意味で疑問を口にしたのだが、梅原には別の意味に聞こえたようだ。ものすごい剣幕で言葉をまくしたててきた。

「なんだ大将?! お前は絢辻さんじゃ物足りないって言うのか!?!」

「ちよ、落ち着けて……」

「いいや! 落ち着いてなんかいらねーな! いいか大将? お前はもうちよつと立場つつーもんを自覚するべきだ」

「わかった! わかったから、な? このパターン前にもやったから……」

いきり立つ梅原をなんとかなだめる。彼は冷静さを取り戻したものの、こちらに対してはまだ納得できていないようだった。

どうやら弁解の言葉を述べる必要があるようだ。

「……絢辻は結構話しやすい奴だって言おうと思ったんだよ。早とちりすんなって」

「そうか? 大将の理想って、実はめっちゃくちゃ高いんじゃないのか?」

「ちげーよ！ わかった。絢辻は完璧美少女だ。お前が話しかけづらいのもしゃーない」

「そうだよな！ やっぱり絢辻さんほどになると、話しかけるのにも躊躇っちゃうよな！」

「私がかしたの？」

「ん？」

「えっ」

突如近くから声をかけられ、自分たちの動きが固まる。

恐る恐る視線を声の発せられた方向に向けると、そこには分厚い洋書を一冊胸元に抱えてこちらを見つめる絢辻の姿があった。

「あ、ああああ絢辻さん!? どうしてここに!?!」

「えーつと、英語の斎藤先生に本を探しておいて欲しいって頼まれて。そしたら、私の名前が聞こえたから……驚かせちゃったかな?」「い、いや! そんなことは無いんだけどさ! そ、それよりもだな……」

面白いほど動揺する梅原。

その姿を見た絢辻は苦笑いを浮かべており、その様子から色々察せられる。

「落ち着け梅原。このパターンだと話は全部聞かれてただろうよ」

「ちよ! なお落ち着けねえじゃねえか! あ、絢辻さん? 本当に今の話聞いてた……?」

「あはは……盗み聞きするつもりは無かったんだけど……」

間接的に肯定の意思表示をする絢辻。

それを察した梅原は、コロコロと顔色を変えながら絶句した。

「ま、全部聞かれてたなら話は早いじゃん」

「……何がだよ」

「完璧美少女絢辻さんに、どうやったら女の子とお近づきになれるか教えて貰おうぜ」

こういう時に急に誤魔化すのは悪手だ。

矛盾するようだが、恥ずかしさというものは恥ずかしいと思うから感じてしまうのだ。要は、開き直って仕舞えばいい。

梅原も納得したのか、気を取り直してすがるような目で絢辻を見つめ始めた。

「ということで絢辻さん。モテない哀れな男子高校生に一言、助言をいただけませんかね？」

「えっ？ ああ……」

「頼む絢辻さん！ あんただけが頼みなんだ！」

「う、うん。それじゃあ……」

突然のことに困惑していた絢辻だが、こちら側のテンションに押し切られたのか了承してくれた。

少しの間アドバイスを考えていた彼女だが、やがて顔を上げると、躊躇いがちに口を開いた。

「えつと……女の子と話す時のアドバイスでいいのよね？」

「ああ！ 頼む！」

「それなら、一つ気にして欲しいとすれば目線かな」

「目線？」

絢辻の言葉に対し、梅原は不思議そうな顔を浮かべる。

「うん。変に意識しなくてきちんと目を合わせてコミュニケーションを取ることが、やっぱり一番大切だと思うな」

「お、おお。なるほど……」

「それと、女の子って視線には敏感だから。そこで変なところを見なければ、逆に誠実さのアピールになるかも」

これでいいのかな、と絢辻は笑みを浮かべながら尋ねてきた。

急に話を振ったのにも関わらずキチンと相談に乗ってくれたあたり、彼女の人の良さが見て取れる。自分だったら適当に済ませていたはずだ。

梅原も感激したようで、勢いよく感謝の言葉を発してきた。

「ありがとう絢辻さん！ 流石、大将と違って頼りになるぜ！」

「はっ」

「ふふっ、お役に立てたなら良かったわ」

そう言うと、絢辻は一言挨拶を残してその場を去って行った。

なんだかんだで上手く場を収められたようだ。いや、そもそもやま

しい話をしていたわけではないので、慌てる必要は無かったのだが。助言自体もとても有用なものであったし、梅原も満足そうな表情を浮かべている。

「すつげえよな、絢辻さんは。誰にでも優しいし、惚れちまいそうだけ……」

「倍率高えぞ」

「だよなあ……ま、とりあえずは教えてもらったことを実践してみるか」

とりとめのない雑談であったが、話のまとめまで到達したと言うことで、その場はお開きという空気が漂い始めた。

思えば結構話し込んでいたのだろう。ここに来てから凡そ1時間は経過していた。

「ん？ もうこんな時間か。どうする大将？ 俺は帰るけど、ゲーゼンでも寄ってくか？」

「あー……今日はいいや。せっかく図書室来てるし、ちよつと本見てから帰るわ」

「そうか？ んじゃ、また明日な！」

「おう」

そう言つて梅原とその場で別れた自分は適当に文庫本の立ち読みをして、30分ほど遅れて学校を出るのであった。

◇◆？◇

「にいにー！ 入るよー！」

夕食後、自室で漫画を読んでいると突如妹に部屋の扉をノックされた。

この時間は妹のお気に入りテレビ番組がやっているはずなので、戸惑つてしまい、返事が遅れてしまった。

家族と話すには少し間が空きすぎてしまったか、美也はこちらが返事を返すよりも先に扉を開いて部屋へと入って来た。

「ん？ なんだ、起きてたなら返事してよー！」

「お、おう。悪りい、ぼーっとしちやつてた」

「まーいいけど。って、にいに？　またそのおかしなビーバーの漫画読んでたの？」

こちらの手に持つ漫画の表紙を眺めた美也は、呆れ顔でそう言ってきた。

自分が今読んでいた漫画は「ビーバー三国志」という少年漫画だ。

内容は三国志の登場人物を皆ビーバーに置き換えて、ストーリーを軽くしてギャグを付け足したといった感じだ。

小学生向けの漫画雑誌で連載されているこの漫画だが、自分が小学生の頃から連載が続いており、月刊誌故の単行本の発刊スピードもあって今でも情性で買い続けている。

正直、年齢が上がるにつれて感性が変わっていき、今ではそこまでギャグでも笑えなくなってしまったのだが、読めばなんとなく懐かしさに浸れて楽しい気持ちになれるため、読み返すことは多い。

「いいじゃん。少年の心を忘れたくないんだよ」

「オヤジ臭いよ、にいに……」

「高2なんてもうジジイみたいなものだつて。ってかそれより、何しに来たんだ？　いつもはテレビ見てんじやん」

そうだった、と目的を思い出した美也は、ベッドに腰掛けると少し間を空けて話しかけて来た。

「にいにってさ、逢ちゃんのこと知ってる？」

「ん？　逢ちゃんって……」

「美也のクラスメイト。ショートカットでクールな感じの子」

自分の知り合いでその条件に当てはまるのは一人しかいない。

知り合ったばかりで名前に慣れていなかったため即答はできなかったが、心当たりがあったのでそれを話すために口を開いた。

「それって、七咲のこと？」

「こそ！　やっぱり知り合いだったんだ」

「ほとんど話したことないけどな。それがどうしたんだ？」

自分が尋ねると、美也は質問の意図を説明してくれた。

入学してすぐは美也と七咲に接点は無かったそうなのだが、今日行

われた席替えによって席が隣になったことで話すようになったそう
だ。

その時に会話の流れで兄弟がいると伝えると、それは兄なのではな
いかと当てられ、そこで少々疑問を抱いたらしい。

「で、にいにはどこで逢ちゃんと知り合ったの？」

「あー、それは……」

どう説明したものでしょうか。別に馬鹿正直に出会いについて話す
ことはないのだろうが、中途半端に嘘をつくと経験上見抜かれてしま
うことがわかっている。

だとしたら変にウソを吐くよりも、幾つか事情を省いて正直に話し
た方がいいだろう。

そう思った自分は顔を上げると、何故かジト目でこちらを見つめる
美也にたじろぎつつも話し始めた。

「あー、女子水泳部の部長と仲良くてさ。そんでちょうど七咲が先輩
と部活の話をしてる場にたまたま通りかかって。んで、挨拶だけ済ま
せてたってわけ」

「……なんでにいにが女子水泳部の先輩と仲良いの？」

「知らね。覚えてねえや」

そういうわけではないのだが、普通は人との出会いを覚えているこ
とは少ないだろう。それが一年以上前のこととなるとなおさら。

妹はこちらの言葉にイマイチ納得していないようだが、ツッコむア
ラは無いので黙っている。

このままじゃ変に空気が悪いままなので、話題を変えるためにも話
しかけることにした。

「ま、俺もそこまで七咲と話ししたことあるわけじゃ無いんだけどさ。
無愛想に見えて結構いい奴じゃない？」

「あ、うん。初めはちよつと怖いかなーって思ってたけど、話してみる
と全然そんなこと無かったよ！」

「そっか。妹の人間関係に口出すつもりは無いけどさ、せっかくだし
仲よくなってみれば？」

「うん……そうだね！ 明日お昼ご飯一緒に食べないか誘ってみる

！」

「おう、がんばれな」

今のやりとりで満足したのか、美也はじゃあねと大きな声で挨拶をする。勢い良く部屋を飛び出して行った。

騒がしい出来事だったが、どうやら妹も学校で上手くやれているよう。うで少し安心できた。どうなるかはわからないが、七咲と友達になるのならそれはそれで喜ばしいことなのだろう。

美也の学生生活について兄として少々感傷に浸っていた自分だが、気を取り直すと再び手に持つ漫画へと意識を戻すのであった。

輝日東高校特有の馬鹿に長い夏休みが明けてから早4日。九月の終わりのある日、自分はいつも通り学校への通学路を歩いていった。

夏休み明けの気持ちというものは不思議なもので、初日は友人に会える喜びから比較的軽い足取りで学校へと向かうことができる。しかし、その足は2日、3日と経つ度に段々と重くなって行く。そして今日は、おそろくピークなのではないかと思うほど憂鬱な気分へと陥っていた。

そんなこんなで湿っぽい気分のまま学校へと向かってダラダラと歩いていたのだが、駅と学校と自分の家を分けるY字路に差し掛かった時、少し先に森島先輩の姿が見えた。

通学時間がズレているため朝に彼女と出会うことは殆どないのだが、普段は塚原先輩と一緒に通学しているということは知っている。しかし、今日はその姿は見えず、森島先輩は一人で歩いていた。

一人でいるのだから当然といえば当然なことなのだが、その姿はいつもの明るく活発な先輩とは異なり、静かで落ち着いた雰囲気醸し出していた。

普段ならそんな先輩に声をかけようとは絶対に思わないだろう。そもそも朝は舌の回りが遅く、人と会話する気分であることは少ない。

しかし、今日は何かが違っていた。

恐らく、自分が思ってる以上に夏休み明けの憂鬱な気分に参加していたのだろう。そんな気分を振り払いたいと思っていたかどうかはわからないが、なんとなく先輩に声をかけようという気持ちに至った。

「おはようございます。お一人なんですか？」

「えっ？」

少し離れたところから挨拶の言葉を口に出しながら先輩の元へと駆け寄る。

突然話しかけられた森島先輩は目を丸くしてこちらを振り向いたが、自分の顔を確認すると落ち着きを取り戻して表情を和らげた。

「……ああ、橘くん。おはよう」

「すいません、驚かせちゃって」

「ううん。気にしないで」

先輩は少しの間歩幅を緩めてくれた。それに合わせて彼女の隣に着いて、一緒に歩き始める。

共に登校することは受け入れて貰えたようなのだが、どうにも調子がおかしい。並んで歩いているものの、彼女は口を開こうとしない。

特に湿っぽい雰囲気というわけではないのだが、いつもの彼女とギャップがあり過ぎて少し心配になる。

「なんかありました?」

「ん? どうして?」

「いえ、なんかいつもと雰囲気が違うんで」

思わず口から出てしまった疑問に対し、先輩は考え込む仕草をする。

少しの間無言が続き、なんとも言えない空気がその場に漂い始めたところで、彼女は顔を上げた。

「夏休み明けて、なんだか憂鬱な気分にならない?」

「ああ……先輩もだったんですね」

大した理由でなくて少しホッとした。

よくよく考えれば先輩は高校三年生だ。彼女にとつての長期休みが明けたことに対する感覚は、自分のものとはまた違ってくるのだろう。受験も卒業も近づいてくることを実感する機会ともなれば、気が滅入ってしまうのにも頷ける。

「きみもなんだ」

「ええ。だから誰かと話をしたい気分になって。たまたま先輩の姿が目に入ったから声をかけたんです」

「なるほどね。珍しくきみの方から話しかけられたから、ビックリしちゃった」

「……珍しく、ですか?」

納得がいったという表情でそう述べた先輩であったが、その言葉に少々ひっかかりを感じてしまう。

彼女とはなんだかんで一年近い付き合いになる。自分たちは学年も性別も違い、所属している団体も特に同じという訳ではないとのことで、接点こそ殆どない。しかし、なんだかんでウマが合ったのだろう。顔を合わせれば会話をする程度には仲が良いと表現してもいいはずだ。

少なくとも自分はそう認識しており、だからこそこちら側から声をかけることも、頻度としてみれば珍しくはないはずだ。

思わず言葉に詰まってしまったのだが、そんなこちらの様子から先輩は疑問の意図を読み取ったのだろう。気を使うように話しかけられた。

「いつもの橘くんは、挨拶のついでに話し掛けるって感じだったから。そっちからお話ししようって言うてくれたのは多分、初めてなんじゃないかな?」

「そんなことは……」

「無いかな? 違ってたらごめん」

彼女の発した言葉の意味がイマイチ伝わらない。顔を合わせたから話し掛けに行くのと、今日の行為とは何か違いがあるのだろうか。それが気になって会話の内容を頭の中で反芻しようとしたのだが、こちらが思考に耽るよりも先に先輩は笑いながら話しかけてきた。

「あはは、そんなに悩まないでよ。変なこと言っでごめんね?」

「いえ。あの……こちらこそ、ごめんなさい」

「ん。じゃあこの話はここで終わり! セツかくなんだし、楽しいお話をしましょう?」

パン、と手を叩いて強引に会話を打ち切る先輩。

納得はできていないのだが、このまま思考に耽って空気を悪くしても申し訳ない。そもそも、話しかけたのはこちらなのだ。会話をほっぽり出してまで自分の中に入ってしまふのは流石に失礼だろう。

「先輩は今日はお一人なんですな」

当たり障りのない話題を投げかけたつもりなのだが、何故か森島先輩は考え込む素振りをする。

何か地雷を踏んでしまったのだろうか。もしかして塚原先輩と喧

嘩でもしたのか。

謎の空白の原因を探して冷や汗を流す自分であったが、顔を上げた先輩はニヤリと口元を緩め、イタズラっぽい笑みを浮かべると話しかけてきた。

「ふくん？ それがきみの全力なのね？」

「え？ あの……」

「がっかりだなあ。もうちよつと面白いお話を期待してたんだけど……」

「ええ……」

面白いお話ってなんなんだ。わけがわからない。

「……そんなこと言うなら、先輩が話題を振ってくださいよ」

「え？ でも、君から話しかけてきたんでしょ？」

「はー！ー！？ そういうこと言っちゃいます？」

「言っちゃう。ほら、早く。渾身のおねがいね？」

ね？、と小さく首を傾けながら催促してくる先輩。

その姿は素面の時ならば萌えると喜べたのだろうが、この状況ではプレッシャーにしかない。

こういう時に考えてしまうと、時間が経てば経つほど不利になるというのは分かっている。しかし、一つ一つ話の内容を考えて会話をするとという経験が殆どないので口が全く動かない。

先輩は相変わらず嫌らしい笑みを浮かべながら、こちらを見つめている。一度誤魔化してしまったので二度目は通じないだろう。

仕方がない。大きく深呼吸をして、覚悟を決める。

「今日も寒いですね！」

「いや、まだ9月なんだけど……」

「先輩って少女漫画とか読みます!?」

「ううん。別に」

「あつ、そういえばこの間聞いた話なんですけど！」

「へ？ あ、そ、そうなんだ……」

「……生まれてきてごめんなさい」

怒涛の3連続で会話が滑った。先輩は目線を下に外して顎に指を

置き、全力でローテンションを表現している。

なんだこれは。女っていうものはいつもそうだ。こちらが会話を広げようと話題振っても乗らず、まるで見世物を見るかのような感覚で面白い話をしろと催促してくる。そもそも、会話というものは互いに言葉を出し合って作り上げるものだろう。コントじゃないんだから掴みから面白い話なんてできるわけないだろうが。

とうとうネタも尽きてしまい俯いて口を閉ざす自分であったが、その姿を一通り眺めた先輩は、突如として表情を変えると笑いながら話しかけてきた。

「あはは！ ごめんごめん。あんまりにも面白い反応するものだから、ついからかいたくなっちゃった」

「もう絶対自分から話しかけねえ……」

「ん〜？ じゃあ、わたしから捕まえに行っちゃおうかなあ？」

クスクスと笑いを零しながらそう言葉を発する先輩。

それによって謎のプレッシャーからは解放されたが、緊張感が解かれると同時にどつと疲れが押し寄せてきた。

「こういうのなんて言うか知ってます？ パワハラ、って言うんですよ」

「なにそれ？ どういう意味？」

不思議そうに首を傾げる先輩。

そういえば、パワーハラスメントは和製英語であったか。よくよく考えればこっちに生まれてから聞いたことのない言葉だし、もしかしたらまだ作られていないのかもしれない。

「……パワーハラスメント、立場を利用した嫌がらせです」

「ええ〜！ ひっどーい！」

「違うんですか？」

「もちろん！ 今のは愛情表現よ」

森島先輩は満面の笑みを浮かべながらそう言ってきた。

男というものは単純なもので、それだけで感じていた苛立ちの大半が吹き飛んでしまう。

それでも簡単に許してしまうのも癪なので、先輩の言葉は無視して

歩幅を広げ、彼女を置いていくように距離を取る。

「あら。拗ねちゃった」

「はあ……」

「ごめんごめん！ 謝るから、ね？」

小走りで近づいてきた先輩は自分の前に回り込むと、あざとい仕草で謝ってくる。

そんな姿から思わず口元が緩んでしまうが、目ざとくその仕草を見て取った先輩は、ニヤリと笑みを浮かべるといじりにかかってきた。

「ふふつ、なにになに？ 今の、橘くんにグツときた？」

「もう絶対許さねえ……」

「そうなの？ 許してくれたらもう一回やってあげてもいいよ？」

「……」

「あつ、待つて待つて！ ごめんってば！」

先輩の問いかけに無言で返し、再び歩みのスピードを上げる。

慌ててそれを追いかけてきた先輩は、今度こそ怒らせてしまったのかと心配そうな表情を浮かべていた。

嫌な気持ちはとつくに無くなっていたのだが、せっかくの機会だ。仕返しをしてやろうと思いついた自分は、そのまま学校へ到着するまでの数分間を先輩からの謝罪の言葉を聞きながら、わざと無反応で過ごすのであった。

◇ ◆ ? ◇

輝日東高校の購買はいつも混雑している。それは売られている商品が人気だからだ。この購買では菓子パンや紙パックのジュースといったごく普通の商品の他に、近所のパン屋によって出来立てのパンが運ばれてくる。そのパンを目当てに昼休み開始直後は生徒が群がるのだ。

そんなわけで購買にパンを買いに行くためには授業が終了してすぐに教室を出る必要がある。しかし、二年生の教室は購買への距離が一番近く、そこまで躍起にならなくても問題なく購入できるのが殆ど

だ。

それ故に、1年生の頃は売り切れを危惧して安全にコンビニを選択することが多かった自分であったが、今年は結構な頻度で購買を利用している。

今日の自分もそのつもりだった。今年に入ってから母親の仕事に余裕ができ、弁当を作ってもらうことも多くなっていたのだが、今日はそれに当てはまらず自炊をする元気もなかったため、昼食は購買を利用する算段を付けていたのだ。

しかし、その計画は変更を余儀なくされた。四限終了直後、教室を出て購買に向かおうとした自分は、担任の高橋先生に声をかけられてしまったからだ。

内容は単純で、授業で使用した教材を職員室に運ぶのを手伝ってもらいたいというものだった。本当なら断ってさっさと食事を買に行きたかったのだが、今年の委員会決めで面倒な役職を避けた結果高橋先生が授業を持つ日本史係に就任していたため、その選択は取れなかった。

そうして渋々職員室まで荷物を運んだ自分は、先生の視界から外れると同時に全速力で購買へと向かったのであった。

購買自体は職員室からそう遠くない位置にあるのだが、やはり出遅れてしまったことにより、そこには行列ができていた。

こうなると自分の分が回ってくるかは怪しい。経験上、購入できるか売り切れるかは半々といったところだろうか。

仮に購入できたとしても、健全な男子高校生である自分にはパン一つでは少々物足りない。少なくとも2つは手に入れたところだ。

ここまできると購買を諦めて食堂へと向かった方が早いのだが、この日は朝からこのパンを食べることを楽しみにしていたため、その選択肢は取れなかった。

そんなこんなで、一人、また一人とパンを手に持ち列を抜ける生徒を眺めながら歩みを進めていた自分であったが、五分ほど経つとどう自分の番が回ってきた。

「えつと……アンパンとカレーパン、1つずつください」

「はいよ。300円ね。っと、両方最後の一個だわ。ラッキーね」

問題なく買うことができたのだが、どうやら今買ったものでラストだったようだ。後ろにはまだ列が続いており少々申し訳ない気持ちになる。しかし、朗らかに笑う購買のおばちゃんがその気持ちを吹き飛ばしてくれた。

素直に幸運を受け入れることにした自分は、指定された金額分小銭を手渡すと2つのパンを受け取って列を外れた。

本当ならそのまま教室へと向かうつもりであったのだが、ふと後ろから聞こえた声になって足を止めた。

「ごめんなさいね。パンは全部売り切れちゃったわ」

「えっと……あの……他のものは……」

振り向いた先では、自分の次に並んでいた少女がおばちゃんから売り切れを告げられていた。

それだけなら特に気に留める条件にはならないのだが、周りにデフォルメされた涙マークが見えるほど彼女は目に見えて落ち込んでいた。

「今日は菓子パンは仕入れてないから、ジュースとデザートしかないわね。どうする?」

「い、いいえ……やめておきます……」

不運なことに今日は市販の菓子パンも切らしていたようだ。恐らく売店で食事を済ませようと考えていたであろう彼女は、それを聞くとなにも買わずにしょんぼりと列から外れていった。

いつもであればそんな事いちいち気にせずにいられるのだが、今日は自分も購入できるかどうかかわからないドキドキ感を味わっていたということもあり、彼女に対して妙な哀れみを感じてしまった。

つまりは気まぐれなのだろう。下を向きながらトボトボと歩き、自教室へと帰ろうとする彼女に声をかけたのは。

「よう後輩。食事はどうすんだ?」

「っ……い……えっ? ……あの……」

突然声をかけられたことに対しビクリと飛び跳ねながらこちらを振り向いた彼女は、目線の先にいるのが年上の男子生徒だと知り困惑

した様子だった。

おそらく人見知りなのだろう。あああうと口を動かしている彼女に対し、その緊張を解くために笑いながら話しかける。

「ごめんごめん。突然話しかけちゃってさ」

「い、いえ……大丈夫です……」

「良かった。それでなんだけどき、君に1つお願いがあるんだ」

「お願い……ですか？」

未だ怯えた様子を見せる彼女であったが、少しだけ警戒心を解いてくれたのだろう。戸惑いながらも取り合ってくれた。

「そう。もし良かったらでいいんだけど、アンパンかカレーパンのどっちかを買って貰えないかな？」

「えっ!? それって……」

「俺さ、パンを2つ買うか、パンとジュースを買うかで悩んでて。んで最後の一個ってことでなんとなく買っちゃったんだけどさ、今後悔してたんだよね」

言い淀む彼女が何か言葉を発するよりも先に、こちらが話を続ける。

「君、俺の後ろに並んでたでしょ？ それで、もしかしたらって思ったんだけど……ダメかな？」

「い、いえ……あの……いいんですか？」

躊躇いがちにそう言葉を発してきた後輩。

どうやらこちらの提案には乗ってくれるようだ。

「あはは、こっちがお願いしてるんだって。で、アンパンとカレーパンどっちが良い？」

「えっと……それじゃあ……アンパンを……」

「ん。100円ね」

そう言つてアンパンを彼女に手渡すと、おずおずと差し出されてきた100円玉を受け取る。

彼女はまだこの状況に困惑しているようで、このままこの場に残ってもストレスをかけさせてしまうだけだろう。ここまでの流れで少々時間を食ってしまったこともあり、さっさと教室へと戻ることに

した。

「ありがとう！ 助かったよ！」

「こ、こちらこそ……あの……ありがとうございます……」

「ん。じゃーねー」

挨拶を済ませたことで会話が終わり、そのまま後ろを振り向いて立ち去ろうとしたのだが、なぜだか彼女に大きな声で呼び止められた。

「あつ、あのー！」

「ん？」

再び彼女の顔を見ると、ウルウルと目を潤ませながらこちらを見つめている。その様子はまるで捨てられた仔犬のようだった。

そのまま少し時間が経ったのだが、彼女は覚悟を決めたのかおらずと言葉を発してきた。

「あの……お名前、教えていただけませんか？」

「あ、ああ。いいよ。橘純一、2年生ね」

「橘先輩……えつと……本当にありがとうございます……」

「ん。気にしないで」

礼を聞き届けると、それで満足したのだろう。彼女はふうと大きく息を吐いた。

その様子は一々大げさでつい笑いそうになるが、怯えさせても面倒なのでなんとか口を紡ぐ。

その後、再び一言挨拶を残した自分は、駆け足で自教室へと戻るのであった。

◇ ◆ ? ◇

帰りのホームルームが終了してから30分は経っただろうか。掃除当番だった自分は簡単に掃き掃除を終わらせた後、なんとなく誰もいなくなった教室で読書をしていた。

そんな中、突然教室の扉が勢いよく開かれたかと思うと、聞き覚えのある声がそこから聞こえてきた。

「おっ！ いたいた！ おーい、おにいちゃん！」

本から顔をあげて視線をそちらに向けると、そこには案の定妹の姿があった。彼女は教室の入り口からこちらに手を振っている。

そのまま廊下へと出て行っても良かったのだが、今は教室に自分以外の生徒がいない。下級生の一人くらい入ってきてても何の問題もないだろう。

「おう！ 今誰もいないから入ってきてもいいぞ！」

「ほんとう？ だつてさ、行く、紗江ちゃん。逢ちゃん」

「ん？」

てつきり妹一人がやって来たのかと思っていた自分は、その言葉を聞いて動きを止める

そんなことは御構い無しに妹が教室に入ってくると同時に、二人の女子生徒がそれに続いて姿を現した。

「失礼します」

「あ、あの……お邪魔します……」

そこにいたのは七咲と、昼休みに出会った女の子。

意味がわからず困惑する自分であったが、そうしてやって来た3人はそれを気にせず自分の席に近づいてくる。

やがて自分の目の前まで到達すると、未だ言葉を発せていない自分を尻目に、美也が口を開いた。

「お兄ちゃんなんでしょ？ 昼休みに紗江ちゃんにパンをあげたのって」

その言葉によって、なんとなく彼女たちの行動の意図が掴めた。

数日前に妹がクラスに転校生がやって来たという話をしてきたのだが、おそらく、その転校生というのが昼休みに会った女子生徒のことだったのだろう。自分は名前を名乗ったこともあり、そこから美也と兄妹だという可能性を感じた彼女は、教室へ戻ると確認を取ったのだ。そこから妹の訳のわからない行動原理が働いて、今自分のクラスへとやって来たというわけだ。

事情を悟ったことにより混乱から覚めた自分は、妹に返答するためにあわてて口を開いた。

「お、おう。まあ、金取ったけどな」

それに対し満足げに頷く美也。

しかし、なぜ彼女たちがわざわざ自分を訪ねて来たのかがわからな
い。昼間はきちんと礼を貰っているし、言い残したこともないはず
だ。

そう疑問を感じていると、美也と七咲に押された女の子がゆっくり
と口を開いた。

「あの……わたし、中多紗江つていいいます。昼間はありがとうございます
ました……」

「あー……うん。奢ったわけでもないし、そこまで気にしないでくれ
ていいよ」

「は、はい。あと……すみません、昼に名乗りそびれちゃって……」

おずおずとそう答える中多さん。

なるほど。どうやら彼女は昼間に自分だけ名前を聞いたことを気
にしてやって来たらしい。そんなこと気にかける必要もないのだが。
律儀なものだ。

彼女の言葉から自分を訪ねてきた理由がわかり、少しスッキリとし
た。しかし会話はそこで途切れてしまい、他に彼女たちの目的にも心
当たりがなかったの、仕方なくそれを尋ねるために美也に問いかけ
る。

「……で、他には？」

「ないよ。暇だったから紗江ちゃんに学校を案内するついでに寄った
だけ」

「マジかよ」

「うん。まあ、お兄ちゃんに会えて良かったよ。じゃあね！」

それだけ言うと、妹はさっさと立ち去って行った。

中多さんはペコリと頭を下げ、七咲は失礼しますと一言だけ残し、
続いて教室を去っていく。

そして、教室は再び自分以外の人がいなくなった。

今のは一体なんだったのだろうか。いや、中多さんが名前を名乗り
にきたと言うのはわかるのだが、あまりにも突然すぎて頭の整理が追

いつかない。七咲とか久しぶりに会ったのに、失礼しますとしか喋らなかつたんだが。

「……は？」

思わず単調な疑問を表す言葉を口から漏らしてしまったが、きっと誰にも咎められることはないだろう。

嵐のようにやってきた妹の行動により困惑した自分は、その場を動けずにしばらくの間呆気を取られたままにいるのであった。

放課後の教室。時計の針はとうに5時を過ぎ、夕焼けが部屋全体を包みこんでいる。恐らくこのフロアにはもう他に人はいないのだろう。聞こえてくる音は校庭で練習している運動部の掛け声と、自分の呼吸音のみ。それらもただ孤独感を引き立てるだけの材料と化している。

そんな教室で自分はただ一人、机に肘をつきながらぼーっと窓の外を眺めていた。

特に教室に残る用事があつたわけではないのだが、今日はたまたま他のクラスメイトが早い時間に出て行ったのでただなんとなく誰もいない教室という不思議な空間を味わいたいと思い、かれこれ一時間以上自分の席から動かずにいた。

窓の外を眺めていると言っても目に入るのは校舎の周りに植えられている木のみで、そこには何の面白みもない。なので、視線こそそちらに向けてはいるものの頭の中では他のことを考えていた。ただまあ、大したことを考えているわけでもないのだが。言ってしまうればそれは、眠りにつく前に布団の中でする妄想の亜種のようなものだ。

高校を卒業した後はどうしようか。進学するのには躊躇いはないのだが、行動の自由度が増せば他にもやれることはあるだろう。

シナリオライターにでもなってみようか。前世に存在してこちらの世界にはない創作物の知識を活用すれば、きっとそれなりのものを書くことができるだろう。

作曲家にでもなってみようか。自分は少し先の未来で生み出される曲を知っている。それを先に作ってしまうのだ。きっとそれなりのものが出来るだろう。

そうやって、楽しんで成り上がってもはやされて、金を貯めて気ままに生きる。そういう人生を選択することもできるのだろうか。

「ふう……」

なんて。

そんな気は今の所ないのだが。あくまで妄想の範疇だ。

自分は所詮一般ピープル。何もかもが人並みから大きくはズレない程度の人間なのだ。そんな自分がそういう『せこい』方法で成功したところで、罪悪感と劣等感に押しつぶされる未来が目に見えていいる。というか、創作物において才能のない人間が本格的にその手の道に入ってしまったら、必ずどこかでボロが出てしまうだろう。

まあ、就職に失敗したり何かの間違いで莫大な借金を背負ったり、なりふり構っていられない状況になったらその選択も取るかもしれないが。今の所はその気はない。

さて、何故自分がそんなくだらない妄想に勤しんでいたかということ、その原因はホームルームに配られた一枚のプリントにある。

進路希望調査。高校2年ももう半年を切っているということ、担任の高橋先生から配られたのだ。

この時期の進路希望調査など、別に詳しいことを聞かれるわけではない。進学かそうでないかを書けば問題なく受け取って貰えるだろう。さらには提出期限までまだ2週間以上もある。全くもって頭を悩ませてまで向き合うような案件ではない。

それでも、一時間もそれについての妄想に浸っていたというのには、何か理由があるのだろう。それについては何となく予想はついている。

恐らく、自分は不安なのだろう。前世の自分は高校生で死に、そこから先は経験していない。受験も、大学生活も、就職も、その他色々も。今まで多かれ少なかれ前世の経験に頼っていた分、それらが通用しないことに気掛かりがあったとしてもおかしくはない。

まあ、べつに真剣に悩んでいるわけでもないのだが。不安で心臓が押しつぶされそうだとか、他のことに手をつけられないなんてことはない。あくまで、妄想のネタになる程度の些細な事象なのだ。

そんなこんなで無意味な考えごとにより、ただひたすら時間を浪費していたのだが、ふと廊下の方から足音が聞こえた。それはだんだんこちらへと近づいてくる。

そして、その音はどうとう自分のいる教室の前で止まった。
ガラリと教室の引き戸が開かれる音がすると、やって来た誰かさんは驚いたように声を発した。

「あつ」

声の発せられた方向に目を向けると、通学カバンを片手に持った絢辻が目を丸くしてこちらを見つめていた。恐らく彼女は教室に生徒がいるとは思っていなかったのだろう。

互いの視線がぶつかり合う。すると、彼女はすぐに我に返って言葉を発してきた。

「橘くん。まだ残ってたのね」

「まあね。何となく動く気しなくてさ」

「そうなんだ。でも、もう下校時刻よ」

呆れたような笑みを浮かべながらそう話す絢辻。

輝日東高校では部活動や委員会のない生徒は、一応5時過ぎには教室を出ることになっている。しかしそれは建前のようなもので、実際に追い出される時間は教師の気まぐれによって変わってくる。

それでも彼女の言葉はもっともだ。意味もなく下校時刻まで教室に残る生徒なんて変わり者と思われても仕方がない。

少々ばつが悪くなり、話題を変えるためにも彼女に話し掛ける。

「絢辻はどうして教室に？」

「さっきまで学級委員の集まりがあつて。そこで頼まれた仕事を終わらせてから帰ろうと思ったの」

そう言うと彼女はカバンから分厚いプリントの束を取り出した。

その紙には見覚えがある。確か昨日回収されたアンケートだ。

「あー、あれか。学校生活についてのやつ」

「そうなの。自分のクラスの分の集計を出しといて欲しいって」

「そういう仕事は生徒会のものだと思っていたのだが。どうやら、学級委員とは自分が考えていた以上に大変な仕事らしい。」

「さて、どうしたものだろうか。自分としてはもう少し教室で過ごしていた気分ではある。しかし、このまま何もせず彼女の仕事をしているというわけにもいかないだろう。」

「手伝おうか?」

「別にいいわよ。大した量じゃないし」

「だからだよ。それに、もう少し教室に居たいからさ」

「そう?。じゃあ、お願いしようかな」

絢辻はそう言って微笑むと、自分の前の席の向きを変えて、向かい合うように座った。

30枚と少しのプリントを目分量で半分に分け、手渡される。そこに記されている項目につけられたチェックを数えて、メモ用紙に正の字を刻んでいく。項目の数は15個、それに対して選択肢が5つなので、やはりそこまで時間のかかるような作業ではなさそうだ。

そうして作業に取り掛かって少ししたところで、絢辻に話しかけられた。

「橘くんは何してたの?」

「ちよつとね。考えごとかな」

「へえ。どんな?」

なんて答えるべきだろうか。彼女の問いかけに対し思わずペンを止めてしまう。

その仕草を見て取った絢辻は、慌てて言葉を発してきた。

「あつ、言いにくいことだったら別にいいのよ?」

「あー、いや。そういうわけじゃないんだけど……」

「けど?」

「まあ……進路について、かな?」

何を考えていたかと聞かれれば、そう答えるしかない。

変に悩んでいると思われたくなかったため、答える言葉を探して一瞬口を噤んでしまったが、彼女に気を使わせるくらいなら正直に答えの方がいいだろう。

「ああ。進路希望調査ね」

「うーん。と言うよりかは、そこから色々考え込んでやって」

「なるほど。高校生も、もう半分だものね」

納得といった表情を浮かべる絢辻。

彼女の言葉であらためて入学してからの時間の経過と、高校生の終わりが着実に近づいているという事実を実感する。それは夕暮れ時の教室という状況も相重なり、妙に自分を感傷的にさせた。

何となく会話をするような気分ではなくなり、黙々と作業を進める。

しばらくはそうして静寂が続いていたのだが、不意に絢辻が口を開いた。

「橘くんって、変わったわよね」

「ん?」

ペンを止めて顔を上げ、絢辻の方に視線を向ける。

彼女もそれに気がついたのか、作業を中断して目線を合わせてきた。

「いい意味でね? 一年前とは雰囲気が違うなって」

「そうかな？ 自分じゃあんまりわからないんだけど……」
「うん。なんというか、明るくなった気がする」

明るくなった……のだろうか。あまり実感が無い。

というか、確かに自分は常に明るい人間ではなかったが、だからと言って日々負のオーラを発するようなタイプでもなかったはずだ。

「去年の俺って、そんなに暗かった？」

「そういうわけじゃないんだけど……」

自分の問いかけに絢辻は言葉を濁す。

その様子は言葉を選んでいるという風ではなく、考えをうまく表現できないもどかしさに見えた。

まあ、自分ではわからない変化というものもあるのだろう。内面的な変化であればなおさら。絢辻は聡明な人だ。意味もなくそんなことを口に出すなんてありえない。

「ま、友達が増えたからかな」

具体的な変化の内容はわからないが、明るくなった理由を考えればそれしか思い当たらない。思い返せば、一年前と比べると日常的に会話をする知り合いは随分と増えた気がする。

絢辻も納得いったのだろう。曇っていた表現を明るくして話しかけてきた。

「そう！ 橘くん、去年は友達少なかったでしょ？」

「はつきり言うね……」

「ふふっ、だって私、高橋先生に相談されたのよ？」

「それは……ご心配をおかけして、ごめんなさい」

「ほんとよ。あの時は参っちゃったんだから」

クスクスと笑いながら絢辻はそう言った。

そういえば一年生のこの時期、彼女に友人関係のことでかなり気を使われた記憶がある。思い返すと、なんだか申し訳なくなってきた。

その後、取り留めもない雑談をしながら作業を進め、10分もすると集計を終わらすことができた。

自分のメモを彼女に手渡し、一つにまとめてもらう。

「つと、おしまい。橘くん、手伝ってくれてありがとう」

「ううん。気にしないで」

そう言葉を交わすと互いに荷物をまとめにかかる。

筆記用具を片付けカバンの中にししまう。念のために机の中を見渡し、忘れ物のチェックを済ませて立ち上がる。

「橘くんも帰るのね?」

「うん。腹も減ってきたことだしさ」

「ふふっ、そっか」

荷物を抱えて廊下へと出る。

相変わらず周りは静まり返っており、自分たち以外の人の気配はない。

絢辻は先生から預かっていたのであろう教室の鍵を取り出して閉めると、あらためてこちらを向いて話しかけてきた。

「それじゃ、橘くん。私、職員室に寄ってから帰るから」

「あー、うん。お疲れ様」

「橘くんも。また明日ね」

そう言うと彼女はこちらに背中を向けて歩き始めた。

彼女に対して用事はない。挨拶も済ませた。だとしたら、職員室へ

と向かう彼女の背中を見送ればいい。

しかし、なぜだか口が動いてしまった。

「あのさ、絢辻」

「えっ?」

彼女は足を止めて振り返る。その顔には不思議そうな表情を浮かべていた。

なぜ彼女を呼び止めてしまったのだろうか。

廊下を夕焼けが照らしている。周りには誰もいない。そういった空間と、絢辻と交わした会話の内容、それから妙に感傷的な気分が自分の中でドロドロに溶けあい、そういった行動へと至らせた。

「どうしたの?」

口を紡ぐ自分に対し彼女は困惑しているようだ。すぐに立ち去る様子はないが、ずっとこのままでいるわけにはいかない。

一つだけ、自分の起こした行動の理由に心当たりがある。

わざわざ口に出すべきかどうかはわからないのだが、ここまでやってしまったのだ。覚悟を決めて言葉を絞り出す。

「あのさ、絢辻。その……ありがとね」

自分の言葉に対し彼女は目を丸くした。

「いきなりどうしたの?」

「いや、大したことじゃないんだけど。なんて言うか……」

「なあに?」

口ごもる自分をからかうように絢辻は合いの手を入れる。

「ここまで言ってしまったのだ。あとはもう、どうにでもなればいい

い。

「……友達もできてさ、結構、毎日楽しいんだ。そのお礼をね」

言った。言ってしまった。自分でも頬が熱くなるのを感じる。

ぶつかっていた目線を思わず外してしまった。それ故に、今彼女がどのような表情をしているかがわからない。

静寂がその場を支配する。なんとも言えない空気が漂い始め、居たたまれなくなる。

いっそのこと挨拶を投げてその場を立ち去ってしまおうかと考え始めた時、不意に絢辻は口を開いた。

「ふふっ」

「えっ？」

「あはははー」

聞こえてきた笑い声に驚き視線を彼女に戻す。すると、そこには口元を押さえながら肩をヒクつかせて笑う絢辻の姿があった。

困惑と羞恥が自分を襲い、口から言葉が出てこない。

そのまま少しの間笑い続ける絢辻であったが、やつとの事で調子を取り戻すと呼吸を整えてから話しかけてきた。

「ふう……ごめんなさい。からかうつもりは無いのよ？」

「もう、なんでもいいよ……」

柄にも無いことをし過ぎた。と言うか、いきなりこんなことを言われれば、混乱してしまうのも仕方ないことなのだろう。自分が逆の立場だったら引いていたかもしれない。なぜ自分はあるなことを口に出してしまったのだろうか。思わず俯いて、自己嫌悪に陥ってしまった。

そのまま数秒の間無言が続いた。しかし、ふと彼女の方から声が聞

こえてきた。

「私も良かったわ。橘くんと友達になれて」

聞こえてきた言葉に驚き、顔を上げる。

「じゃあね橘くん。また明日」

それと同時に彼女は挨拶の言葉を残すと、こちらに背を向けて歩き始めた。

自分は無言でその背中を眺め続ける。彼女はこちらを振り返ることなく歩き続け、やがてその姿は階段へと消えていった。

それでも自分はまだ動けない。顔を上げた時に一瞬だけ見えた彼女の顔。そこに浮かべていた満面の笑みが頭に焼き付いて離れない。大きく深呼吸をする。思考をクリアにし、羞恥心を頭の中から追い出す。

この一年は本当に楽しかった。それが今までと違うものになった理由というか、きっかけは彼女に有ったのだろう。具体的に言葉で表すことはできないが、そうだと思っている。自分の内面の変化についてのことだ。そう思っているのなら事実なのだろう。

頬の熱は引いてきた。羞恥心も薄れて、代わりに充足感を感じ始めた。

咄嗟に出してしまった言葉ではあったが、結果としてはあれで良かったのだろう。多少の気恥ずかしさは感じるが、彼女に自分の思いを伝えることはできた。

それに、何よりも嬉しかったのは……

「友達か……」

自分を友達だと認めてくれた。

きつとそれは些細なことなのだろう。彼女にとっても、自分にとつ

ても。それでも、互いに関係を認め合えて嬉しかった。
思わず頬が緩みそうになる。溢れた笑いは喜びからか、呆れからか、照れからか。どれかと聞かれれば判断がつかない。
きつと、それら全部なのだろう。

◇◆?◇

自分、橘純一には前世の記憶というものがある。
それもかなり特殊なものだ。具体的にいうと、自分の前世の記憶というのは平行世界のものなのだ。

平成生まれで高校生の頃に事故で死んだ自分だが、気がついてみると昭和の時代に新たに生を受けていた。そんなこの世界では、物の名前が前世の記憶にあるものと大きく異なっていたのだ。

仮面ライダーがイナゴマスクへと。ガンダムがガソガルへと。

コンビニが。雑誌が。ファミレスが。ゲームが。漫画が。別の名前へと変化していた。

しかし、何もかもが変わっていたというわけではない。太陽は東から昇って西に沈むし、その他の価値観や事象、歴史や世界の真理は、恐らく何も変化していないのだろう。

仮に何かが変化していたとしても、自分にとっては関係のないことだ。自分の家庭環境は恵まれているし、何か危険なものに巻き込まれるというわけでもない。家族がいて、友達がいて、他に普通に生活できるような環境が整っている。それだけは変わらない事実だ。

だから自分はこれからも何も変わらずに生きていく。

例えばそれが、どっかの誰かのゲームの世界でも。

絢辻さんと

1話

「頼む大将！ 今日の掃除当番代わってくれねえか！」

パンと両手を合わせ頭を下げる梅原。

今は四限終了後の昼休みで、自分はいつも通り彼と二人で食事を取っていた。そんな中、なぜだかそわそわと落ち着きのない彼に何かあったのかと尋ねたところ、真剣な表情で今のようによく願われるに至った。

「ん？ ん〜……その心は？」

もしやりと焼きそばパンに齧り付きながらそう尋ねる。

今食べているパンは購入で購入した戦利品だ。柔らかいパンに少し濃いめの味付けの焼きそばがしっかりと絡んで味を引き立てている。別に飛び抜けて美味しいというわけでもないのだが、手軽に取れる昼食でなおかつ腹持ちが良いということでお気に入り一品だ。

「実はだな……」

「おう」

自分の質問に対してなぜか梅原は口ごもる。

別に急いでいるわけでもないのに急かしはしない。パンを咀嚼しながら無表情で彼が口を開くのを待つ。

少々間が空いた。彼は顔を上げると、意を決したように言葉を発してきた。

「あー……その、実は今日、引退した3年生たちが部活の様子を見に来るらしいんだ」

「それで部活に出たいと？」

「まあ……そういうことだな」

今の発言から自分に頼みごとをした彼の真意は理解できた。

しかし、口の中のパンを咀嚼しきれていないためすぐには口を開かない。そんな自分の姿を、梅原は顔色を伺うように見つめている。

少しして咀嚼物を飲み込み、パックのココアを啜って一息ついた自分はやつくりと口を開いた。

「お前さあ、まだ諦めてなかったのかよ」

「うっぐ……」

梅原の意中の人である剣道部の先輩は、7月の大会を終えて部を引退していた。彼は告白こそできていなかったが引退当日の部活で彼女と色々話をしたらしく、そこでどうやら脈はないということを知ったらしい。そういうことで夏休み直前はひどく落ち込んでいた梅原であったが、なんだかんだで立ち直り、先輩のことについても割り切ったと聞かされていた。

だからこそ、未練がましい彼の言葉に冷ややかな視線を投げかけてしまう。

「いや、違うんだ橘！　そういうのじゃねえんだよ！」

「きめえから落ち着けや」

「お前俺の扱いひどくねえか!？」

身を乗り出して顔を近づけてくる方が悪い。それ以外にも男が叶わない恋愛についてうじうじ悩んでいるという姿も。

一年生の頃からずっと先輩についての愚痴を聞かされ続け、最近になつてやつと踏ん切りがついたと安心していただけだ。扱いが悪くなつても責められはしないだろう。

ただまあ、思った以上に効いてしまったのか梅原は目に見えて落ち込んでいる。このままじゃ話も進まなさそうなので、会話の続きを催促する。

「んで、何が違うわけ？」

「いやよ、引きずつてるとかじゃねえんだ……」

「じゃあ何なんだよ」

「その……先輩ももうすぐ受験だしよお、もしかしたらここで会える

のが最後になるかもしれないねえと思うと、どうにも落ち着かねえんだ……」

それは引きずってるのと何が違うのだろうか。

そもそも同じ学校なのだから恋愛感情を割り切ったなら、いくらでも挨拶をしに行く機会は自分で作れるだろう。それなのに受動的な態度で機会を伺うのは如何なものかと思わなくはない。そもそも、彼が先輩と一向に距離を近づけられずにいたのは、そういったところが原因だったはずだ。

「幽霊決め込んで相変わらずど下手くそなお前が部活に出たところで、カッコ悪いところを見せるだけなんじゃね？」

「だから違えんだって……俺はただ、先輩の姿を一目見たいだけなんだよ……」

「乙女かよ。気持ち悪い」

自分の言葉で梅原はさらに落ち込む。その様子は、このまま机にめり込んでしまうのではないかと思わせるほどだ。

大きいため息を吐く。

彼の煮え切らない態度に思うところがないわけではないのだが、仕方がない。しばらくの間幽霊部員でおそらく他の部員からも歓迎はされないであろう状況にもかかわらず、そういった決心をした彼の意を今回だけは汲んでやろう。

「しゃーねーな。行ってこいよ、部活」

「た、橘……」

「代わるだけだからな。次の俺の当番の時はお前がやれよ」

「あ、ああ！ もちろんだ！ ありがとうよ大将！」

伏せていた顔を上げ、表情を明るくして梅原は返答した。

相変わらずのオーバリアクションだ。その様子が面白くて、思わず口元が上がってしまう。彼は意図してそういう動作をしているわけではないのだろう。どうやら、本当に先輩に会えるのが嬉しいらしい。

数少ない付き合いの長い友人の頼みだ。これだけ喜んでくれたのなら、深いことを考えるのをやめて承諾してやって良かったと思う。

そうして自分は、気を取り直した梅原と二人で食事を再開するのであった。

◆◆？◆

帰りのホームルーム終了から30分後。教室から人が居なくなるまで適当に時間を潰していた自分は、頃合いを見計らってクラスへと戻り掃き掃除を開始した。

恐らく、高校生のクラスでの掃除当番といえば2パターンあるだろう。一つはクラスをいくつかの班に分けてのローテーション。もう一つは個人でのローテーションだ。輝日東高校では後者を採用しており、だいたい一月半に一回程度の割合で当番が回ってくる。

当番の仕事は簡単で、掃き掃除でゴミを集めるだけだ。机を動かすかどうかなどは生徒個人の自由であり、キッチンと掃除を終わらせられれば何も文句は言われない。その代わり次の日の朝に行われる担任のチェックに引っかけるとそれなりのペナルティーを与えられるため、あまり適当なことはできないのだが。

左の列から順番に、掃く箇所を軽くどかしてゴミを集めていく。30人以上の生徒が在籍しているクラスだ。掃き掃除のみだとはいえ、それなりに手間のかかる作業になる。

だが、そういった単調な作業でも苦ではない。自分は誰もいない教室という非日常的な空間が好きなのだ。しかし、何もしないで教室にいただけでは飽きてしまうため、こうやって何か作業をすることがあれば都合がいい。疲れない程度に頭と体を動かしながら放課後の教室で時間を過ごせるといっているのであれば、嫌だと感じることもない。

まあ、だからと言って掃除が好きだというわけでもないのだが。あくまで嫌いじゃないというだけだ。

そうやって特に何も考えることもなく無心で箒を振っていたのだ

が、突然廊下から声をかけられた。

「あれ？ 橘くん？」

教室の扉は開けっぱなしだったため、向こうは外からでも自分の存在に気づいたのだろう。一方、自分はそれなりに掃除に熱中していたようで、彼女が近づいてくる足音には気がつかなかった。

彼女は手に何もものを持っていない。わざわざこの時間に教室を訪れた理由を推測するとすれば、図書室で勉強をしていて、その過程で必要になった教科書を取りに来たといったところか。

こちらの顔を確認した絢辻は、言葉を発しながら近づいて来た。

「今日って、橘くんが掃除当番だったっけ」

「ううん。梅原と代わったんだ」

「梅原くん？ どうして？」

絢辻は不可解な面持ちでこちらに疑問を投げかける。

そんな彼女に、自分はざっとこれまでの経緯を説明した。梅原が剣道部の先輩に憧れていたこと。彼女が久しぶりに今日の部活に顔を見せるということ。三年生は卒業も近く会えるチャンスが限られているということ。

もちろん、具体的な人名については濁したが。

「そっか……」

事情は一通り話終えたのだが、なぜか絢辻の曇った表情は晴れない。どうやら何か考え事をしているようだ。気まずい空気が流れ始め、少々その場に居たたまれなくなる。彼女は思考に耽っているようなので声をかけるわけにもいかない。

何か変なことを言ってしまっただろうか。彼女の発する妙にシリアスなオーラからつい不安になってしまう。だが、そんなことはないはずだ。自分はただ、なぜ梅原が掃除を頼んできたかの経緯を説明しただけだ。

少しして顔を上げた絢辻は、なぜか呆れたような表情を浮かべながら話しかけてきた。

「橘くんって変わってるわよね」

「ん？」

彼女の発した言葉の意味が理解できず困惑する。今の会話の内容から、どうしてそのような評価を下されたのだろうか。全く見当がつかない。

疑問を表情に出す自分であったが、絢辻は構わず話を続ける。

「あなたって、思ったことは口に出すタイプでしょ？」

「……まあ、相手は選ぶけど」

「それに面倒ごと嫌うタイプ。なのに、掃除を頼んできた梅原くんには文句も言わず引き受けるだなんて、なんだかおかしくない？」

どうにも腑に落ちない。そりゃ彼女の話を書き出して第三者に見せつければ矛盾していると答えるしかないのだろう。しかし、事情がある友達からの頼まれごとを引き受けたことに対して、そこまですべて考える必要があるのだろうか。

「んー、そこまで深く考えてなかったわ」

「あはは……橘くんって、結構お人好し？」

「さあ？ 違うと思うけど」

そう答えたところで絢辻の顔色を伺う。どうやら納得できていないようだ。

一体何がそんなに彼女を悩ませてしまったのだろうか。自分が掃除を引き受けたこと？ しかし、日常的に頼まれごとを引き受けている絢辻がそんなことに一々疑問を持つとは思えない。それとも彼女の発言通り、自分が梅原に文句を言わなかったことが解せないのだろうか。だとしたらショックだ。そこまで器の小さい人間だと思われるいたとは。

絢辻は相変わらず黙ったままだ。彼女の真意はわからないのだが、仕方がないので当てをつけ、彼女を満足させるための言葉を探して口を開く。

「まあ、梅原は友達だから。友達相手にそこまで利害とか考えたりしなくない？」

「……そうなのかな？」

「いや、わかんないけど。少なくとも俺はそう思ってるかな」

もちろん程度にもよるが。しかし掃除当番を代わる程度のことな

らば、キチンと事情を話してもらえれば問題なく引き受けるだろう。それをお人好しというのかどうかはわからない。だが、仮に関わりのない人物から同じことを頼まれたとすれば、恐らく断るはずだ。

相変わらず空気は冷めている。絢辻は口を開く様子はなく、自分は気を紛らわすために無言で箸を振る。

自分はまだあまりこういう状況で気を使うような人間ではないのだが、流石に気まずさを感じ始めてきた。場の雰囲気的に世間話を振るわけにもいけないので、無理やり口を開いて言葉を発する。

「あー……それにしてもさ、絢辻って頭がいいんだね」「えっ?」

「違和感を感じるってことは、それだけ普段から色々考えてるってことでしょ? さっきも言ったけど、俺はそこまで頭使って行動してないからさ」

少しでも場の空気を明るくしようと思つての発言だ。明るい表情で彼女を褒めたつもりだった。しかし、絢辻はさらに物思いに沈んでしまった。

さらに沈黙が続く。何か地雷を踏んでしまったか。不安になって直前の会話を頭の中で反芻する。

もしかして嫌味っぽく聞こえてしまったのだろうか。タイミング的にありえない話ではない。だとしたら急いで訂正しなければ。

「えっと……あの、皮肉じゃないからね? 俺は純粋にそう感じただけだから」

これ以上の失言は致命的だ。慎重に言葉を選んで話しかける。

それに対して顔を上げた絢辻は少しばかり口ごもったが、すぐに表情を明るくして返答してきた。

「あはは、わかっているわよ。ごめんね? 空気を悪くして」

その雰囲気はいつもの彼女のものだった。

重くなった場の空気が消え去り、ほっと胸をなでおろす。もしかしたら彼女の中にはまだ疑問が残っているのかもしれないが、とりあえずこちらに悪意が無かったことは伝わったようだ。

ただ、それでもこの流れで楽しくおしゃべりすることはできないは

ずだ。自分も彼女も互いに気を使ってしまっただろうし、今日はもうここで別れるのが無難だろう。だが、自分はこのまま掃除を続ける必要があるため去るわけにはいかない。

そう思った自分は、絢辻に教室へやってきた目的を尋ねようとした。しかし、こちらが口を開くよりも先に彼女の方が言葉を発してき

た。

「ねえ、橘くん。掃除、手伝おうか？」

予想外の言葉に思わずしどろもどろになってしまっただろう。今の会話の流れでどうしてこちらを手伝うという考えに至ったのだろうか。それが気になって、感謝の言葉も断りの言葉も出てこない。

そんな様子を眺めた絢辻は、クスクスと笑いながら話しかけてきた。

「なあにその顔？ 私、そんなに変なこと言った？」

「その……まあ、今の話の流れ的には……」

「ふふっ、だったら何もおかしくないじゃない」

困惑する自分に対し、絢辻は微笑みながら言葉を発する。

「友達に手を貸すのに、理由を考える必要はないんでしょ？」

「うっ……」

それは自分の発言を指しての言葉だったのだろう。反論しようにも上手い言葉が出てこない。

そんな自分を尻目に絢辻は掃除用具入れへと向かうと、箒を取り出してからこちらを振り向いた。

「それじゃ、橘くん。さっさと終わらせてしましましょうよ」

「いや……あの……」

「ほら、ぼーっとしない！ そっちは終わってるのね？ なら、私は右から掃いていくから」

絢辻はすぐに手を動かし始めた。そのまま動かずにいるわけにもいかないのです、仕方なくこちらにも掃除に取り掛かる。

ここまでの彼女の言動の真意は未だ呑み込めていない。しかし、どうやらこの場では考える時間は与えられないようだ。なんだか今日は絢辻に振り回されっぱなしだ。

それから自分は、妙にテンションが高くなった絢辻とともに掃除を終わらせにかかるのであった。

2話

『来週も見てくれよな!』

「ふう……今週のイナゴマスクも痺れたぜ……」

日曜日の朝、自分はこたつに入り寝そべりながらテレビを眺めていた。

見ていたのは「イナゴマスク」という男児向けの特撮番組だ。内容は単純で、正義のヒーローイナゴマスクと悪の組織との戦いを描いたストーリーだ。この番組は自分が幼い頃から代替わりで放送され、今代は今年の1月から開始している。放送期間は約一年なので、11月の今ではストーリーも終盤に差し掛かっていた。

前世の自分がその手の番組を視聴していたのは小学校中学年までで、特に特撮好きというわけではなかった。しかし、こちらの世界……というか、自分が生まれた時代はスマホや携帯ゲーム機が存在していないので娯楽もテレビ番組に偏っている。

そんなわけでテレビっ子として育った自分は特撮番組から卒業する機会を逃し、高校生になってもこうして朝早起きしてテレビに向かうのを習慣としていた。

「あんた……いい加減いなご卒業したら?」

エンディングが終わり、余韻に浸っていた自分を母さんは呆れ顔で見つめている。

日曜の朝は主婦向けのバラエティ番組なども放送しているため、基本的には母がチャンネルを握っている。しかし、イナゴマスクが流れる30分間だけはいつもモコンを貸してもらっていた。

母も昔はそんな自分の姿を微笑ましく見ていてくれたのだが、いつまでたっても男児向け番組を見続ける息子に思うところがあるのだろう。最近朝からはしゃぐと冷めた視線を向けられることが多い。

「いいじゃん。少年の心を忘れたくないんだよ」

「それ、オヤジ臭いわよ」

「マジ？ でも俺、父親リスペクトしてるから」

「一番いらないとこを尊敬するのやめなさい」

特に何も考えずに口を開き、軽口を叩き合う。

基本的には母親との距離感は今のような感じだ。両親が幼い頃から共働きで母親にもべったりくつついた記憶が存在しないということと、前世の記憶が原因で、自分はある意味普通の家庭よりも親との距離が近い。

会話が途切れて無言が続く。

なんとなくコタツから這い出る気分にはならなかったので、母親にリモコンを渡してチャンネルが変わってもその場を動かずにいたのだが、番組がCMに差し掛かったところで声をかけられた。

「そういうえば純一、あんた今日の予定は？」

「ん？ 家にいるつもりだけど。どうしたの？」

「今日、お母さんの友達がお昼食べに来るのよ。ほら、東京のあっちゃん」

その名前には聞き覚えがある。確か、母親の高校生時代からの友人だったはずだ。直接会ったのは幼い頃のみで顔は思い出せないのだが、度々母との話に出て来るので名前を出されてもなんとなく頷くことができる。

「それで？」

「お小遣いあげるから家空けてくれない？」

「それを当日にいうかね」

「いいじゃない、暇なんでしょ？ 三千元あげるから外でなんか食べるといで」

月の小遣いが五千円の自分にとっては三千元は中々の額だ。それにほとんど知らない母親の友達と顔を合わせるのも面倒だし、ここは大人しくいうことを聞くことにする。

「おっけ。いつまで？」

「まあ、遅くても夕方くらいには帰ると思うわ」

「ん。美也は？」

「もう家出てるわよ。友達の家で遊ぶんだって」

母はそう言うのと財布を取りに部屋を出ていった。

ほどなくして戻ってきた彼女から三枚の千円札を受け取ると、コタツから這い出て大きく伸びをする。

「んじゃ、適当に出るわ」

そうして大体の帰宅時間の予想だけを伝えた自分は、部屋で軽く時間を潰し、11時を過ぎたところで支度を済ませて家を出るのであった。

◆◆?

家を出た自分が一番最初に向かったのは、そう遠くない距離にある繁華街の牛丼屋であった。

食欲というのは不思議なもので、平日では授業中でも御構い無しに午前中から襲って来るのだが、休日になると途端に息をひそめる。それならばいつそのこと昼食を抜いてしまおうかと考えると、昼時を過ぎてから突然脳を刺激してくるのだ。そうして仕方なく欲望に従い食事をとると今度は夕食が食べられなくなってしまふ。

よって、こういう日には気力がなくてもさっさと何かを食べることにしている。せっかくの休日に、さらに小遣いまで貰ってまでそのような行動を取るのには少々虚しく感じるが、経験上これが一番良い結果をもたらすということを知っている。栄養摂取だと割り切り、なるべく短時間でなおかつ手頃な価格、さらに自分の好みに合った食事の牛丼をチョイスした。

そうして大手牛丼チェーン店『のしの屋』で並盛つゆだくという比較的オーソドックスなメニューを食し店を出た自分は、近くにある古本屋を目指して歩いていった。

これから約5時間は外で時間を潰す必要がある。そのための行動として喫茶店での読書を選択した。他にもゲームセンターや映画館

という選択肢もあつたのだが、どちらもイマイチ気分が乗らず、結果として金と労力のかからない無難なものを選ぶに至った。

やってきたのは何の変哲も無い古本屋だ。繁華街の一角に位置するその店は特に品揃えが良いというわけでは無いのだが、家の近くにあるということで小学生の頃から利用している。

店の中には入らず店先に並べられたワゴンに目を通す。中には状態の悪い古本が並べられており、価格は100円と殆ど投げ売りに近い。これが今回の目当て、というかこの店を訪れた時はこのコーナーしか利用することはない。

本を買うということはクジに近いと思っている。どれだけ名作だと世間で騒がれていようが、反対に駄作という評価が下されていようが、結局は自分の感性に合うかどうかでその本の価値が決まる。それならば中古で数を買って当たりを引いた時に新品のものを改めて買えばいい。それに、ハズレを引いてしまった時も100円であれば躊躇いなくゴミ箱にブチ込める。腹が立つほどの駄作であればページを破つてもいい。そうしてストレスを発散できるのであれば、値段分の価値を見出せているということになる。少々意味が変わってくるが。

明らかに興味のない本、雑学書やビジネス書などをタイトルで避け、適当に選んだ小説を二冊手にとる。それを持って店の中に入り会計を済ませる。

対応した店主とは10年近い付き合いになるのだが、特に仲が良いとかそういうことはない。提示された金額を手渡し、本を受け取る際に事務的な挨拶を交わす程度のコミュニケーションしか取ったことがない。それがあある意味気楽でこの店を選んで利用している。ここで買う古本は最悪読まずに捨てることもあるのだ。下手に仲良くなつて感想などを求められても困る。

ビニール袋に買った本を入れてもらい、それを手に取り店の外に出る。

さて、これからどこに向かおうか。

今日は日曜日だ。パツと思いつくようなコーヒーチェーン店の席

はおそらく埋まっているだろう

別に空席を探してこちら一帯を歩き回っても良いのだが、せつかく時間と体力に余裕があるのだ。どうせ歩くならほとんど訪れたことのない地域を歩いて喫茶店を探してみても良いのかもしれない

そう思い立った自分は繁華街を抜けるために歩き始めた。

向かっているのは隣町の輝日南の方向だ。そこは家と高校から反対に位置しているのでほとんど訪れることがない。

見慣れない景色を目に収めながら、あまり体の向きを変えずに大通りに沿って歩き続ける。今の時代にはスマートフォンのような便利な道具は存在せず、迷ってしまったら自力で何とかするしかなくなる。高校生にもなって隣町で迷子になるのは少々恥ずかしい。なので、反対を向いて歩けば帰ってこれるといふ前提条件をつけて行動する。

十数分ほどはそうして歩いていたのだが、目に入るのは居酒屋やコンビニ程度で、落ち着いて時間を過ごせる店は見当たらなかった。さらに、気がつけば住宅街へと入ってしまったようで、ここまで来れば喫茶店などはおそらく見つからないだろう。

それならばさっさと来た道を引き返すべきなのだろうが、初めて目にする風景が妙に気分を高揚させ、何もないというのをわかつていても、足を止めることができなかった。

そうしてさらに数分、ゆつくりとした足取りで周りを眺めながら歩みを進めていたのだが、ふと目についた建物があつた。

大きくも小さくもない一軒家。屋根のないタイプの駐車場には、車の代わりにマウンテンバイクが2台とスクーターが一台停まっている。隣家は普通の住宅のようだ。そのままの考えでいけば、その建物もただの家屋となるのだろうが、家の敷地と道路のギリギリのところ一枚のブラックボードが立ててある。

『coffee | 350yen』

その下にはいくつかのフードメニューと、白のチョークで描かれたコーヒークップが見られる。ということは、その建物はカフェで間違い無いのだろう。建物はごく普通の一軒家のため、外から中を覗くこ

とはできない。しかし、玄関を眺めてみると「open」と書かれた板がぶら下げてあるので開店中ではあるはずだ。

店の前で足を止める。目の前にあるのは探し求めているものなのだが、中に入るのは少々躊躇われる。

メニューの値段は問題ない。自分の小遣いでも問題なく払える程度のものだ。それならば中に入ってみようとは考えるのだが、中々足が動かない。住宅街にある喫茶店という異質な条件と、建物の中が見えない状況が相重なり、踏ん切りがつかないのだ。

少しの間そうして思案に暮れていたのだが、側を通ろうとした車を避けるためにその建物の敷地に入ったことで決心がついた。

これも何かの縁だろう。とりあえず中に入ってみて、あまりにも雰囲気合わないようであれば、席に着かずに店を出ればいい。

そう覚悟を決めて、恐る恐る店の扉に手をかけ、中へと入る。扉を開けると同時に高い鈴の音が鳴った。

軽く店内を見渡す。広さは外から見た程度で、玄関から見えて一番奥に1箇所、大きなソファ一席がテーブルをまたいで向かい合うように並べられている。その他には4人がけのテーブル席が2箇所。計3箇所の席が奥から玄関に向けて並んでいる。

客は自分を含めず3人見られる。ソファ一席で2人の女性が談笑しており、手前の方のテーブル席では、こちらに背を向けるように髪の毛の長い少女が座っている。

そうして中の様子を観察していると、二階へと繋がる階段からエプロン姿の女性が降りて来る。

彼女はこちらの姿を確認すると笑顔で話しかけてきた。

「いらっしやいませ。お一人でよろしいでしょうか?」

「えっと、はい。一人です」

「かしこまりました。それではこちらへどうぞ」

そうして、彼女に3つ並ぶテーブルのうち、空席だった真ん中の席へと案内される。

それに従い店の奥へと足を踏み入れ、一番手前のテーブルを通り過ぎようとしたところで、そこに座っていた人物から声をかけられた。

「あれ？ 橘くん？」

驚いて足を止め、後ろを振り向く。

そこに座っていたのは、ペンを片手に持ち、目を丸くしてこちらを見つめる絢辻だった。休日だから当然なのだが、彼女はいつもの制服姿ではなく、長袖のシャツに青いパーカーを羽織っている。そういった見慣れない服装をしていたことと、先ほどまで机に向かって頭を下げていたため、自分は席に着いていたのが彼女だとは気がつかなかった。

互いの視線がぶつかり合う。言葉こそ発せられないものの、彼女の考えは伝わってくる。

どうしてここに？

恐らく輝日東で暮らしている人間なら、こんな場所にある喫茶店を訪れることはほとんどないのだろう。それに、雰囲気的に彼女がこの常連だということはわかった。きっと隠れ家のような意識でこの店を利用していたのだろう。そこに突然同級生が現れたから、困惑しているようだ。

なんとも言えない空気が場に流れる。店を出るわけにはいかないし、かといってこのまま一人の時間を過ごすのも、彼女の存在を意識しながらだと息が詰まってしまう。

どうしたものかと頭を悩ませていたのだが、突然動きを止めたのを心配した店員の女性に声をかけられたことによって、我に返る。

「あの……どうかなされましたか？」

「えっ？ ああ、いや、その……」

「彼、友達なんです」

返事に詰まってしまったところ、絢辻に助け舟を出された。

そのまま彼女はこちらに目を向けて話を続ける。

「橘くん。よかつたら相席どうぞ」

「えっと、いいの？」

「うん。そろそろお店が混み始める時間だから。一人でテーブルを使うわけにもいかなくなるし」

確かに正午を過ぎれば、普通の喫茶店では人が入り始める時間帯

だ。テーブルが3つしかないこの店では、どのみち誰かとの相席は避けられないのだろう。ここは彼女の厚意を受け取っても良さそうだ。そのような考えに至り、絢辻の向かいの席に腰掛ける。手に持った古本の入った袋をテーブルの上に置き、店員にホットのコーヒーを一杯注文する。

「かしこまりました。ごゆっくりどうぞ」

そう言うとき彼女はその場を離れて、カウンターへと向かっていった。その後、コーヒーをドリップする準備にかかっている。どうやら、割と本格的なものを出してもらえるらしい。

少しばかり店員の姿を目で追って気を紛らわしていたが、いつまでもそうしているわけにもいかない。正面を向いて絢辻に話しかける。

「あー……ごめんね？ 邪魔しちゃって」

「ううん、気にしないで。それよりも、橘くんはどうしてここに？」

不思議そうにこちらを見つめる絢辻に、ここに来るまでの流れを説明する。母親の友達が来るからという理由で家を追い出されたことから、なんとなく普段訪れない場所に喫茶店を探しに行こうと思いついたことまで。

それらを話し終えたところで、絢辻は笑いながら口を開いた。

「なるほどね。それで偶々ここを見つけたんだ」

「うん。住宅街を歩いてたら見つけたからビックリしたよ」

「あはは、普通はこんなところにお店があるなんて思わないわよね」

場の雰囲気柔らかくなってきたところで、ちょうど店員がコーヒーを運んできた。

彼女が礼をして去って行ったタイミングで、机の上に置かれたカップを持ち上げ口をつける。

「あら意外。ブラックで飲むのね」

カップを机に置いたのを見計らい、絢辻が話しかけてきた。

「ホットだったらね。アイスはミルクまで入れないと無理」

「そうなんだ。どう？ ここのコーヒー、美味しいでしょ？」

微笑みながらそう尋ねられる。

店員が手間をかけてドリップしている姿から、恐らく今口に含んだ

ものは美味しい部類なのだという予想はつく。しかし、コーヒーへの教養が足りていないのと、そもそもコーヒーは喫茶店の入場券代わりに飲むだけで特に好みではないという理由から、自分の舌では判断がつかない。

のだが、空気を読んで言葉を発する。

「ほんと。こんなに美味しいの、なかなか飲めないよ」

「ふふっ、でしょ？ おばあさん。さっきの店員さんのお母さんが、外国まで行って選んだ豆を使ってるんだって」

少し声を高くして、絢辻はそう言う。自分のお気に入りを褒められたことを喜んでいるのだろう。

チクリと良心が痛む。本当は苦い以外の感想は特に抱いていないのだが。

その後少し間が空いたのだが、カップを啜るこちらの姿からコーヒーを味わっていると思われたのだろう。彼女は黙ってこちらを見つめている。

さらに少しして、コーヒーの苦味にうんざりした自分がカップを置いたところで、彼女に話しかけられた。

「それにしても、ちょっと残念。ここ、バレちゃった」

「ああ……」

やはり絢辻はこの店のことを誰にも教えていなかったらしい。少しばかり落ち込んだ様子が見られる。

「まあ、俺の家からはちょっと遠いからさ。今日だけだよ」

「そう？ コーヒー、気に入らなかった？」

「えっ？ いや、そういう訳じゃなくてさ、えっと……」

「ふふっ、冗談よ」

予想外の返事に慌ててしまうが、そんな姿を眺めた絢辻は笑いながらそう告げた。

それによつて落ち着くことはできたのだが、少々ばつが悪くなる。

「気を使ったのに……」

「あはは、ごめんなさい。でも、橘くんなら構わないわよ？ できれば他の人には秘密にしてほしいけど」

その言葉は彼女の本心なのだろうか。なんだか逆に気を使わせてしまったような気もする。

それでも男というのは単純なものだ。可愛い女の子から貴方は特別だと告げられれば、自然と気分が良くなってしまおう。

照れ隠しにコーヒーに手をつける。カップが運ばれてから五分と経っていないのだが、すでにその中は半分以下まで減ってしまった。

コーヒーの苦味で気を取り直した自分は、改めて絢辻に話しかける。

「絢辻は何してたの？ 勉強？」

「ううん。クリスマス委員で使う資料をまとめてたの」

「ああ、そういえば委員長だったっけ」

クリスマス委員というのは、輝日東高校文化祭の後夜祭、別名クリスマスパーティーを企画、運営する委員会のことだ。絢辻は去年からそれに所属しており、今年は委員長に選ばれたらしい。

それにしても凄い気力だ。ただでさえ仕事の多い学級委員を請け負っていながら、クリスマス委員の実行委員長まで務め、その上で教師からの頼みごとまで引き受けているとは。こうして休日にまで作業をしているのを見ると、オーバーワークなのではないかと心配してしまう。

「それ、手伝えることある？」

どうせ時間を潰すのが目的なのだ。彼女には数日前に掃除を手伝ってもらった恩もある。そう思い立っての発言だ。

こちらの言葉に絢辻は目を丸くする。

「えっ？ あるにはあるけど……すぐ終わるようなものじゃないわよ？」

「むしろ都合がいいよ。夕方まで家には帰れないんだし」

「うん……でも」

どうにも歯切れが悪い。それは人に任すには躊躇われるような仕事量だからなのだろう。

それならばむしろ引けなくなってしまった。彼女が一人でそれに向かうのを眺めながら読書をすることができるほど、自分の神経は凶

太くはない。

そう考え、未だ言葉を濁している絢辻に話しかける。

「それにさ」

「ん？」

「いや、あれ。この前言ってたじゃん。友達だったらなんちゃらかんちゃら、ってやつ」

自分の言葉に絢辻は少々口ごもるが、やがて諦めたようだ。呆れたような笑みを浮かべると、口を開いた。

「ふふつ、橘くんって案外強引なのね」

「それをきみが言うかね」

こちらも呆れ顔でそう返すと、どちらからともなく笑いがこぼれる。

そうして顔を合わせながらクスクスと笑い合うと、落ち着いたところで絢辻が口を開いた。

「ふう、それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうわね」

「まかせて」

「ふふつ、ありがとう。えつと、そしたらね……この資料に額面の記入をしていってほしいの」

そう言うと、三枚の紙を手渡される。

一枚は今年のおおよその経費を算出するための白紙、二枚目は昨年度の予算と経費をまとめた資料、三枚目は今年の出し物のまとめだ。

そのまま彼女に作業の説明を受ける。二枚目を参考にし、三枚目に照らし合わせた数を計算して、一枚目に記入しろとのことだ。それに、後から絢辻がチェックできるように計算も丁寧に書き出して欲しいと頼まれた。

覚悟はしていたが、やはりそれなりに手間のかかる作業ではある。

しかし、逆に考えれば彼女がこれを一人でこなそうとしていたということだ。それならばやりがいのあるというものだ。

頭を切り替え、集中して作業に向き合う。それと同時に彼女も自分の仕事を再開した。

そうして無言でペンを動かし、30分は経っただろうか。作業はま

だまだ中盤なのだが、とりあえず一工程を終わらせられ、ペンを置いて軽く伸びをする。そして、すっかり冷めてしまったコーヒーを飲み干すと、店員に二杯目を注文した。

それに合わせて絢辻も顔を上げ、同じくホットコーヒーを注文する。

数分して運ばれてきたコーヒーを啜り、ホッと一息ついたところで、少々休憩を取るといふ雰囲気になった。

「その本、見せてもらっていい?」

「ん? いいよ。どうぞ」

未だ袋から出していない中古本を絢辻に手渡す。あまりにも適当に選んだため、何を買ったかはもう忘れてしまっていた。

それを受け取った彼女は、袋から取り出し、二冊の表紙を見ると同時に顔をヒクつかせる。

『マディソン郡の橋』に『バトルロワイアル』って、凄いチョイスね……」

「ん? そうなの?」

「呆れた。知らずに買ったの?」

「まあね。小説っぽいタイトルの中で、適当に目についたのを手に取ったから」

それはもう、よくある心理診断の問題のように、一瞬眺めて一番最初に目についたものを手に取ったのだ。最悪チリ紙に代わる本を選ぶのに労力をかけてしまうと、後々後悔することになる。本当に200円をドブに捨てるつもりで購入したのだ。

しかし、彼女の読み上げたタイトルの片方には聞き覚えがある。

バトルロワイアル。詳しい内容こそ知らないものの、そのタイトルは前世の頃から馴染みのあるものだ。

「絢辻は知ってるの?」

「マディソン郡の橋はね。バトルロワイアルは知らないけど……まあ、想像はつくでしょ?」

「だね」

確かタイトル通りだったはずだ。中学生だか高校生だが、クラス

メイトで殺しあうといったストーリー。まさに、ザ・B級といった内容だ。

「マディソン郡の橋は？」

「うーん、あんまり話すとネタバレになっちゃうんだけど……」

「いいよ別に。俺はそこまで気にしないから」

「そう？ それなら話すけど、恋愛小説よ。名作と言っても過言ではないと思うわ」

「へえ、恋愛小説」

「うん。まあ、不倫ものなんだけど」

「ええ……」

予想外の内容に軽く引いてしまう。

それを見た絢辻は苦笑いを浮かべながら話を続ける。

「あはは……まあ、橘くんの思い浮かべてるようなものでは無いと思うわよ」

「そうなの？」

「ええ。これもある意味、純愛の形なんじゃないかしら」

読んでみればわかるわ、と続けた絢辻は二冊とも返してきた。

それを受け取り、再び袋の中へしまう。

「ま、後で読んでみるわ」

「ええ。したら、感想を聞かせて」

「バトルロワイアル？」

「そっちは結構。……さて、もうそろそろ休憩も終わりにして、さっさと仕上げてしまいましょ？」

数分間の休憩であったが、コーヒーを飲んで雑談をすることで、頭の疲れをクリアにすることはできた。これ以上話し込んで仕舞えばやる気までクリアにしてしまうかもしれない。

そう思い立った自分は彼女の考えに同意し、資料の作成を終わらせにかかるのであった。

腕時計の針は4時半を指している。

あの後、さらに1時間程度で資料作成を終わらせた自分たちは、雑談をしたり本を読んだりしながら、さらに2時間ほど過ごし、頃合いを見て会計を済ませて店を出た。

絢辻と自分の家はそこまで離れてはいない。なので、自然と一緒に帰宅する流れになった。

とりとめもない会話を交わしながら歩みを進める。日の入りにはまだ少し時間があり、あたりは明るいままだ。

そうして住宅街を抜け、大通りを歩き、繁華街に差し掛かったところで、突然誰かに声をかけられた。

「あれ？ 詞ちゃん？」
「ん？」

声が聞こえたと同時に、絢辻の肩がピクリと跳ねる。

その後、声の発せられた方向に二人で目を向ける。そこにいたのは髪の長い女性。彼女はこちらの顔を確認すると笑顔で駆け寄ってきた。

「やっぱり詞ちゃんだ」

「……お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ……」

どうやら彼女は絢辻の姉らしい。

改めてお姉さんの容姿を眺めると、二人はよく似ていた。艶やかな黒髪を背中まで伸ばしており、妹との違いは左右の耳の前に髪の束を垂らしているかどうかだ。大きな瞳に、少し垂れ気味の目。顔のパーツは整っており、非の打ち所がない。それは美女としか形容のしようがないだろう。

「そっちの子は……詞ちゃんのお友達？」

「……うん、クラスメイトの橘君よ」

言葉を発する機会を逃してしまい黙っていたのだが、絢辻に挨拶を

振られたことにより、慌てて口を開く。

「えっと、橘です。どうも」

「ふふっ、はじめまして、姉の縁です。いつも詞ちゃんがお世話になって、る？」

「……………」

笑顔で挨拶を返してくれた縁さんと対照的に、絢辻の表情は曇っている。

先ほど談笑していた時とはあまりにもかけ離れたテンションの差に、ついたじろいでしまう。

そうして少しだけ間があいてしまい、縁さんが不思議そうにこちらを見つめてきた。慌てて何か言葉を発せなければと思いい口を開きかけたところで、絢辻に話しかけられた。

「ごめんね橘くん。私、お姉ちゃんと一緒に帰るから」

「えっ？ あ、うん」

「今日はありがとう。それじゃ、また明日」

簡素な挨拶を交わして、絢辻はその場を立ち去っていく。

慌てて縁さんも一言挨拶を残すと、絢辻の背中を追いかけるように去っていった。

今のは一体なんだっただろうか。つい数分前まで絢辻の雰囲気は明るかったのにもかかわらず、姉と顔を合わせただけであれだけのローテンションに陥ってしまった。よくわからないのだが、どうやら姉妹仲はあまり上手くいっていないらしい。

しかし、その結論にも疑問は残る。というのも、縁さんはあれだけ明るかったのだ。姉妹で嫌い合っているというわけではないとしたら、なぜ絢辻があのような態度をとったのかわからない。

まあ、他人の家庭の問題だ。ここでいくら考えたところで下世話な妄想にしかならないし、友人に対してそれは失礼なことだろう。

そう考えた自分は、少々しこりが残るものの、我に返り帰路へとつくのであった。

3話

「ん？ 何やってんだあいつ」

朝、いつもより少し遅れて登校時刻ギリギリに教室へと到着した自分の目に飛び込んで来たのは、たじろぎつつも絢辻と何やら話す薫の姿だった。いつも薫の隣にいる田中さんは、今は席について彼女たちの様子を苦笑いを浮かべながら見守っている。

薫と絢辻が一緒にいる姿を見るのは珍しい。あの二人の間にはあまり接点がなく、なおかつ薫曰く波長が合わないということ、積極的に会話を交わすような仲では無かったはずだ。

「うい」

「ん？ ああ、大将」

机にカバンを乗せ、コートを脱いで椅子にかけた後、席に着いている梅原の元へと近寄り声をかける。先に教室へと着いていた彼は、机に頬づえをつけて二人の様子を眺めており、恐らく事の経緯を把握しているはずだ。

「何やってんのあいつら」

「いや、俺もちょうど今来たところなんだ」

「あー……」

「ん、でもまあ見た感じ、棚町がなんかゴネてるっぽいな」

梅原の言葉を聞いてから、改めて3人へと視線を向ける。

確かに二人には会話を楽しんでいるような様子は見られない。そして薫が若干怯んでいる姿から、何かを絢辻に頼んでそれを突っぱねられているといった風にも見えなくはない。

「行ってみっか」

「大将、お前まじか」

「いや、だって気になるだろうが」

梅原に信じられないといった目で見つめられる。

確かに、話し込んでいる女子の輪に加わるというのは気がひける行為ではある。しかし、別に険悪な空気が漂っているというわけではないのだ。それに薫も絢辻も、用事がなくても話しかけられる程度には仲が良いと自覚している。状況的にも、話しかけて事情を聞くのは許されるはずだ。

「まあ、骨は拾ってやるよ」

「なんだそりゃ。俺死ぬの？」

「いや……だって、天井じゃねえか」

「は？ 意味わかんねーよ」

梅原はそれ以上会話を続ける気はないようで、南無三と両手を合わせながら呟いた。

本気で止めにかからないあたり、なんだかんだで彼も期待しているようだ。直前の会話の意味はあまり理解することができなかったが、それについて考えることはやめにして、薫たちの元へと向かうことにした。

「あ、純一」

「おは」

立ち位置的に、薫の視界には自分が近づく姿が入っていたのだろう。声をかけるよりも先にこちらの存在に気がついた彼女は、絢辻との会話を中断させて視線を合わせてくる。それに続き、絢辻も薫の目線に従って顔の向きを変えてきた。

「ああ、橘くん。おはよう」

「おはよ。珍しいね、絢辻が薫と話してるなんて」

「そ、そうかな？ まあ、ちよつとね」

「ちよつと？」

「うん。えっと、話せば長くなるんだけど……」

絢辻は苦笑いを浮かべると、事の事情を説明し始めた。

今朝、体育教師に呼び出された薫と田中さん、そして絢辻は、それぞれ補習とその監督を言い渡されたらしい。

本来ならば補習は教師、もしくはは体育委員が務めるのだが、その二人が所属する陸上部の大会が直前に迫っているということと、プール

の使用状況的に今日の放課後しか補習を行えないということ。そして、絢辻が成績優秀者で教師たちからの人望を集めていたということにより、例外的に監督を任されたそうだ。

そして、それを承諾して教室へと戻ってきたところで急に薫がゴネ始めた、と。

あまりにもな内容に、思わず冷めた視線を薫へと向けてしまう。それに対して彼女はバツの悪そうに顔をそらした。

「お前さあ……」

「だって！ 今朝いきなり言われたのよ!? あたし今日バイトだったのに……」

「自業自得だろうが。つーか補習ってなんだよ。お前海産物のくせに泳げねえのか」

「大将……」

梅原の呆れたような声が遠くで聞こえた気がした。それと同時に、薫が顔色を変えてこちらを睨んでくる。

しまったと思ひ、慌てて訂正の言葉を発しようとしたのだが、それよりも先に薫が自分の背後へと周り、首に手を回してチョークスリーパーを掛けてきた。

「だ！ れ！ が！ ワカメですって！」

「ぐっ……うう……」

首を絞められることによつて気管が塞がり、言葉を発することもままならない。抵抗のしようがないので、首に回されている彼女の腕をバンバンと叩くことで意思表示をする。

薫はその程度で技をやめるような女ではなく、しばらくは首を絞められ続けたのだが、こちらの顔の色が変わり始めたあたりで流石に不味いと感じた絢辻が止めにかかってくれたおかげで、なんとか解放されることになった。

突然拘束から外された反動で、思わず地面に膝をつく。そのまま、ゼエハアと大きく深呼吸することで、十数秒ぶりに脳に酸素を行き渡らせる。

なんとか呼吸が整ったところで体を起こすと薫は未だこちらを睨

み続けており、そんな彼女の怒りを収めるために、たじろぎつつも話しかけることにした。

「いや、違うんだって……人魚のように美しいって意味だったんだよ……」

「どーこの世界に人魚を魚介類扱いする男がいるのよ」

弁解の言葉を述べたつもりだったが、薫の冷静なツツコミにより言葉がつかまってしまふ。その場に居たたまれなくなり、そっぽを向いて誤魔化そうとしたところで、そんな様子を見かねた絢辻がフオローに入ってきてくれた。

「ま、まあまあ。棚町さん、それくらいでね？」

「別にいいのよ、絢辻さん。こいつの丈夫さはあたしが一番把握してるから」

「そういう問題じゃないでしょうに……何か起こってからじゃ取り返しがつかないのよ？ ああいう、意識を落としかかるような技は洒落にならないんだからね？」

戯ける薫に対し、絢辻は少し語気を強めて話しかける。

このような流れ自体は自分と薫の間では茶飯事のようなことなのだが、危険な行為であることには間違いない。真面目な絢辻は、自分たちのいつもの調子を知らないということもあって、本気で怒っているように感じられる。

彼女の真剣な表情に怯んだ薫は、バツの悪そうな表情を浮かべるとこちらを向き、渋々と言った風に口を開いた。

「まあ……悪かったわよ」

「んー、いや。8割は俺が悪いんだけどさ。それでも、残りの2割は授業をサボって補習をゴネてるお前だからな」

「はいはい。体は大丈夫？」

彼女も絢辻の言葉によって多少の罪悪感を感じたのだろう。少しギクシヤクしながらこちらを労わる言葉を掛けてきた。

少々場の空気が沈んでしまっており、慣れていない状況に薫も戸惑っているようだ。それを解消するためにも表情を明るくして返答する。

「死にかけた」

「あんたねえ……」

「マジだって。ねえ、わかってんの？俺の残機はお前の髪の毛と違って、水に浸けても増えないんだよ？」

「橘くん……」

「大将……」

しまった、と思った時にはもう遅い。絢辻は呆れ顔を浮かべており、その隣の薫はわずかに震えている。

冷や汗が頬を伝うのがわかる。助けを求めるように梅原に視線をやるが、無言で首を振られてしまった。

諦めて視線を薫に戻すと、満面の笑みを浮かべた彼女が拳をポキポキと鳴らしながら話しかけてきた。

「言い残すことは？」

「ごめん。つい心の声だ」

それに対してこちらも笑顔で返す。

目線と目線がぶつかり合い、数秒の間沈黙が続く。

もしかして、許されたのだろうか。そんな希望的観測を抱き始めたところで、突然素早く間合いへと入ってきた薫は、こちらの肩に左手を掛け大きく右手を肘から後ろへ引いた。

大ぶりなその動作から、逃げるからこそできなかったものの、来たる衝撃に備えて腹筋に力を入れることができた。

「せいっー！ ばいっー！」

ドゴという擬音が幻聴として聞こえるような勢いで、薫が放った拳が腹部に突き刺さる。

あらかじめ予測はできていた一撃であったが、輝日東の核弾頭と呼ばれる女の拳だ。その衝撃は悠々と腹筋を貫通し、内部へと到達した……気がする。

一瞬大きな衝撃を感じた後、痛みと吐き気が同時に襲いかかった。膝をついて腹を抱える自分であったが、喉へと逆流してくる何かを外へと出ようとするのを、気合いで堪える。

しばらくして波が治まったところで顔を上げるが、その場にはもう、人の姿は見られなかった。

立ち上がったところで二人の姿を探すと、彼女たちは既に席に着いており、その扱いの悪さから解せぬといった表情を浮かべたところで、その場から動けずにいた自分に対し絢辻が一言。

「あはは……橘くん、もうすぐホームルームよ？」

「……はい」

絢辻は今の流れで薫との関係を察したのだろう。こんどは労つてはもらえず、呆れ顔で早く席に着けと促された。

腕時計に目をやれば、後数分で教師が教室へとやってくる時間だ。よくよく周りを見渡すと、ほとんどの生徒が席へと着いており、立ちすくんでいた自分は完全に浮いている。

その場に突っ立っているわけにもいかないので、トボトボと席へと向かう。すると、梅原の席の横を通りかかったところで、彼に小さな声で話しかけられた。

「お前マジで学習しないな……」

「あゝ!？」

思わず声を上げてしまったが、周りの視線が集まったことにより、我に返って口を紡ぐ。

梅原はニヤケ顔でこちらを見つめており、その表情がさらに自分を苛立たせるのだが、それを表に出すわけにもいかず、渋々その場を立ち去ることとなった。

そうして、担任の高橋先生がやって来るまでの数分間を、やりきれない気持ちを抱きながら過ごすのであった。

◆◆?◆

「気をつけ。礼」

四限終了のチャイムが鳴り、教師が授業終了を告げたことにより、

学級委員である絢辻の合図に従い、一斉に挨拶を行う。それに対して教師が挨拶を返した瞬間、あたりは一気に騒がしくなった。

昼食休憩の時間へと突入したことにより、各々が自由に行動を取り始める。ノートを取り続けるもの、友人の元へと駆け寄るもの、弁当箱を取り出して食事を始めるもの、教室を出て行くもの。

今日の自分は一番最後に当てはまる。午前中に梅原から、今日は昼食を共に取ることができないと聞かされており、また弁当を持参していなかったのも、久しぶりに学食を利用しようと考えたからだ。

学食自体は混雑することはあっても、席を確保できないという日はほとんどない。なので、購買に向かう時とは異なり、焦ってまで移動する必要はない。よって、直ぐに教室を出ようとはせず、何を食べるかを考えながら、ゆったりと机の上のものを片付けに掛かった。

そうして、筆記用具をしまい、教科書類をロッカーに整頓し終わり、いざ教室を出ようと思いいったところで、こちらに向かつて近づいてきた絢辻に声をかけられた。

「ね、橘くん、ちよつといいかな」

「ん？」

体の前で手を組み合わせ、様子を伺うように話しかけてきた絢辻は、自分が反応を返すとその調子のまま話を続ける。

「あの……橘くんって、今日はお弁当だったりする？」

「え？ ううん。学食でなんか食おうと思ってただけけど……」

「そっか、よかった……」

「よかった？」

「うん。えつとね、昨日クリスマス委員の仕事の手伝いをしてもらったでしょ？ そのお礼に、お弁当を持ってきたの」

絢辻は、表情を緩めてそう言葉を発した。

弁当を持ってきたからどうしたというのか。わざわざそんなことを伝えなくても、一人で食べればいいだろう。彼女の言った言葉の意味が理解できず、一瞬戸惑ってしまう。

「橘くん？ どうかした？」

「えっ？ ああ、いや。なんでもないよ。それで？ 俺は学食に行き

「たいんだけど……」

「あつ……ごめんささい。もしかして、迷惑だった……?」

「迷惑? なにが?」

どうにも話が噛み合わない。何かがおかしいと感じ、今までの会話を頭の中で反芻する。

確か、彼女は昨日の礼として弁当を持ってきたと言ったはずだ。

礼として弁当を持ってきた? まさかとは思うが、それは手作り弁当を食べて欲しいということなのだろうか。

「……ごめん、違ってたらアレんだけど、もしかして弁当を持ってきたって、俺の分のこと?」

「えっ? え、ええ。そうだけど……」

「マジか」

「う、うん。それで、一緒にお昼を食べれたらなって……」

こちらの顔色を伺うように言葉を発する絢辻。

そんな彼女の提案に妙な違和感を覚えてしまい、言葉に詰まってしまったが、口ごもる自分に対し彼女が不安そうな表情を浮かべたことにより我へと返り、なんとか口を開く。

「絢辻ってさ、そういうキャラだっけ」

「え? えっと、どういう意味かな」

絢辻に聞き返されたことにより、再び言葉を詰まらせてしまう。

彼女は男に弁当を作るようなキャラじゃない。それが彼女の言動に対して抱いた違和感の正体だ。今の言葉では少々棘が出てしまったが、要するに、絢辻は気を使える女子なのだ。だから、礼をしようとすることもそういう男子を勘違いさせるような行為は避けるタイプであると思っていた。

そのことを彼女に伝えたいのだが、思いついた言葉ではどうしても棘が出てしまい、なかなか口を開くことができない。

そんなこちらの様子から何かを察したのだろう。絢辻はクスクスと笑いながら話しかけてきた。

「私がこういうことするのって、変かな?」

「変……ではないけど、意外ではあったかも」

「ふふっ、そうね。でも、橘くんだからなのよ？」

それが直球の意味ではないということにはわかったのだが、どう返事をして良いのかはわからず、絢辻が続きを話すのを待つ。

そんなこちらの様子を眺めた彼女は一呼吸置いて、いたずらっぽい笑みを浮かべてから再び口を開いた。

「ほら、友達だったらーってやつ。あなたが教えてくれたんじゃない」「……やっぱお前の方が強引じゃねえか」

◇ ◆ ? ◇

結局絢辻に押し通されてしまった自分は、彼女に少しだけ支度をしてから向かうから先にテラスの席を確保しておいて欲しいと頼まれ、自販機で飲み物だけを買ってから食堂を通ってテラスへと移動した。

11月に入ってまで、わざわざ外で食事を取ろうと考える生徒は少ないだろう。雑談をしている生徒はちらほらと見受けられるが、空席は多く、その中でなるべく目立たないような位置にあるテーブルを選んで椅子に腰を下ろした。

絢辻が現れたのはそれから数分後で、特に探すこともなくこちらの姿を見つけられた彼女は、軽く手を振りながら駆け寄ってきた。

「おまたせ、早速食べましょうか」

そう言っただけで席に着いた絢辻は、肩にかけていた通学カバンを下ろすと、中から大きめの弁当箱を1つと、恐らく自分の分であろう巾着袋と水筒を取り出した。

彼女から弁当箱を受け取り、蓋を開ける。

「うっわ、すげえな……」

思わず感嘆の言葉が漏れてしまうほど、その中身は充実したものだった。

四角い弁当箱は半分に仕切られており、ご飯側には小さな梅干しが1つ乗っている。おかずの内容はハンバーグに目玉焼き、唐揚げ、そ

してウインナーのベーコン巻きと少しのサラダという、男子高校生には嬉しい重めの食べ物と、彩りを兼ね備えたものだった。

「これ、絢辻が作ったの？」

それらのおかずは形が不揃いなことから、市販品ではないということとはわかった。しかし、もしこれが手作りだとしたら結構な手間がかかっているはずだ。札を言うためにもそここのところを確認しておきたかった。

こちらの質問に対し、絢辻は一瞬目を泳がすが、すぐに調子を取り戻して苦笑いを浮かべながら返答した。

「あはは……実は、そういうわけじゃなくて……」

「あ、そうなの？」

「うん。えっと、私もちよつとは手伝ったんだけど……それ、お姉ちゃんが私のために作ったものなの」

絢辻は、申し訳なさそうに事の経緯を説明した。

それを聞いた自分は、もちろん少しだけがっかりはしたが、それよりも違和感を覚えた彼女の行動に対しての疑問が解消されたことで晴れやかな気持ちになることができた。

「なるほどね。絢辻は少食なの？」

「うん。普段はおにぎりで済ましてるわ」

「そっか、それでこれの扱いに困ってーってわけか」

恐らく凶星だったのだろう。絢辻は苦笑いを浮かべながら何を話すかを迷っているようだ。

彼女はどうかやら罪悪感を感じてしまっているようだが、自分としては学食で食べられる以上の食事を恵んでもらえたことに対しての感謝しか感じていない。

まあ、そういうことを期待していなかったと言えば嘘になるが、むしろこれくらいの関係の方が心地よい。絢辻も困っていたとは言え誰にでも今のようなことを頼むとは思えない。そう考えると、気軽に話しかけられる友人として認められているようで嬉しかった。

「ありがとね。俺も肉類は好きだからさ。win-winってやつだ」

「そ、そう？ 喜んでくれたのなら良かったわ」

「うん。つてかむしろ、絢辻が作ったって言われた方がビビるわ。異性に気軽に弁当を作るようなキャラじゃないじゃん」

「ああ、それで戸惑ってたのね」

こちらの反応に安心したのだろう。絢辻も表情を緩め、場の雰囲気も明るくなり始めた。

「っーか絢辻の姉ちゃんすごいね。これ、女子が食う飯じゃないでしょ」

「……ほんとよね。まったく何を考えてるのかしら」

「え？？」

「あつ、ううん！ なんでもないの。それより、そろそろ食べ始めない？」

突然不穏な空気を発した絢辻であったが、こちらの言葉により慌てて表情を緩めると、話題を変えて話しかけてきた。

その様子に少々引つかかることはあったが、何やら有無を言わさなような雰囲気であったので、深く考えることはやめて箸を取る。

「んじや、いただきます」

「はい、どうぞ」

そうして、自分たちは談笑しながら、周りよりも少し遅めの昼食にありつくのであった。

ちなみに、絢辻姉の作った料理は並以上の美味しさではあったが、やはり胃への負担も少食の女子には耐えられない程度だったと述べておく。

4話

落とし物には奇妙な魅力がある。

それは、万人に共感してもらえそうな事柄では無いのだろうが、しかし、誰からも理解が得られないということはないはずだ。

明らかにボロボロの傘や片耳だけのイヤリング、紐が切れたストラップ、知らないカードゲームのハズレカード。それらはただのゴミであつても、目の前に落ちていればなんとなく手にとつてみたいという衝動に駆られることがある。

少なくとも自分は落ちているものには少なからず興味を向けるような人間だった。ガチャガチャのハズレやコンビニのお茶のおまけなど、比較的どうでもいいものであつてもとりあえず手に取り、飽きるまで持ち運んで適当に捨てるような事が多かった。

それらの行動原理を考えてみると、子供の頃からプレイしていたゲームや、読んでいた漫画に起因しているのかもしれない。

ファンタジーもののRPGで落ちている道具は有用なものが多い。漫画で有名なのはノートだろう。良い方も悪い方も。

そういった物語に憧れて人は落とし物に対して何かを妄想し、拾ってから再び捨てるまでの間それらを楽しむのかもしれない。

それは、宝クジの楽しみ方に近い。または、神社にお参りする際の願い事か。

何も起こらないのはわかってる。しかし、何かが起こることを完全に否定するのは悪魔の証明に繋がる。だからこそ、僅かの期待を胸に想像を膨らませ、その行為自体を楽しむことができるのだろう。

さて、ここまでの話を通して自分が何を伝えたかったかという点、それは一つ。

落ちているものを取りあえず拾ってしまうという癖は、決して卑しいものではないということだ。

金曜日、この日は6限が担任である高橋先生が持つ日本史の授業であり、大抵は授業終了と同時にホームルームが行われる。それは今日にも当てはまり、休み時間を挟まずホームルームに入ったため、他のクラスよりも早めに解散となった。

ただ、自分はクラスの皆のように直ぐに帰宅というわけにはいかなかった。荷物をまとめたところで高橋先生に声をかけられたからだ。話の内容は頼まれごとであり、授業で使った教材を職員室まで運んで欲しいということと、次の授業で使うビデオテープを資料室から探しておいて欲しいという内容だった。

今年度の委員会決めで日本史係に就任していた自分には断るという選択肢はなく、また、大した用事もなかったので問題なくそれらを引き受けた。

教材を抱えて職員室まで運んだ後、鍵を借りて資料室まで出向いたのだが、ここからの作業が結構な手間であった。というのも、資料室は各教科のビデオ教材を保管してある部屋なのだが、授業にそれらを使用すること自体が稀であり、それ故にほとんど部屋の掃除がされていないということと、棚の整頓も不十分であったためだ。

埃をかぶりながらそこら中に転がるダンボールをひっくり返し、目当てのビデオを見つけた時には、ホームルーム終了から40分は経っていた。

そうして、やっとの思いで見つけたそれを高橋先生の元へと届け、いくつか小言を言ってから荷物を取りに教室へと戻ったのであったが、扉を開けて中へと入った瞬間、床に黒い手帳が落ちていることに気がついた。

「……………」

落ちていたそれを拾い、観察してみる。

黒い革張りの手帳には丁寧な文字が箔押しされており、手に伝わる

ずっしりとした重さと、カバーの皮の手触りから安物ではないということがわかる。

それを手にした自分の頭に一番最初に浮かんだのは、持ち帰ってしまおうかということだった。

しかし、瞬時に考えを改める。それは良心が咎めたからではなく、11月に今年の手帳を手に入れたところでなんの意味もなさないということと、そもそも自分は手帳を使うような几帳面な性格ではないということに気がついたからだ。

それでは手に持つ手帳をどのように扱うかというと、持ち主を探すしかない。幸いなことにそれは自教室の中に落ちていた。よって、持ち主は限られている。

と言っても、恐らく11ヶ月間使用された手帳だ。仮に名前などが記されていないなくても、書かれた予定や筆跡などで大体の検討はつくはずだ。

そう思い立ったところで、その表紙をめくり、見返しに目を通す。残念ながらそこには持ち主を特定するような要素は見つけられず、なし崩しにページをめくっていく。

「うっわ……」

思わず口から声が漏れてしまう。

各月の予定欄には小さく丁寧な字で予定がびっしりと記されており、とても持ち主が同年代の学生だとは思えない。

しかし、書かれている行事の内容から、この手帳は教師のものではなくクラスメイトのものであると認めざるを得なかった。

スケジュールのページをパラパラとめくりながら、軽く目を通していく。

部活動についての内容は見られず、中々持ち主を特定できなかったのだが、ページが11月に差し掛かったところで、ある文字が目についていた。

『クリスマス委員』

このクラスでそれに所属している生徒は一人しかいない。と、なる

と必然的に持ち主は特定される。

どうやらこの手帳は絢辻の持ち物のようだ。そう思つて中を見返して見ると、字の丁寧さや、節々から感じ取れる持ち主の几帳面さなど、彼女の性格と合致する点が多々見られる。

そこまで思いついたところで、本当ならば手帳を閉じるべきだった。そもそも、スケジュール帳というものはプライバシーの塊だ。まあ、小学生の時のアレのように突き詰めた個人情報などは載っていないだろうが、予定だけでも人に見られることには多少の抵抗を覚えるはずだ。

それでも、周りに人がいないという状況と、多少の好奇心。それから、落し物を拾つてあげたという事実を免罪符として受け止めることができたため、ページをめくる手を止めることができなかつた。

読み流していたスケジュール欄を再び開き、何か面白いことが書かれていないかと目を通していく。

残念ながらそこには彼女の事務的な予定しか記されておらず、そのままページをめくつていくとメモ欄へと至つた。

本来白紙のページが続くその章も、かなり使い込まれているようだった。

内容に意識を向けると、そこには特定の日付の詳細な予定が書き込まれてある。『その日の何時から何をする。その後……』と言つたように。

しかし、そこにはそのような予定だけでなく、一言付け加える風に彼女の心境のようなものが書かれてあつた。

『夕食後にケーキ。カロリー取りすぎ！ 注意！』

『気になつていた参考書を購入。……今日は出費が多かつた』

スケジュール欄とは違い、気張らないで書かれたであろうことが、字の丁寧さや言葉遣いから感じ取れる。

それはまるで、普段は見られない彼女の心の中を覗いているようで、奇妙な背徳感と高揚感が気持ち昂らせる。

自分は、なんだかんだで絢辻のことをあまり知らない。それなりに仲が良いとは言つても、やはり男女の壁というものがある。それに、彼女は性格的にあまり自分語りをするような人ではない。

なので、たかが2、3行の文章だとしても、彼女の素を見るのは新鮮だった。

ここまでくると、手帳を閉じるという選択肢は頭から消え去っていた。やっっていることが少し過ぎているという自覚はあるのだが、自分の知らない絢辻の姿に対する好奇心を止めることができなかった。

胸が高鳴り、肩から上にかけての体温が高まる。このような感覚は久しぶりだ。

例えば、未成年飲酒や喫煙。教師からの三者面談の通告。親の私物を誤って壊してしまうこと。普通の子供であれば心が揺れ動くようなことが起こっても、背徳感というものを味わう機会は少なかった。それは前世の記憶があるが故に、物事において何がどうなるうとも成るように成るということを理解していたからだ。

よって、自分が行なっている行為に熱中してしまい、冷静さを欠いてしまっていたのだろう。荷物を取りに教室に入ったため、扉は開けっぱなしであったし、時間帯的に手帳の持ち主がそれを取りに戻ってきてもおかしくなかった。なので、まず初めに場所を移すべきだったのだが、そのことが頭からすっぽりと抜け落ちてしまっていた。

ドタバタと誰かが走る足音が、静まり返ったフロアに突如響き渡る。

手帳を読む行為に没頭してしまっていたために、階段を上がる小さな音は聞こえなかったのだろう。気がついた時にはその足音は随分と近くまで迫っていた。

咄嗟のことに何かを考える余裕もなく、慌てて読んでいた手帳を閉じてそれを片手で体の後ろに隠した。そして、体の向きを教室の入り口へと向ける。その動作が完了するのとはほぼ同時に、こちらへとこちらに近づいてきた人物は姿を現した。

「っ、橘くん！」

こちらの姿を視認した絢辻は、一瞬怯んだものの、すぐさま気を取り直して口を開いた。

彼女の顔は上気しており、呼吸は荒く、額からは汗が流れている。季節はとつづくに冬へと突入し、気温も下がりつつあることから、彼女

のその様子は相当焦って行動したからによるものなのだろう。

「あ、絢辻？ どうかした？」

「はあ……はあ……ちよつと、忘れもの、しっちゃって」

ドキリと心臓が脈打つ。彼女のいう忘れ物とは、間違いない背中
に隠している手帳のことのはずだ。

絢辻は乱れた呼吸を整えながらブレザーのポケットから取り出したハンカチで汗を拭う。それから少しして体の調子は取り戻した彼女は、しかし、表情は未だ険しいまま口を開いた。

「橘くん、黒い手帳見なかった？ 革のカバーの厚めのやつ」

「えっ？ いや、見てない……けど……」

しまった、と思った。その言葉を口に出したのはほとんど無意識で、気が動転していたが故に咄嗟に誤魔化そうとしてしまった。

それに気がついた時には手遅れだった。こちらの明らかな不自然な体勢。片手だけを後ろに回している状態で、さらに動揺も表に出てしまっていたのだろう。こちらの言葉を聞いた絢辻は、先ほどとは打って変わり、酷く落ち着いた、それでいてどこか冷酷さを感じさせる声で話しかけてきた。

「ふーん……じゃあ、その背中に隠しているものはなあに？」

「あ、その……」

「な、あ、こっ……」

なんとか場をやり過ごす方法を考えようとしたが、語気を荒げた絢辻の有無を言わさないとといった雰囲気から、それを諦めて手帳を彼女に差し出す。

「あはは……ごめん……」

「……………」

「あの、俺もさつき教室に戻ったばっかでき、いきなりのことでビツクリしちゃって。それで、つい……」

口の中が乾いて舌が上手く回らない。自分が何を喋っているかも把握できずに、とにかく口を噤んで重苦しい空気を発している絢辻に弁解をしなければと意思のもと、がむしやらに言葉を発する。

しかし、言い訳もすぐに尽きてしまった。苦笑いを浮かべるしか

くなり、場の重圧に耐えきれず視線を外す。10秒か、1分か。プレッシャーによって時間の感覚が麻痺しており、どれだけ沈黙が続いたかはわからないが、不意に絢辻が口を開いた。

「中、見たの？」

慌てて顔を上げると、絢辻の冷たい視線が顔に突き刺さる。

「あ、絢辻ってさ！ やっぱ字、綺麗なんだね！」

長く続いた沈黙は、自分の置かれている状況を客観視させるには十分な時間であった。冷静に考えれば、自分は特に悪いことをしたわけではない。いや、したと言えなかったのだが、少なくともこの場の空気に見合うほどの重罪ではないはずだ。

だからこそその明るい言葉だ。自分はいくまで手帳を拾っただけ。開き直って明るく接し、中を見たことは謝って飲み物でも奢ればいい。

しかし、それに対する絢辻の反応は期待していたものよりもずっと冷たく、むしろ今のが決定打となり、彼女の頭の中で何か結論を出させてしまったのだろう。

絢辻は、依然重苦しい空気を放ったまま、ふと緊張を解くと、大きいため息を吐いてから、どこか呆れたような、それでいて攻撃的な表情を浮かべてから口を開いた。

「あゝあ、マズったなあ。まさか落とすなんて思いもしなかったわ」「えっ」

自分自身に対して悪態を吐く絢辻は、自分の知る彼女の姿からは大きく外れ、まるでそこにいるのが別人のように錯覚させた。

絢辻の突然の変わりように先ほどとはまた違った戸惑いが生まれるが、彼女はこちらのことは気にせず、ズカズカと近寄ってくる、素早く左手でネクタイを掴み、右肩を内に入れることで顔と顔の距離を近づけた。しかし、自分と彼女にはそれなりの身長差があり、その行為は結果的に自分の鼻を彼女の頭頂部に埋めるような体勢へと至らせた。

ネクタイが引つ張られたことにより首が締め、不快な感覚が喉を襲う。しかし、鼻腔をくすぐる甘いシャンプールの香りと、喉元に吹き

かかる彼女の吐息、それから僅かに触れ合う部分から伝わる他人の体温が思考を麻痺させ、彼女を突き飛ばすことができず、その場に固まってしまった。

「見たんでしょ？」

動くことができない自分に対し、絢辻は囁くように話しかける。しかし、その内容は上手く頭に入らない。それはすぐ近くに感じる異性の気配に神経が集中してしまっているからだ。客観的に見ればあまりにもその場に不釣り合いなその思考ではあったが、初めて感じるその生々しい感覚から、気をそらすことができなかった。

しかしそんな頭のお花畑は、いつまでたっても反応を返さないこちらに痺れを切らした絢辻の言葉によってすぐに打ち消されることとなる。

「答えなさい」

先ほどとは違い語尾を強めて発せられたその言葉は、その場を支配するかのような冷酷さを含んでいた。

それによって我に返ることができのだが、冷静になつたらなつたで、今度は今の状況を把握することができずに困惑する。

「えっ、うっ……あの……」

言葉にならない声が口から漏れる。なぜ自分はここまで真剣に絢辻に問い詰められているのだろうか。その理由がわからないが故に返答の言葉が見つけれないからだ。

手帳の中は確かに覗いてしまった。それが悪いことだという自覚はある。しかし、それらの行為は、どちらかというと軽蔑に値するものであり、今の彼女の反応とはベクトルが違う気がする。

と言ってもいつまでも黙ったままにいるわけにはいかない。何がどうであれ、自分が責められているというのは理解できる。だとすれば、とりあえず謝罪の言葉を述べるべきなのだろう。

「ご、ごめん、えっと、名前とか書いてないかと思って……」

「あはははっ、もう何を言っても遅いわよ」

「はあ!?!」

突然、フィクションのヒーローのような笑い声を上げた絢辻は、囁く

ような声でそう語りかけてきた。しかし、その言葉はこちらの想定する経緯と噛み合わず、大きく動揺してしまう。

絢辻は、そんな困惑するこちらの様子を気にかけることもなく、畳み掛けるように言葉を発してくる。

「酷いことになるの……分かる？」

「あたしの秘密、見ちゃったんだもん。仕方ないよね〜」

「そんな顔しても無駄よ」

「この状況なら誰でも言うでしょ？ 『何も見てない』って」

「ふふっ、橘くんって隠し事下手だね」

意味がわからない。わからないのだが、とにかく彼女が何か勘違いをしているということはわかる。

どう考えても自分が覗いた手帳の中身と彼女の反応は釣り合っていない。プライベートを覗かれてキレるといのはわからなくはないが、それが『秘密』や『酷いこと』に繋がるはずがない。

「あ、あのさ、絢辻？ その……」

とにかく誤解を解く必要がある。なるべく落ち着いた、彼女をなだめるような声を出して話しかけようとした。

しかし、絢辻は話の途中で突然掴んでいたネクタイを話すと、サツとこちらから距離を取り、周りを気にするようなそぶりを見せてからこちらの話を遮って話しかけてきた。

「待って。……じゃ誰かに見られちゃうかも……」

「マジかよ」

急に冷静になるなよ。思わず口に出かけた言葉を慌てて飲み込む。というか、今更そこを気にするのか。

少しの間考えるそぶりを見せた絢辻は、顔を上げるとにこやかな表情で口を開いた。

「橘くん、この後ヒマよね？」

「い、いや、そうでもなかったり……」

「ピ・マ・マ・で・しょー！」

「つすね！ はい……」

彼女の口ぶりの、誰かに見られたらマズイようなことが今から起こるのだろう。そればかりはごめん被りたかったのだが、すぐさま向けられた鋭い視線と、有無を言わせないような口調から、逃げられないことを悟る。

「じゃあ、ちよつと付き合ってくれるかな」

「どこにつすか……？」

「いいから！ き、行きましょ！」

こちらの質問には答えずに、絢辻はカバンを持つと教室の外へと出て行った。こちらの視界からは消えたのだが、足音が聞こえないことから廊下で待っているのだろう。

頭の熱はとつくに冷えていた。だからこそ疑問から意識をそらすことができずにいる。

突如悪役ロールプレイのような話し方に變化した絢辻と、手帳に記されていたのであろう彼女の秘密。拗れに拗れた結果浮かび上がったそれらの謎が、頭の大半を占拠してしまい他に何かを考える余裕が無くなってしまった。廊下の外からは催促の音が聞こえる。このまま流されて良いのだろうか。そのような戸惑いは残るが、だからといって他に選択肢は思い浮かばない。とにかく最優先は絢辻の誤解を解くことなのだ。だとしたら話し合いを行うためにも彼女についていくしかないのだろうか。

思考がまとまらず、考えれば考えるほど混乱の渦に飲み込まれてしまう。そうやってその場を動けずにいると、二度目ということで先ほどよりも苛立ちを含んだ絢辻の声が廊下から聞こえてきた。

反射的に体が動いたことがきっかけとなり、頭の靄を振り払うように思考を止める。色々納得するためには、とりあえずは絢辻と話をするしかない。だとしたら今ここで何かを考えるよりも、彼女に従って話し合いの場に移動するのが先決なのだろう。

そう思い立った自分は、荷物を手に取ると、絢辻に連れられて学校を後にするのであった。

無言のまま足を進めた自分たちがやってきたのは、学校から少し離れたところにある寂れた神社であった。

長い石畳の階段を登った先にあるその神社は雑草と木に囲まれており、滅多に人が訪れることもなく、そして奥へと進んでしまえば人目につくことはまずない。

小さな本堂の横へと周り、縁側にカバンを置く。絢辻は少し先を歩いていたので常にその背中を眺め続けていたのだが、目的地にいたことでこちらを振り返り、やっと顔を合わせる事となる。

両腕を組んだ彼女は、挑発的な目をこちらに向け口を開いた。

「じゃあ、早速本題。あなた、どこまで見たの？」

絢辻のその発言によって、疑念は確信へと変化した。やはり、あの手帳の自分がまだ見ていないページに、彼女が人に見られることを恐れるような内容が書かれていたのだろう。

「……俺が見たのはスケジュールんことメモんこと」

「メモ欄も見たのね？」

「まあ……あのさ、絢辻。お前多分勘違いしてんぞ」

恐怖も焦りも感じさせないような単調な口調で絢辻に話しかける。彼女は返答はせずに無言で顎をしゃくり続きを促した。

それに従って話を続ける。

「確かに中は見たんだけどさ、そんなヤベーことが書いてあったとは思えないんだよ」

「なにそれ。フオローしてるつもり？」

「ちげーって！俺が見たのはその日の予定とか……つーか、メモ欄も予定のどこ。塾の時間とか、デザートになにを食うとか。それくらいしか見てないんだって」

少し語気を荒げてしまったが、言い終わったところで軽く深呼吸をして冷静さを取り戻す。そして、そのまま絢辻が口を開くのを待つ

た。彼女は目線をこちらに向けたまま、何かを考えているようだった。少しの間沈黙が続く。11月の乾いた風が周りの木々を揺らし、葉が擦れる音がやけに際立って聞こえた。それに音をかき消してもらうように、口に溜まった唾を飲み込む。後ろめたさは感じていないはずなのだが、なぜだか緊張感が高まり続けていた。

「そんなの、簡単に信じられる訳ないじゃない」

「違いねえ」

「っ、あなたねえ！ もう少し真面目に話をしてくれない!？」

絢辻の言葉に即答したところ、それを不誠実な態度として取られたのだろう。彼女は声を荒げてそれに対して文句を口にした。

自分としては別にふざけているつもりはない。状況的に、彼女がこちらの言葉を信じられないというのは当然のことだ。だからこそ、このままでは見た見えないの押し問答を続けることになってしまおうと思っただけの言葉だった。

「真剣だって。いま必死に話の落としどころを考えてんだよ」

「ふーん。で？ 橘くんは一体何を提案してくれるのかしら」

絢辻は目を細めながら、どこか挑発的な口調で尋ねてきた。

それに対して一瞬目線を外して考え込むが、すぐに顔を彼女の方へと戻し、返答する。

「なんも思いつかねえ」

「オーケー、それが遺言でいいのね？」

不穏な笑みを浮かべながらジリジリとこちらに近づいてくる絢辻を両手を前に突き出して止める。

「待って、待ってください、ほんと、続きがあるから」

そう言ったところで彼女は思いとどまってくれたようだが、無表情でこちらを見つめており、次にふざけたことを抜かすと容赦はしないと目で語っている。

「あのさ、絢辻は最終的にはどうしたいわけ？」

「どうって何よ」

「いや、だからその……お前はさ、手帳の中を他の人に知られないように口止めしたいっていう認識でオーケー？」

「……そうね。できれば中を見た人間はこの世から消し去りたいところだけど、その辺りが妥協点かしら？」

ナチュラルに物騒なことを呟く絢辻。あの手帳には一体何が記されていたのだろうか、今更ながら気になって仕方がないが、なんとかそこから意識をそらして話を続ける。

「いや……俺としては冤罪で消されるのは勘弁して欲しいんで……とりあえず、こっからは仮に俺が中を見ていたとしても、それを口外しないための方法を探すってことでいい？」

「ええ」

「ん。で、どうすつかね」

と、一応そこで考え込む仕草はしたものの、どうすれば絢辻に納得してもらえるかは全く思いつかないので、彼女が自分から口にするのを待つ。

しばらくして顔を上げた絢辻は、多少躊躇いながら言葉を発してきた。

「……あなたの秘密を教えてくださいとか」

「俺の秘密ねえ……」

自分の秘密と言われても、そんな大層なものほとんど持ち合わせてはいない。流石に『実はぼく、並行世界の前世の記憶があるんです』なんて言うのは無理があるというか、最悪ふざけていると取られ、せっかくなだめた彼女の機嫌を悪化させてしまうかもしれない。

「絢辻のそれに見合うって、どれくらいの秘密を言えればいいのさ」

「……そうね。見られたら学校にいらなくなるような事かしら？」

「お前、そんなこと手帳に書くなよ……」

心からの叫びだった。全く想像がつかないのだが、あの絢辻自身にそこまで言わしめるような内容を、他の人の目につく可能性のあるものに書かないで欲しかった。

「うるさいわね！ 誰かに見られるわけじゃないでしょー！」

「思っクソ見られてんじゃねえか！ いや！ 見てないけどー！」

「あー、もう！ そんなことより、あなたにはあるの!? 私に見合うような秘密ー！」

会話が熱を帯び始めたところで、強引に話題を変えられた。正直ツツコミどころが多すぎて色々言い返したかったのだが、有無を言わさないような雰囲気で見られたため、仕方なく引き下がる。

「んー……へビイな秘密ねえ……」

「人に言えないことの二つや二つくらいあるでしょ」

「人に言えない……かはわかんねえけど、俺と親父の血が繋がってないとかは？」

家庭の事情としてはそれなりに気を使わせるような内容である気がする。案の定、絢辻はなんとも言えないような表情を浮かべてこちらを見つめてきた。

「……それを聞かれたとして、あなたは学校にいらなくなるの？」

「いや、別に」

「じゃあ釣り合っていないじゃない……!」

即答すると、絢辻はぶるぶると震えながらこちらを睨んできた。

一応自分のようなちっぽけな個人が持つ秘密の中では、それなりに上位に上がるような内容を述べたつもりだったので、これで釣り合わないとなればどうにもならないだろう。

代案が浮かばずしばらくの間思考に耽っていたのだが、ふと、大きな溜息を吐いた絢辻は、どこか脱力したような声で話かけてきた。

「はあ……もういいわ。これ以上あなたに何かを求めても無駄だろうし」

「ん？」

先ほどまでとはかけ離れた絢辻の態度に、躊躇いながらも顔を上げる。彼女はこちらを気にせず荷物を手に取ると、改めて顔を合わせてから口を開いた。

「じゃ、あたし帰るから。手帳の中を見てたなら、絶対に人には言わないように。もし口外したならそれなりの報復をさせてもらうから」

「えっ? ちょよ、ちょい! 待てよー!」

それだけ言うと絢辻はその場を立ち去ろうと歩き始め、それを慌てて止めにかかる。

肩に手をかけられた彼女は鬱陶しそうに振り返ると、こちらを睨み

つけてきた。

「まだなにか？」

「なにかじゃねえだろ！ お前ほんとに納得したのかよ!？」

「もういいって言ってるでしょ。ここまでの会話で、あなたがアレを見てないだろうってのは大体わかったから。まったく、見てないなら見てないで堂々としてなさいっての……」

「はあ!？」

啞然とする自分を尻目に、絢辻はさらに話を続ける。

「あ、そうそう。あたしが猫かぶってることもないしよでね。ま、誰かに話したところで無駄でしょうけど」

「え、おい！ 待ってってー!」

「待ちませくん。じゃあね、橘くん」

再び彼女を呼び止めるのだが、今度こそこちらを振り返らずにヒラヒラと手を振ると、視界から消えていった。そして、自分は古びた神社の雑草だらけの庭に、一人取り残される。

今ので本当に話が終わり？

手帳の中を見られたかも知られたかもしれないとあれだけ焦っていたのに、急に投げやりな対応をされ、頭が追いつかない。

呆れられたのだろうか。絢辻の態度的に、そうだとしか考えられない。

諦められたのだろうか。関係を維持することを。だからこそ妥協点を探ることなく、投げやりになてを終わらせられてしまったのだろうか。

こんなことになるとは思ってもいなかった。絢辻が猫をかぶっていたことには驚いたが、それも自分にとっては何細なことだった。

話し合って、謝って、許してもらって。それで、笑い話で終わらせられると思っていた。

絢辻の中で自分は今でも友達と認められているのだろうか。

ただただそれだけが、心配なのであった。

5話

暗闇の中に溺れる。

呼吸はしている。しかし、体が動かせるのかどうかは自分にもわからない。狭いようで広いようで狭い、そんな空間にただ一人、何をしている訳でもなくただ存在している。

ただしそれは決して心地が良いものではない。

何をしても、何を考えても紛らわすことのできない不快感。許容できない居心地の悪さに押しつぶされるようなそんな感覚。それはまるで、広大な海のご真ん中で文字通り「溺れている」ようだなど、どことなく他人事のように考える。

そうやって、恐ろしいほどの孤独感を紛らわそうとするが、現在進行形で自分を襲うこの苦しみは少しも手を休めてくれない。むしろ、考えれば考えるほど思考がクリアになり、どんどん泥沼にはまっていってしまう。

思わず誰かに助けを求めたくなる。

両親、妹、学友、先輩、後輩、必死に周りの人の顔を思い浮べた時、ふとその人たちが本当に自分を助けてくれるのかと考えてしまう。妙に冴えた思考で客観的に自分との関係を見た時に、彼らが自分の孤独感を埋めるために行動してくれるのかと。

そうして、自分を助けてくれる人間などいないのだと自覚する。



「にいに！ いいかげんおきろおー！」

勢いよく引き戸が開けられると同時に太陽光が差し込んでくる。様々な感覚が一気に押し寄せ、一瞬にして意識が覚醒する。

というか、驚いて飛び起きた。

「つてえ!？」

と同時に、ドンと天井に頭をぶつけた。異様なまでに低いその天井は思ったよりかは柔らかかったが、反射的に叫んでしまう。

「うわっ！ ちよつとにいに！ 朝から大声出さないでよ！」

「……悪い、でもいてえ。なんか節々もいてえ……」

「もー全く。押入れなんかで寝るからじゃん……」

頭を摩りながら押入れを這い出る。

頭の痛みはすぐに引き、光に目が慣れると同時に目を開けるとその先には呆れ顔の美也の顔があった。

「……おはよ」

「おはよう！ 朝ごはんもうできてるから！ 早く着替えないと遅刻しちゃうよ！」

妹のテンションの高さに軽く眩暈がする。それでもなんとか返事をしようと口を開きかけたが、それよりも先に美也はドタバタと部屋を走り去ったため、吸った息を吐き捨てる。

思わず深呼吸をしたことにより脳に酸素が回り、やっと自分の状況を理解することができた。どうやら自分はベッドではなく押入れの中で眠っていたようだ。積まれた洋服を敷布団として眠ったことには無理があつたようで、体の節々が悲鳴を上げている。

床に這いつくばった体勢のまま手足を大の字に伸ばし、そして腰を捻ることで関節を伸ばす。一斉にポキポキと音を立てる自分の体に軽く引きながら、やつとの思いで立ち上がり、時計を見るといつも自分が家を出る時間まで30分程度しかないことがわかった。

自分にしては珍しい。あまり夜更かしすることがないので、休日ならまだしも、平日は7時には勝手に目がさめるよう体が馴染んでいたのだが。

そう思ったところで、思考は自然となぜ夜更かしをした理由に向く。

なぜ押入れで眠ったのか。確かそもそも寝付けなかった。昨日は学校で今日も平日。昨日何かあったか。

体感時間は長いが実際は一瞬なのだろう。順を追って記憶を辿るうちに、簡単にその理由へと辿りついた。

「……………」

一瞬で体が重くなる。胸を締め付けられるという表現があるが、本当に何者かが自分の心臓を握り締めたかのような感覚だ。

思い出した。

思い出してしまった。昨日の出来事を。

先ほどまでの気楽な気持ちとのギャップと、半時間後には学校へ向かわなければならぬという事実も相重なり、与えられた絶望感は大きく、思わずベッドに倒れこむ。

いつそのこと学校を休んでしまおうか。そんな考えが頭を過ぎったところで部屋の外から母が大きな声で自分を呼ぶ声が聞こえた。

「今行くよー」

それに対して空元気を振り絞り返事を返すと。のそのそと制服に着替え始める。

別に学校を休むのに罪悪感を覚えた訳ではない。今まででもなんとなく気だるい時には気分休むこともあったし、逃げたいときは簡単に逃げられるのは知っている。

それなのに学校へ向かおうとしている自分が何を考えているのかは、よく理解している。

悟った気になっても、いざ苦しくなると他人に期待をする自分に自己嫌悪。

「おいおい橘、朝から美少女と並んで登校かあ？ 冬の寒さも吹っ飛ばなあおい！」

朝の通学路、珍しく妹と一緒に学校へと向かって歩いてしていると、後ろから走ってきた梅原に声を肩を組まれ話しかけられた。

「……おう」

「お、おう？ どうした大将？ 腹でも痛むのか？」

梅原は明るく話しかけてきたのだが、どうしても軽口を返す気分にはなれず、変に間が空いてしまったので苦し紛れに返事を返した。

そんな自分の様子に目を白黒させた彼は、思わず美世の方へと視線をむける。

「あ、えっと、梅原先輩、おはようございます」

「あ、ああ。おはよう美也ちゃん。で、どうしたんだこいつ？」

「みや……わたしもわかんなくて、朝から調子悪そうだったから。それで一緒に歩いてるんです」

「マジか……おい大将？ ほんと大丈夫なのか？」

妹と会話を済ませた梅原は、余計に心配そうにこちらの顔を覗いてきた。

「いや……まあ、ちよつとな……」

「ちよつと？」

「ちよつと……メンタルがな、ヘラつちまつてさ……」

そう返したところで彼は呆れ顔で顔を上げた。

「なんだそりや、心配して損したぜ」

「いや、参ってるのはマジなんだけどさ……」

「あー、わかる。わかるぞ大将！ アレだろ？ 月に一度の男の子の

日！ 全く参っちゃもうよなあ本当に！」

「お前マジでいつペン死ねよ……」

今の気分とは関係なしに心からの言葉だった。一步離れて歩いている妹にも聞こえる声で、いつものようにしようもない下ネタを投げかけてくる友人を睨みつける。

こちらの目線の意味を理解した梅原は、やってしまったといった顔で閉口した。

少しばかり気まずい時間が流れる。

自分が少し過剰に反応しすぎたせいでなんとなく会話が途切れてしまい、どうしたものかと頭を悩ませたところで、おずおずといった風に美也が話しかけてきた。

「えっと、お兄ちゃん。友達前にいるから、先行くね」

「ん……サンキュな」

「ううん」

それだけ言うと美也はぺこりと軽く梅原に頭を下げ、とたとたと前の女子グループの中へ走って行った。

珍しく見かけた美也の外面と空気を讀んだ行動に思わず感動するが、隣で苦笑いで手を振る梅原が妹が見えなくなると同時に大きく溜息を吐いたことで現実へと引き戻された。

「あく……やっちゃまったぜ……」

「まあ、ギリセーフじゃね？ 俺がアウトみたいな空気にしたけど」

態とらしく頭を抱える梅原にそう返すと、彼はガバツと顔を上げこちらに詰め寄ってくる。

「ほんとだよ橘！ こっちは心配してやったのによお！」

「あはは、めんごめんご」

「テメエー！」

胸ぐらをつかもうと梅原が伸ばした手を体をひねって躲しながら、わざと笑いながら謝る

再び体を梅原の方へと向けると、彼は演技らしく振り上げた拳をため息をつきながら下ろし、こちらに話しかけてきた。

「それで、ほんとは何があったんだ？」

いつになく真剣な眼差しに少しばかりたじろいでしまう。

「んー、まーなあ」

「……なんだよ」

どうしたもののだろうか。

彼がこちらを気にしてくれたのは素直に嬉しい。それに、本当は誰でもいいから今の気分を……昨日のことを相談したい気分ではある。しかし、一体何を言えがいいのだろうか。いや、そもそも自分は何を一体そんなに悩んでいるのだろうか。いざ言葉にしようとするとき自分の考えを表すことができない。

理不尽に怒られたことに対する不満は多少はある。多少はあるのだが、だとしたら何故自分はこんなにも落ち込んでいるのだろうか。そこどころがどうしても腑に落ちない。

今自分の中を渦巻く感情は怒りではなく、悲しみと恐怖なのだ。

思った以上に考え込んでしまう。はっと我に返ったのは見兼ねた梅原がこちらに声をかけてきたからだだった。

「ま、なんかあつたらいつでも言えよ」

「……おう、サンキュな」

「なになに、気にすんなって。同じズリのネタを食った仲じゃねえか！」

「釜の飯だろ、いや、釜の飯も食ってねえけど」

そう返すと梅原は大きく笑いながらバンバンと背中を叩いてきた。こんなお調子者に少しでもしんみりきた自分にため息が出るが、不思議と嫌な気持ちにはならない。そういうえば胸に押しかかっていた不快感も今は気にならなくなっていた。

と、なんとなく照れ臭くなり思わずつま先で梅原のふくらはぎを小突く。

「いつてえ！ 革靴で蹴るか普通！」

「うるせえ、人の妹にセクハラするからだろうが」

「いや今頃か!? 間空きすぎだろ!？」

「3G回線なんだよ」

「いや意味わかんねえよ!？」

大げさに足を抱える梅原を笑いながら、わざと早足で彼の前を歩く。そうして少しして並んだ彼と、残りの通学路を毒にも薬にもならないような話をしながら進むのであった。

◇◆?◇

「はあ……」

もう何度目かわからない溜息を吐き出す。肺から二酸化炭素を吐き出す快感により、数秒の間気を紛らわすことができるからだ。しかし時間が経てばまた酸素を取り込むために息を吸わねばならない。そうするとせつかく吐き出した不安まで一緒に吸い込まねばならず、それをまた外へと出すために溜息を吐く。それはもはや、溜息ではなく深呼吸と言った方が良いのかもしれない。

梅原と共に登校した自分は昨晚珍しく夜更かしをしたことから来る睡魔に襲われ、ホームルームまでの少しの時間でも寝ておこうと考えた。

そして自分のクラスへと向かい、扉を開けたと同時に、教室の奥で友人と談笑している絢辻と一瞬目が合った。

その瞬間、わずかではあったが忘れられていた胸を締め付けられるような不快感が一気に再発した。

そうして今は、ホームルームも終わり1時限目の日本史の時間になっても、机に突っ伏している。

結局のところ。

心というものはそのなりに簡単にコントロールできるものではないのであった。

それはまあ、ごく当たり前のことなのだろうが、自分はそれを久し振りに自覚した。

そもそも、不安をこれだけ引きずるのが久しぶりだった。

人間関係、将来、大人からの叱咤。同年代の子供たちが不安や苦しみを感じるであろう事にも、基本的には心が動かされることは無かった。なにせ一度死んで生まれ変わったという自覚があるのだ。恐らく人間が味わうであろう最大の不安の先にあるものを知っているということは、自分がある種の悟りを開かせたような気にさせた。いや、悟りというのは文字の意味のままの崇高なものではないのだが、どちらかというところ”悟り世代”の悟りに近い。

ようは大抵のことがなるようになるということを知っているのだ。それ故にストレスのコントロールは容易に行うことができる……つもりだった。

しかしまあ、自分は所詮ちっぽけな人間だったということだ。メンタルトレーニングをしたことのない人間が僧侶やスポーツ選手のように感情のコントロールを容易に行えるようになるわけがない。むしろ耐性がない分どう向き合えばよいのかもわからない気がする。

そういう訳で、昨日の出来事、絢辻の手帳を拾ってからの一連によって出来た心のつかえはただ一瞬、偶発的に忘れることができただけであり、いまだ自分の胸の中央を陣取っている。

そして、自分はそのれに対して何も対処することができず、ただただうつ伏せのまま深呼吸を繰り返し、少しでも気を紛らわせようと単調な行為を続けるだけなのであった。

「橘くん！ そろそろ起きなさい！」

それもそろそろ限界のようだ。恐らく自分の横に立っているであろう高橋先生に名指しで声をかけられ、流石に無視するわけにもいかずのそのそと顔を上げる。

「うつつ」

「うつつじゃないでしょう、もう。一時間目から眠ってどうするのよ」「すいません、寝不足で……」

「平日に夜更かしするのがいけないんじゃない。なってないわよ」

あまり目立つのは恥ずかしいので早く会話を切り上げたかったのだが、高橋先生はそこから軽いお説教のような雑談を振ってきた。

それを適当に返ししながら周りの様子を確認するのだが、どうにも教室全体が騒がしい。こちらを向いている生徒など軽く見渡した限り呆れ顔の薫だけだった。

そのことに違和感を覚えた自分は先生の話を通り質問をする。

「あの……授業終わったんすか？」

「あなた本当に熟睡してたのね。今日は早めに切り上げて席替えよ。橘くんもとりあえず荷物まとめなさい」

そう言う和高橋先生はこちらに背を向け教卓へと戻っていった。

席替え……そういえば前の席替えからしばらく時間が経っているような気はする。

高校の席替えは大抵不定期に行われるものだろう。それはうちのクラスにも当てはまり、クラス担任の高橋先生のフィーリングで行われる。

そして今の時間は高橋先生が担当する日本史の時間だ。理系選択の自分たちのクラスでは日本史の授業も少ないので、一時間目に行くというのもわからないわけではない。

先ほどとはまた違った意味合いで、大きく深呼吸をする。今の自分の座席は教室の窓側、その一番後ろだった。つまりは教室の角だ。角席ということはつまり、左と後ろの二方向には座席が存在しないということ。よって再びこの席に座ることができれば普通にくじを引くよりも拘辻と座席が近くなる可能性はずっと低くなる。

それでは実際そんなことは可能かということなのだが、うちのクラスの前席替え方式ではむしろ二回連続同じ席を意図的に出すことのみ可能だ。

というのも、高橋先生の席替え方法は、まず生徒全員に紙を配り、そこに自分の座席の番号を書き、そしてそれを集めて箱へ入れ、シャッフルして引かせるというものだった。

つまりは自分の書いた紙を回収箱へは入れずそのまま拳に隠しておき、クジを引くフリをしてその紙を掲げれば同じ席に座ることができきる。

一工程でもチェックされれば失敗してしまう行為ではあるが、背に

腹は替えられない。高橋先生はどちらかという生徒を大人以上に扱う先生なので、そういった授業に関係のないところは一々疑うような真似はしてこなかった。角席は人気ではあるが、二回連続同じ席になることくらい誰にでも一度はあるはずだ。後から疑われることもないだろう。

まあ、最悪怒られれば済むだけの話だ。背に腹は替えられない。そもそもこんなタイミングが悪い時に席替えをする方が悪い。

◇◆?◇

「よろしく、橘くん」

「……よろしく」

6話

過敏になった神経は何気ない雑音さえもはつきりと捉え脳に伝達する。それ故に先生がチョークを黒板に叩きつける音がやけに大きく聞こえる。

髪の毛が触れる額や衣摺れが起こる背中には虫刺され以上のハツキリとした痒みを感じるし、筋肉に対して意識を向けているせいで体が強張り同じ体勢で居続けることができず、短い間隔でついそわそわと身体を動かしてしまう。

今の自分を例えるなら、まるで蛇に睨まれた蛙のようだった。絶対的な捕食者の前で逃げることができず、ただただ時が過ぎるのを待つことしかできない哀れな被食者——と、考えてるのはきつと自分だけなのだろう。自分の真横、数十センチ先に座っている少女の目には、恐れ戦く哀れなカエルの姿など眼中になく……というか、そもそも真横を気にする素振りすら見せない。彼女のその大きな瞳は壇上で講義をする教師、黒板、ノートのみを捉えている。その非常に洗練された動作からは、いかに彼女が真剣に思考に耽っているかがうかがえる。そんな彼女の周りにはある種の不可侵領域が形成されているようにも思えた。

そしてその雰囲気が自分と彼女との間の溝を表しているように思えて仕方がない

近いようで遠い、そんな距離感。手を伸ばせば届く距離に座っている絢辻はそれでも決してこちらを意識する素振りをみせず、そのもどかしさから自分は彼女についての思慮を止めることができずにいた。

絢辻は昨日のことをどう捉えているのだろうか。彼女とは1年以上の付き合いがある。異性間の友情は成立しづらいという意見はよく耳にする情報ではあるが……少なくとも自分は、絢辻詞との間には

確かな友情が存在していたと思ひ込んでいた。

顔を合わせれば雑談に興じることが日常だった。好きな本について語り合った。自分の内面、弱みをさらけ出したこともある。少なくとも自分は彼女のことを信頼していた。だからこそ、この関係もそう簡単に破綻するものではないと信じたかった。

考えれば考えるほど自己嫌悪に陥る。

結局、自分は絢辻のことを知らなさすぎる。何が友情だ。何が信頼だ。そんなもの、こちらが勝手に思ひ込んでいただけじゃないか。

昨日の放課後、彼女が自分に見せた顔こそ彼女の本性だったのだろう。あの利己的で攻撃的な言動は自分の中に存在していた絢辻詞像とは大きくかけ離れていた。だがそれに対して自分は嫌悪感を抱かなかった。自分は……

「ふっ……」

思わず笑いが吹き出してしまった。

彼女は違った。手帳に書かれていたであろう彼女の秘密、それと橘純一との関係を天秤に掛けた際、彼女は即座に後者を切り捨てた。自分が彼女の別の一面に対して何を思おうとも、彼女にとっては関係はなかったのだろう。橘純一は絢辻詞が弱みを見せることを許せる人間ではなかった。だからあの手帳を拾われ秘密を見られたという可能性が生じた瞬間、彼女の中で自分との人間関係は即座に終焉を迎えた。

終わったのだ。そこから先に何を取り繕おうとも、何を弁解しようとも、先は存在しない。それにもかかわらず友人関係を継続できるだろうと楽観的に捉えていた自分の言動は、彼女の目にはあまりにも滑稽に映ったに違いない。

悩んでも仕方がない。もともと自分と絢辻との関係はあまりにも独りよがり、端からそこに友情など存在していなかったのだ。それは手帳を拾おうとも拾わなくとも関係ない。自分と絢辻の関係はそもそも始まってすらいなかったのだから。

だから、絢辻と過ごした時間は彼女にとっては事務的な何かにすぎず、自分が勇気を出してさらけ出した内面は彼女にとっては無価値な

もので、そもそも彼女にとって橘純一はその他大勢の同級生となんなら変わりのない人間に過ぎなかったのだ。それは、それは本当に

寂しいなあ

流石に声には出さず、わずかに唇だけを動かして気持ちを外に吐き出す。そうしなければ不安に押しつぶされそうだったから。

このままではいけない。不安や孤独感という負の感情はネガティブな時に限って無限に湧いてくるものだ。増大し続ける負の感情は決して溢れることなく心臓のあたりに蓄積されていく。胸の重みは時間が経つにつれ増し、それによってまた不安を自覚する。負のスパイラルの完成だ。

2 限目からこれだ。今日の授業はまだ4つも残っている。ただでえ朝から感情が不安定だというのに、この状況はとてもしゃないが耐えることができない。とりあえず、今はこの苦しみから逃れる必要がある。今のままでは絢辻との人間関係について中身のある思考を行うことは決してできない。いや、考えたところでもうどうにもならないのが現実なのだが。

「先生……」

頭の中でネガティブな思考がひたすらループしていたことを実感した時点でこれ以上はもう限界だと感じ、勇気を出して教卓に立つ先生に声をかけた。

「お、どうした橘。珍しく質問か？」

「いや……ちよつと体調悪いんで保健室行ってきます……」

「保健室？ そりゃ構わないけど……大丈夫か？ 誰か付き添ってもらうか？」

「いやマジで大丈夫なんで！ 一人で行きます……」

「大丈夫か大丈夫じゃないかどつちなんだよ……」

先生が妙なことを言い出す気配を感じ、咄嗟に大声を被せてしまった。先生のツツコミに対して周りから笑い声が起こる。

それに対してより一層居心地の悪さを感じた自分は、足早に教室を立ち去り保健室へと向かうのであった。

◆◆？◆

夢を見ていた。

何の変哲もない夢だった気がする。忍者に殺されるとか宝くじに当たるとか、そんな現実離れしたのではなく日常の夢だった気がする。具体的な内容はもう思い出せないが、断片的には覚えている。

友達がいた。高校の男友達が3、4人。なんて事のない日常だ。多分放課後、学ラン姿のままどこか広い公園のような場所で駄弁っていた……気がする。

いやまて、あれは本当に知り合いか？

保健室のベッドの上でごろりと寝返りを打つ。制服姿のまま横になることは滅多にないので硬いブレザーとさらさらのリネンの肌触りに違和感を感じるものの、目蓋の重たさが故に目を開ける気にはならない。

それでも中途半端に意識は覚醒しており、仕方がないので寝ぼけた頭のまま思考に耽る。

梅原ではなかった。それに、ケンでもマサでも。

てことは誰だ？ 他に自分が特別仲がいい男友達、それもグループで連むような奴っていたっけな。いやいないな。

というか学ランって何なのだろうか。輝日東も中学の頃も制服はブレザーだ。それこそ、学ランを着た経験なんて自分にはない。

「ん」く……」

「……」

再び寝返りを打つ。

どうにも腑に落ちない。夢に他人が出てくるということはまあ、よ

くあることだろう。夢とはもともと複雑なものではあるし、そもそも自分は目が覚めたことを自覚した時点で夢の内容をほぼ忘れてしまっていた。こんなことにいちいち違和感を覚える方が不自然なのだが、何かが引っかかる。

「あゝ……」

「……」

思い出せそうで思い出せない、そんなもどかしさが気持ち悪い。何かを忘れているような、何かを思い出せずにいるような、それだけは理解しているのだが、何をと言われると見当もつかない。

というか、

今は何時だ？ 寝起きの微睡具合から見て保健室に来てから結構な時間が経過しているはずだ。それこそ、1時間や2時間では済まないはずだ。

養護教諭は今この部屋にいるのだろうか。頭が回っていないからからつい変な声を出してしまったが、それを聞かれていたと思うと段々と羞恥心が増してきた。

流石に体を起こすか。

そう思い立ったところでゆっくりと目蓋を開けた。

目に映るのは茜色に染まった天井。日が落ちる時間がかなり早くなったとはいえ、流石に今は放課後だろう。

状況が理解できたところで涅槃の体勢で肘を起点に体を起こそうと通路側に寝返りを打つ。

目に飛び込んできたのは露出した2本の脚。男のものとは違う華奢なそれは、しかしきつちりと揃えられどこか力強さも感じられる。

そのまま目線を上げる。膝の上には一冊の本。文庫本ではなくハードカバーのものだ。

さらに目線を上げる。きつちりと背筋を伸ばして腰をかけているのだろう、張った胸はそれでも起伏に乏しく、だからといって女性らしさを感じ取れないわけでは無い。

そうして顔を上げきったところで、ベッドの横に広げられたパイプ椅子に腰をかけていた誰かとやっと目が合った。

「あら、おはよう」

背筋を伸ばし膝の上の本に両手を乗せ、覗き込むような形でこちらを見つめていた絢辻は自分と目が合うとあっけらかんとした態度でそう口にした。

「絢辻……」

「はい絢辻ですが？」

今の状況が理解できないのと、眠りに落ちる前の記憶を思い出したことで心臓がどきりと脈を打つ。

なんとか言葉を振り絞ったがそれ以上は出てこない。それに対して絢辻は口調を変えず返事をした。

「なんで……」

「なんでここに居るかって？」

コクリとうなずき肯定の意思を返す。すると彼女は目を瞑り、茶化すような口調で言葉を口にした。

「授業をサボって昼寝してる誰かさんに荷物を届けるよう頼まれた絢辻は、間が悪いことに先生が保健室を離れなければならぬ時に来てしまい、目が覚めるまでここにいてくれと頼まれたので仕方なく椅子に座って本を読んで時間を潰していたのでした。まる」

そう言い終わると口を閉じた絢辻は視線を下に向ける。確かにそこには自分の通学鞆が置かれていた。

礼を言うべきなのだろうが、どうにも言葉が出てこない。絢辻の方もそれ以降は口を閉ざしたまま、それでも目を逸らすことなくこちらを見つめている。

会話に空いた少し間を彼女は終了の合図と受け取ったのだろう。小さなため息を吐いた絢辻は平坦な口調で言葉を切り出した。

「ま、大丈夫そうね」

本を鞆にしまった絢辻は立ち上がるとスカートを軽く手で叩く。

「教室でいきなり吹き出したときは気でも狂ったかと思ったけど、寝起きで女の子を視姦する元気があったとは。心配して損したわ」

「いや視姦なんてしてねえよ！」

予想外の言葉に思わずつつこんでしまった。しかし絢辻は相変わ

らずあつけらかんとした態度で言葉を紡ぐ。

「してたじゃない。スカートの中を覗こうとそれはもうねちっこい視線で。訴えようかしら？」

「いや、それは寝起きで頭が回らなかつたからで……っーか、なんで俺が笑ったこと知ってんだよ。ずっと前見てたじゃん」

「そんなの前見てても気づくわよ。席隣なのよ？ 馬鹿なの？」

言い返す言葉もない。

こちらが口を閉ざすのを確認した絢辻は椅子を畳み、床に置いてあつた彼女の通学鞆を手に取つた。

その姿を見た自分は慌てて口を開く。

「ちよ、ちよい！ 待てよー！」

「はあ？」

動揺する自分の姿を見た絢辻は渋々鞆を置くと両腕を前で組み、顔をしかめて話しかけてきた。

「まだ何か？」

「い、いや、何かあるって訳じゃないけど……」

「あつそ。それじゃあたし帰るから」

「ある！ あるから！ 頼むからもう少し待ってくれ……」

項垂れながら力なく懇願する自分の姿を見た絢辻は、大きいため息を吐くと鞆を放り投げ再びパイプ椅子を開いた。そしてずかりとそれに腰をかけると手と脚を組みこちらを睨みつける。

自分の鼓動が煩くて仕方がない。

全身で不機嫌を表現する彼女だが、それによるプレッシャーのせいであつた彼女の顔から目を逸らしてしまった。

何か話さなければ。今が絢辻と和解する最後のチャンスなのかもしれない。そう理解しているのだがまるで喉を締め付けられているかのように言葉を発することができない。

” 昨日はごめん ”

この言葉が正しいかどうかを判断するほどの余裕はない。やっと頭に浮かんだ謝罪の言葉を口にしようと思ひ立ったその時、絢辻の方が先に口を開いた。

「橘くんって、変わってるわよね」

予想外の言葉に驚いた自分は顔を上げ絢辻の表情を窺う。眉をひそめているものの、彼女は先ほどとは打って変わりどこか呆れたような表情を浮かべていた。

「昨日の今日で、普通あたしに関わろうなんて思わないわよ」

「そんなこと……」

こちらの否定の言葉を無視して彼女は話を続ける。

「クラスのみんなに慕われる優等生の絢辻さんは、実は猫を被っていて落とし物を拾ってくれた親切なクラスメイトを恫喝するような人間でした」

「それ自分で言うか普通」

「あなた余裕があるのかないのかどつちかにしなさいよ!!」

反射的に突っ込んでしまった自分を絢辻は大きな声で怒鳴りつけた。

その威勢に再び萎縮したこちらの姿を見た彼女は、こほんと咳払いをすると僅かに赤らんだ顔を取り繕うかのように口を開いた。

「とにかく！ まともな思考してたらあたしに関わろうなんて思わないでしょ。それなのにどうしてそんな顔であたしを呼び止めるのよ」

彼女のその言葉は間違いなくこちらに投げかけられた疑問なのだが、どこか自分に言い聞かせているかのように感じられた。

「そんなの……」

何かを考える余裕など自分にはなかった

それ故に、真っ直ぐこちらを見つめる絢辻に向き合うように彼女の顔を見つめながら自分の心をそのまま口に出す。

「俺はお前のこと、友達だと思ってるから……」

それ以上言葉が続かない。僅かな静寂が二人きりの保健室を支配する。

「これ単純な疑問なんだけど」

その静寂を破ったのは自分ではなかった。

「あたし達ってそんなに仲良かった？」

「……俺はそのつもりだけど」

絢辻は目を瞑りこちらの言葉を反芻する。

「でもそれって猫かぶってる時のあたしでしょ」

絢辻の言わんとすることは理解できた。そしてそれは今日一日自問自答し続けてきたことであり、明確な答えを見つけることの出来なかつた事象でもあつた。

自分は絢辻詞のことを何も知らない。彼女が猫を被っていたことも、その原因も、彼女の抱える苦悩も。

今まで自分が接してきた絢辻詞は彼女にとっては本当の自分ではないのだろう。上面でしか関わることのなかつた相手が友情だなんだと語つたところで何をほざいたものかと感じるのは当たり前のことかもしれない。

「確かに俺はお前のこと何も知らなかつたよ。猫かぶってたことも、手帳のことも。俺の中の絢辻詞はお前にとつては表面上の自分だつたかもしれない」

「そうよね。だから、この話はここで終しまい」
「でもさ!」

ただ、それでも。

「俺は絢辻のこと、友達だと思ってるんだよ。本当とか偽物だとかそんなことはわかんない。でも少なくとも俺にとつてはお前と過ごした時間は、俺が見てきた絢辻詞は偽物なんかじゃない」

「……意味がわからないんだけど」

「人間ってさ、そんな真っ直ぐなものじゃないって。裏表のない誠実な人間なんて物語の中にしかいないんだよ。お前が猫かぶってる自分のことをどう思ってるかはわからないけど、それが完全な偽物なんてことは無いと思う」

人間誰しも別の自分の顔と言うものを宿している筈だ。問題は、それを自覚しているかしていないか。絢辻の場合は前者だ。それ故に彼女の考える素の自分との乖離に苦しんでいたのだろう。

「今こうして話しててわかつたよ。やっぱり絢辻は優しいって。口調や雰囲気なんかは確かに別人かもしれないけどさ、中に通ってる芯は”絢辻詞”のものなんだと思う」

「やさしい？ 何言ってるの？」

「穏やかかって意味じゃねえよ。思いやりって言うのかな。細かな気配りとか、なんだかんだで相手のことを考えてくれることとか。俺はお前のそういうところがその……嫌いじゃない」

絢辻のその丸く大きな瞳は今、俺を、俺の肉体のその奥を覗くかのように大きく開かれこちらに向けられている。

今しかない。フィルターをなしに、彼女の心に自分の気持ちを伝えられるチャンスは。恐らく。

「今までの絢辻が全部偽物みたいなこと言うなよ。お前はそんな薄っぺらい人間じゃないって……」

「……」

「とにかく！ 俺はお前のこと友達だと思ってるから！ もしお前のことを全然理解してないって理由で友達やめなきゃならないってのなら、俺は本当のお前と接したい。てかさうする。俺も結構猫かぶってたし、これからはクソウザ絡みしてやるから覚悟しとけよ！」

自分の気持ちをぶつけるかのように捲し立てたため息が切れる。心臓も動悸が激しく痛みさえ感じるようだった。顔も熱い。頭で考えずに話したため何を喋ったかは今すぐに自分で理解することはできないが、なんだかとても恥ずかしいことを言った気もする。

しかし、自分は清々しい気持ちだった。

やっと自分の気持ちを絢辻に伝えられた。それを彼女がどう受け止めるかはわからない。それでも、フィルターに拒まれることなく彼女の心に直接訴えかけることができた。

進歩はしていないだろう。今のは全部一方的な気持ちを語ったに過ぎないから。

だが、それでもいい。決めたのだ。橘純一は絢辻詞の友達でいると。

拒絶されるかもしれない。いや、きっとされるだろう。でも上等だ。彼女が折れるまで何度だって話しかけてやる。こちらも意地だ。絢辻が今までの関係が全部嘘だったなんて、俺の大切なものを偽物呼ばわりするのを認めるわけにはいかない。

自分の興奮はまだ治まってはいない。息を切らしながら、それでも決して視線を逸らすことなく絢辻を見つめ続けていた。

そうしてどれだけの時間が経過したのだろうか。不意に視線を外した絢辻は顔を隠すように額に手を当てると肺の空気を全て吐き切ってしまうかのような大きな溜息をついた。

そして空っぽになった肺に酸素を溜め込むと、ゆっくりと口を開いた。

「橘くんさあ、よくそんな恥ずかしいこと堂々と言えるわよね……」

呆れたようなそんな口調。しかし、そこからは不快感や嫌悪感を感じられなかった。

「はあ、わかったわよ……」

そう言い終わると突然立ち上がった絢辻は、少し前屈みになりベッドに腰をかけている自分に向かって手を差し出しこう言った。

「とりあえず、よろしく」

「……おう」

握り返した彼女の掌は暖房の効きが悪い保健室なものにもかかわらず、まるでカイロのように温かかった。